

森の夢

醍醐麻沙夫



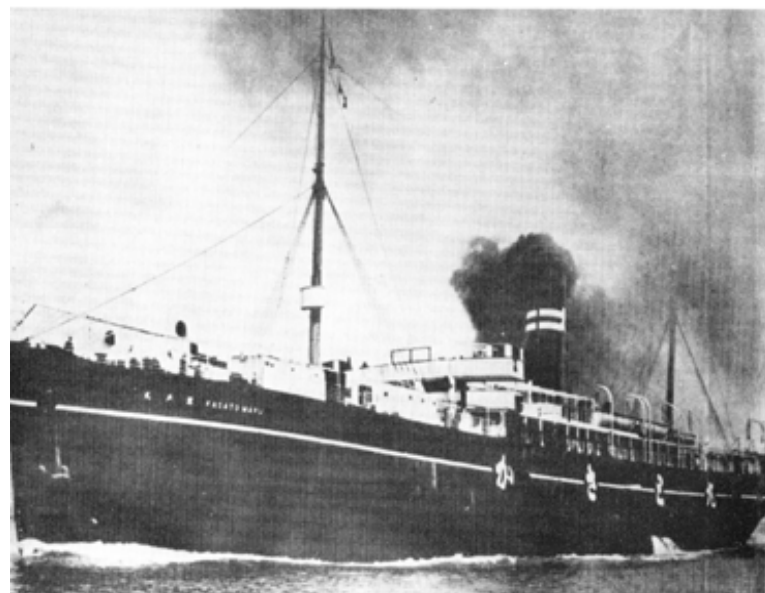
冬樹社版 表紙



フィゲラの大木。サンパウロ州の森林に多い木。
根が張っているのでかなり上から伐る。



開拓地の山伐り風景（サンパウロ州）昭和初期。



皇国殖民会社の第1回移民船笠戸丸



昔のブラジル移民船

静岡県小笠郡栗本村土族榛葉健吉の次男として生れる。後に叔母の平野家へ養子。東京外国語学校スペイン語専修科を中退して、第1回ブラジル移民通訳として他の四名とともに渡伯。民間人として初めての入植地「平野植民地」を拓き、成功を目前にして薨れた。大正8年2月6日死、34歳。



平野運平

明治11年（1878）山形県北村郡亀井田村に生れる。28歳のとき日本を飛び出してチリ行きの船に乗ったが、船中でブラジル視察に行く皇国殖民会社社長・水野龍と知り合いそのままブラジルに來た。移民のテストケースとして1人でコーヒー園で働いた。日本移民の來る2年前である。昭和45年、サンパウロ市にて没。



鈴木貞次郎

明治9年熊本県下益城郡杉山村生れ。明治40年東京帝国大学法学科卒。翌年皇国殖民会社ブラジル代理人として第1回移民船笠戸丸で渡伯。大正3年帰国し、大正6年再び渡伯し移民たちの支柱としての活動を続けた。今日「移民の父」と呼ばれている。孤翁と号して俳句を趣味とした。昭和11年7月6日没。



上塚周平

平野運平

鈴木貞次郎

上塚周平



山焼きをしたあとの新畑風景。植っているのは米。



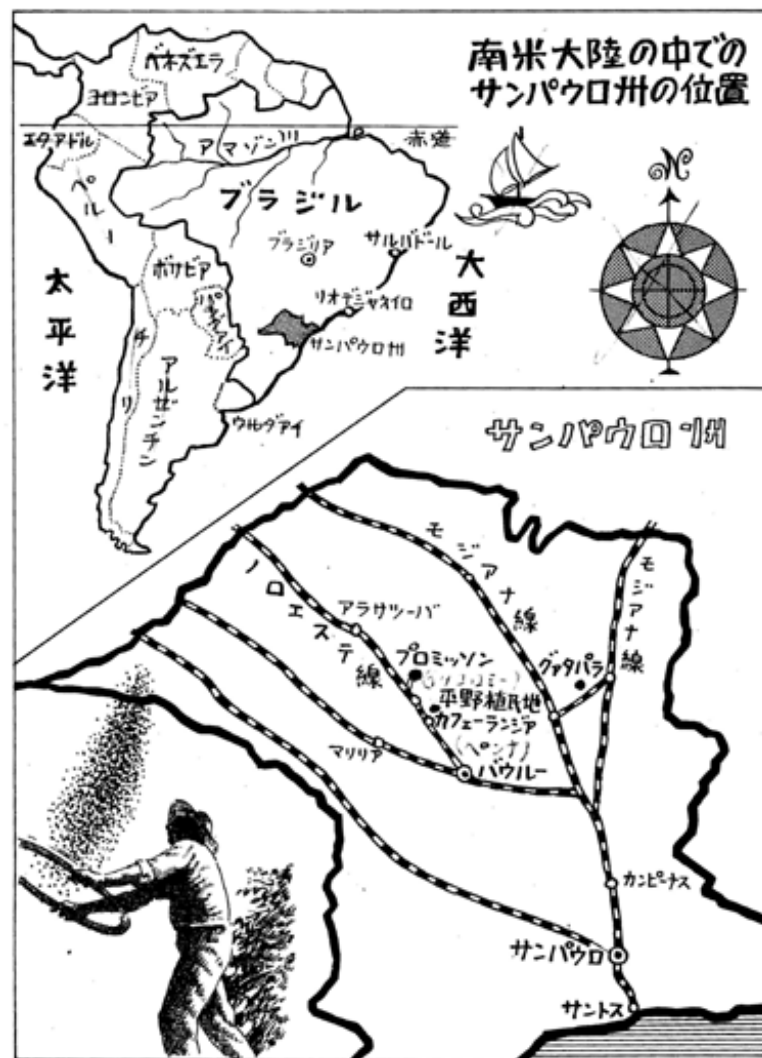
コーヒーの実の採集風景。昭和初期。



現在のサンパウロ市日本人街。正式には「東洋街」と呼ばれる。

取材中の著者×サントス＝サンパウロ間、海岸山脈の鉄道線路にてへ

撮影 兵頭秀樹



もくじ

森の夢

聖人たちの湾

中国人の墓

あとがき

『森の夢』

第一章

ブラジル！ サンバとコーヒーの国。

わけても赤道に近いサルバドル港の街は陽気だった。

暑い一日がやっと終り夕暮れになると、楽士たちがあちこちの公園の音楽堂で賑やかなサンバを撒き散らす。サンバの音楽は海からの微風に乗ってヤシの葉をそよがせ、涼しさと憩いをリズムの打ち水のように露路の奥まで運ぶ。

コルネットのくぐもった高音やドラムの力強い響きは、波止場に並んだ葉巻やココアの輸出商会の重々しい金文字の看板を飛び越して、港内に投錨している外国船の人々の旅情までもかきたてるのだった。

背後から残照を受けてイギリス汽船の甲板に五人の

日本人の若者が並び、水面を伝わってくる楽音を深刻な表情で聴いていた……。

彼等は五人とも濃い灰色に黒い縦縞の三つ揃いの背広を着込んで山高帽をかぶっている。いくら夕刻とはいえ熱帯である。山高帽の下顎にはジツトリと汗が滲んでいた。裸の黒人労働者がその異様な風体に呆れたように何度も振り返りながら、縄梯子を伝わって下船していった。

「賑やかな陽気な音楽だ。今まで聞いたこともない」
五人の若者の一人が緑に埋った急坂の上下に拡がる原色の街を眺めながら重々しく言った。

「本当だ。長い船旅の疲れもすっかり忘れて、心が晴ればれとしてくるようだ」

一人が相槌をうつて頬をゆるめた。

「しかし……」

と他の山高帽が揺れた。

「この音楽がはるばる東洋からやって来た我等五名を歓迎する為であるならば、やがて市長たちの一行が挨拶に来るにちがいない」

「……」

「誰が我等を代表して返礼の演説をするのだ？」

暫くとまどったような沈黙が流れた。

「僕はダメだ」

と一人が言った。

「僕もポルトガル語は聞いたことすらない」

「聞いたことのない言語を話せる訳がないではないか」

「そうだ、そうだ」

「しかし……」

と再び山高帽が揺れた。

「我々は第一回ブラジル移民の通訳としてやって来たのだからなあ。通訳が話せないと言い張るのも妙ではないか」

「それはそうだが……」

意気消沈した返事があつた。

「この港の市長たちが来ると困るが、現実には話せないのは如何ともなし難い。我等は東京外語のスペイン語科で学んだとはいえ、スペイン語とポルトガル語はやはり異なつた言語だ」

「そのスペイン語でさえ、まだ在学中だった我々の実力は頼りない」

「音楽をかなでて歓迎してくれる異国人の心根はうれしいが、やはり困つたものだ」

月見草が咲くように、溜息がホッと若者の口から漏れた。

「そんな弱音を吐いているうちに、いまにも市長の一

行が来たらどうするの！」

「仕方ない。我等一同及ばずながら知っているかぎりのスペイン語を口々に並べたてて、返礼の挨拶にかえることにしようではないか」

「そうだ、そうだ！青雲の志を抱いて新世界にやつて来た我等の夢と希望を、これほどの街の市長を務めるほどの人物ならたちどころに理解してくれるにちがいない」

他の四つの山高帽も大きく揺れてうなずき合った。

——再び若者たちは姿勢を正して、暮れて行く異国の街に熱烈な視線を送った。

茜色はどうに消えて、街の上の東の空は青く光っていた。丘の上の教会の尖塔やヤシの木のシルエットがエキゾチックな舞台装置のように連なっている。このサルバドールの市街には教会が三百六十五あると言われている。実際の数はともかく、それほど教会が多いのだった。

一きわ壮重なカテドラル寺院の二基の鐘楼を中心に、カルモ教会の細い尖塔や聖サンフランシスコ寺のずんぐりしたドームなどが、その影を帝王ヤシに護られながら空に浮んでいた。中天にはすでに星が強く輝きはじめていた。

「すっかり暗くなってしまった……」

一人が呟いた。

「腹も減ってきた」

もう一人が閉口したように言った。

「ことによると市長の一行は来ないのではないか？」

「しかし、賑やかな音楽はまだ続いている。我々の旅の疲れを思って、音楽だけを届けて市長たちは姿を現わさないのかもしれない」

「思いやりのある人々だ」

会話はまた途切れ、暫く時間が過ぎた。厨房から食事の匂いが立ち登ってきた。

「……腹が減ったなあ」

若者たちの健康な体は緊張していても、時間になると激しい食欲をうったえるのだった。

「これだけ音楽を聴いたのだから、そして我々の心は充分に慰められたのだから、食事に降りても失礼ではないだろう」

自分自身に言いかけすような声だった。

「そうだ。……しかし、この素晴らしい景色を眺めたあと、また、あのすえた臭いの充満する陰気な船底の三等船室へ潜り込むのかと思うと、気が滅入る」

「ウラジオストックへ上陸し、露都モスコーを通過してロンドンへ――」。長旅は思わぬ出費のかさむもの

だった」

「お蔭で、ロンドンからは三等船客の切符を買うのがやつとだった。皇国植民会社の水野社長は“諸君はブラジルに着いたら外交官待遇でもてなされるのだ。諸君もキチンとしてくれなければいかん”と激励してくれたが、その外交官がこんなみじめな三等船客では恥かしい」

「この船にもリオに赴任する若いイギリス人外交官が乗っているが、彼は三等書記官なのに一等船客で優雅な船旅を楽しんでいる。今夜は陸のホテルにねるらしく手荷物を持たせて下船した」

「それにひきかえ我々は、真水のシャワーさえ三日に一度しか使えず、あとは塩水で体を拭くばかり」

「青雲の志に燃える我々には船の待遇など少しも意に介さぬが、日本の国威に傷がつくのではないかと心配だ」

「ぼくもそれが心痛の種なのだ。歓迎に応えようにもポーターに払うチップすらない」

五人は潮風に吹かれながら、再び悩ましそうに溜息をついた。

一人が叫んだ。

「おお、そうだ。サントス港に我々を出迎えてくれる鈴木貞次郎とかいう男に電報を打とう」

「なんと？」

「我々の窮状をうったえて、大袈裟な歓迎行事を一切中止してもらおうよう至急奔走して貰うのだ」

「それがいい。それがいい」

若者たちは愁眉をひらいて、ゆつくりうなずき合いながら、ゾロゾロと狭い鉄の階段に消えていった。ハイカラをつけて山高帽をかぶっていると、どうしても言動が鷹揚になるのである。

船はブラジル大陸を右手に眺見しながら一路南下した。

数日後にリオに至り、一晚走り、翌朝サントスに入港した。明治四十一年（一九〇八）五月三日のことである。

ところが歓迎式典どころか、……港には誰も迎えに来ていなかった。

「……？」

彼等はホテル・インターナショナルという名だけは立派な古ぼけた木賃宿の屋根裏に部屋をとり、サンパウロ移民収容所気付で鈴木貞次郎に電報を打った。

鈴木は翌日の午後やって来た。彼は屋根裏から次々にゾロゾロ出てくる、自分と同年輩くらいの黒っぽい

背広に山高帽の若者たちを呆氣にとられて眺めた。アラビアンナイトの登場人物を見ているような気分だった。

色の白い男が「仁平嵩」（にへいたかし）と名乗った。キリッとした細面の小男は「加藤順之助です」と言った。

横柄な感じもする大男が「大野基尚」。優しい感じの「嶺昌」（みねまさる）。

小兵だがガツチリした男は「平野運平」と言って頑を下げた。

「鈴木くん、電報でも知らせたが途中の旅費がかさんで、現在の我々は大日本帝国外交官としての体面を維持できぬ状態にある」

一番年長の大野が沈痛な表情で言った。

鈴木貞次郎は、ブラジル視察に来た移民会社の水野竜に伴われて、二年前にこの国に来た。なんとなくチリに行って一稼ぎしようと思って乗った船に水野も乗っていて、移民労働者のサンプルとして目をつけられたのである。

開拓の先駆者になれと励まされて、自分もその気になって気負ってたった一人でコーヒー園労働に飛び込んだのだが、言葉も判らぬ酷暑の地でこの二年間辛酸をなめた。

久し振りに同国人に逢う感激とは別に、鈴木の中にムラムラと先輩意識が起つてきた。年も自分の方が少し上らしい。

第一、この五人の男はすごく滑稽だった。移民会社の社長に何とおだてられて連れ出されたのか知らないが、木賃宿でお揃いの山高帽なんかかぶって、日本を背負って立っているような様子をしている。

「外交官ねえ……」

冷淡に言つて、鈴木はジロツと大野を見た。大野は背が高いが、鈴木も大男の方である。

「ウム」

大野は真面目な顔で頷いて金縁のメガネを光らせながら、

「そうなんだ。これからの歓迎行事がどんなものか君に聞かなくてはならないが、我々としては」

「心配しなくていい」

アホらしくなつて、彼は途中で大野を制した。

二年近い労働で彼はコーヒー園がどんなものか知っていた。ドレイ制が廃止されたので、外国移民をドレイの代りにコーヒー園労働者として入れているにすぎない。

園主の下に数人の支配人がいて、その下に十数人の監督がいる。通訳の仕事は監督の命令を外国人労働者

に伝えるだけのことだ。そんな人間が四、五人来たからといって、一々歓迎行事をするほど物好きな人間はこの国にはいない。第一、通訳風情が外交官気取りで山高帽などかぶってコーヒー園に乗り込んでいったら、腰に山刀とピストルをぶち込んでいる荒くれ男の監督たちの嘲笑のまとなって、つまみ出されてしまうのがオチだろう。

「とにかくサンパウロへ行こう」

外交官のつもりで気取っている彼等の高慢の鼻をへし折る楽しみは後廻しにして、鈴木は五人をうながして外へでた。

子供たちがゾロゾロ後をついて来た。

彼等の荷物はサンパウロ移民収容所あてに送ってあるので、ほとんど手ぶらだった。

コーヒーの積出し港としてサントスは栄えている。街角のバーで彼等はコーヒーを飲んだ。初めてではないが、まだ旨いとは思えなかった。こんなニガイものどころがいいのか理解できない。しかし、このコーヒーのために五人はこうやっていま異郷の街を歩いているのだ。

「これが旨いのですかね、鈴木さん」

仁平が訊ねた。

「馴れたら旨いよ」

ぶっきら棒に鈴木は答えた。

彼の顔は日に焼けて掌はゴツゴツしている。それに比べると五人の通訳たちはずっと都会的でひ弱な感じだった。

サントスの街には汽水帯特有の、真水にうすめられた潮の匂いが漂っていた。その匂いをかぎながら狭い石畳の道をブラブラ歩いて停車場に着いた時は夕暮れになっていた。

人夫が焰のついた長い棒を持って、停車場前の広場のガス灯に火を点して廻った。青白い灯が夢のように点った。汽車はほの暗い空に赤い火の粉を散らしながら停っていた。サンパウロ行きの最終便だった。

サントス——サンパウロ間の鉄道は日本の新橋——横浜間に鉄道が敷設されたのとはば年代を同じくして英国の鉄道会社によって建設された。だから英人技師の中には東京とサントスの両方で仕事をした人も何人かいた、と会社の記録に残っている。

発車にはまだ間があった。鈴木は六人分の二等車の切符を買った。ここの二等は日本で言えば三等である。あたりはかなり暗くなってきた。「涸滝を見上げて着きぬ移民船」と一カ月後に上塚周平が詠んだ岩山が、停車場の向うに黒々とそびえていた。二本の線路

の行手に信号の赤ランプが点っている。そのランプの火は風にゆれてチラチラとまたたいていた。

ブラジルに着いても歓迎どころか、最下等の切符を買った案内人の姿を見て、五人とも流石に黙り込んだ。何となく話がオカシイと思いはじめたようであった。

鐘が鳴った。ランプが点ったうす暗い二等車に乗り込む五人の黒い姿が、鈴木には蚊食鳥のように見えた。

五人の通訳たちは日本移民が到着するまでの一カ月の間、サンパウロの移民収容所で鈴木の手先の仕事を与えられた。

鈴木はその頃は、他州からサンパウロ州に来る内国移民の登録事務をしていた。

自分たちの身分に対する彼等の幻影は日ならずして消えた。彼等は州農務局へ威儀を正して出頭し、皇国殖民会社社長水野竜が書いた農務長官あての紹介状をうやうやしく差し出したのだが、土地課長がそれを一瞥して、きわめて事務的に移民収容所長あての添書にくれたにすぎなかった。

どうも誇大宣伝にひっかかってブラジルに来てしまったらしい、と気付きはしたが、若い五人にとって

はそんな不満よりさしあたっては異国の風物の珍らしさの方が強かった。

サンパウロに着いた翌日に早々と娼婦街に出かけた。

嶺はリベロ・バダロ通りのロシヤ女のいる家へ入る姿を鈴木に見られている。

平野は日記に「探検料二ミル」と記した。「その値段では場末の女だろう」と後になって鈴木に書かれている。

五人が共同で部屋を借りた家は、收容所からほど遠からぬスペイン人の家だった。ドローレスという十六、七才の娘がいた。

スペイン語科で学んだので、スペイン人とならかなり意志を通じることができた。妻帯者で次の船で妻がくる大野と仁平は別として、他の三人は午後四時に仕事が終わって帰ってくるとドローレスのあとを歩いて歩いた。

彼女もおきやんな娘だった。スペイン語を喋る東洋人の若者たちを珍しがって積極的に話し相手になった。

五月といえばサンパウロは秋である。日差しは強いがベランダを渡る高原の風には涼しさが透明な銀のよ

うに含まれていた。彼等の下宿を毎晩のように訪ねた鈴木は秋の月の光を浴びたベランダに黒い影が二つ並んで、低い声で楽しそうに喋っている姿をよく見かけた。それが通訳五人男の誰なのかは判然としなかった。それで鈴木は、

バラの花咲くベランダに

ドローレスとひそめき談る人は誰ぞや
という、あまり上手でない短歌を作った。

……一カ月はまたたく間に過ぎた。

六月十八日に第一回ブラジル移民船笠戸丸が七八一人の契約移民と十人の自由移民を乗せてサントス沖に入った。

十九日の朝、下船した移民たちは波止場の引込線に入った十二輦の客車に乗って出発、十時頃サンパウロ移民収容所の引込線に着いた。

通訳たちはサントスまで出向く必要も所長に認められずに、収容所の広間で人々の到着を待っていた。

その時の自由契約移民の一人香山六郎が彼等の初印象を次のように記している。

「通訳の中で最も体格の立派な金縁眼鏡の黒服を着て手に山高帽を持った人は、柱にもたれてニコニコしていた。この人が大野基尚氏だった。一番小柄で、縞の

洋服に赤いネクタイをきちんと結びむぎわらのカンカン帽を横っちょにかぶって肩をいからし、固い顔をして偉そうに歩く男が加藤順之助氏だった。仁平通訳は普通の体格で縞服を着、色が白くカンカン帽をななめにかぶり、目が涼しい人だった。デブチンでチヨビ髭を生やし、血色が良くニコニコと下り眉毛の中背の男が平野通訳だった。髪が薄い、色の白い男、すべて小造りで話すとき口をモグモグさせていた人が嶺通訳だった」

この人物評は正確である。

五人はあくまで単なる通訳として東京で募集されたのだが、移民を従えて農場へ向った日から統率者としての能力をも要求された。クセの多い移民の群れを現地で束ねることが、青二才の語学生の手に残る仕事だったとしても当然である。

「小柄で固い顔をして偉そうに歩く」加藤順之助と、「色が白く目の涼しい」仁平嵩と、「すべて小造りで、話すときも口をモグモグさせていた」嶺昌の三人は、語学こそできたが指導者としてはたちまち失格した。良くも悪くも、最後まで移民たちの指導者として振舞ったのは大野基尚と平野運平の二人にすぎなかった。

大野は恵まれた体格を利用してハツタリで通したとい

うのが定説のようになっている。

前記の香山の文によれば、まだ山高帽に黒背広のア
ラビヤンナイト・スタイルでいるのは大野一人であ
る。ブラジルの役人に無視されたこのスタイルも、移
民を偉圧するには充分と彼は計算したのだろうか？。
ただ、その山高帽をかぶらず手に持っていた、という
処に若者らしいテレが残っているような気がする。

もう一人の平野運平は「デブチンで血色のいい中背
の男」と香山の目に映じた。平野は無口だが精力的な
男だった。中背とあるが実際の背はかなり低い。

大野と平野がニコニコしていた、のも偶然だろう
か？ 七九一人の未知の入間の群れを前にして、平然
としていられるタイプの人間と、思わず顔が硬ばって
しまうタイプの人間がいたとしても不思議ではない。

移民たちは収容所の二階にベッドを割り当てられて
荷物を運び上げた。すぐ鐘がなって昼食になった。ポ
ルトガル料理の干ダラの煮込みだった。北海の身の厚
いタラを水でもどして、ジャガイモやトマトと煮たも
のである。

汽車の中で出たサラミのサンドイッチが喉に通らな
かったので、油粥のようだと思いながらもお替りをす
る人もいた。

万事に勝手にちがっていた。水洗便所を知らないの
で水が出た！と叫んで飛び出したり、その叫びを聞いて
黒人の掃除人が駆けつけてくると、今度は黒人を怖
いと叫んで逃げだしたり……面喰うことばかりだった
が、初めての日本人を迎えた収容所の待遇もよく、
コーヒーの木に金が成っている国にやっと着いた、と
いうので誰もが陽気に浮かれていた。

中でも景気のいいのは家長たちだった。十年たった
ら大金持になって日本へ帰るという男もいれば、十年
などかかるものか五年だ、いや三年だ、と賑やかに騒
いでいた。

とにかく、一万円貯めたら帰る、というのが平均的
な夢だった。その夢のために、ブラジル側の一人六十
円の補助金があったとはいえ、借金をしたりして一人
当たり百六十五円の旅費を払込んで船に乗ったのだっ
た。

日本で百姓の日雇いが飯付き二十銭、巡査の月給が
十円の明治末に、ブラジルのコーヒー園で働けば一人
一月三十五円になるというのが、移民会社の宣伝だっ
た。もし家族五人で働いたら、毎月百七十五円という
途方もない金が転がり込む計算になる。家族の船賃の
借金など半年以内に返せ、あとは全て貯金だ。送金
だ。……その、夢のような国へようやく着いたのだっ

た。家長たちが有頂点になって騒いでいるのも無理はなかった。

皇国殖民会社からは、社長の水野竜とブラジル代理人上塚周平が来ていた。通訳たちは上塚と鈴木に協力してあらかじめ契約してあった六つのコーヒー園に移民たちを配分した。

この収容所の中には公認周旋人のボックスがあり、各国から来た移民たちは周旋人を通じて好む条件の農場と契約できるシステムになっているのだが、日本移民はすでに移民会社と農場の間でとりきめが交されていたから、改めて公認周旋人の手をわずらわす必要はなかった。

収容所に着いて八日目の早朝、嶺通訳は沖縄移民二十四家族と共に、カナン・コーヒー園へ向って、奥地行きの列車で出発した。

同日午前十時に大野通訳は笠戸丸で来た夫人と共に沖縄移民二十三家族を連れてフロレスタ・コーヒー園へ出発した。

翌日、二十八日の早朝、加藤通訳は各県混成の五十二家族を連れてゾーモント・コーヒー園に向った。長い船旅ですっかり親しみあった人々は、残るもの発つものお互いに痛切な別れと励ましの言葉をかけ合いな

がら別れていった。

平野通訳は鹿児島移民を主とした二十三家族を連れてグアタパラ・コーヒー園へ。鈴木貞次郎もグアタパラに近いサンマルチンニョ・コーヒー園へ鹿児島移民二十七家族の通訳になった。

最後に仁平通訳が夫人と共に、中部地方出身者十五家族を連れて、ソブラード・コーヒー園へと出発した。

この十日ほどは日本移民一色に塗りつぶされて所長以下応待に気をつかっていたサンパウロ移民収容所は、再び以前の落ちつきをとりもどした。

最後の移民列車が奥地へ向って出発した日の午後、疲れ切った数家族のイタリア移民が奥地のコーヒー園から引き揚げて来た。若い人妻も、老人も混っていた。彼等は実に見すばらしい身なりで汚れていた。

疲れ切つてもものも言えず、ボロ布のように廊下へたり込んでいる若い異人女の横顔を、自由契約移民で来た為にまだ行先が決まらず収容所に残っていた数人の日本人青年が、不安そうに見守っていた。

第二章

平野運平と二十三家族、八八名を乗せた汽車は、六月二十八日の午前五時に収容所の引込線を出てパウリスタ鉄道線を走った。

普通列車の最後尾にグアタパラ駅止まりの専用車がついていた。途中の駅で移民が迷い出ぬように出口には車掌が鍵をかけてしまった。

サンパウロの郊外でチエテ河の鉄橋を渡る頃に夜が明けると、やがて両側に山が迫ってきた。さして高くはないが険しい傾斜を持った山塊だった。冬のサンパウロは朝夕肌寒いくらいだったが、山間の小駅で人々が窓から首を出すと更に冷たい山の冷氣がヒヤリと頬をなでて、吐く息が白いのだった。

平野運平は窓に頬杖をついて、夜明けのブラジルの自然を眺めていた。サンパウロ市をでるとほとんど人家がない。朝霧の中にどこまでも林や草原が続いていて、人の手が入ったようには見えなかった。移民たちのだれもが口にしたようにへ広い国だ、というのが彼の実感であった。

彼は静岡県小笠原郡栗本村土族榛葉健吉の次男とし

て生まれたが、叔母方の養子となって平野姓を名乗った。

東京外語でスペイン語を学んだのは、青年らしいロマンチックな外国への憧れのためであった。明治は進取の気性に富んだ時代だったが、スペイン語科を選ぶ連中は変わり者が多かったじ　フランス語や英語、ドイツ語のように、それで立身出世できる望みはほとんどないのだった妙なる音楽を演奏するように、異国の情熱的な言葉を自分が流暢に喋れるようになりたい、というだけの夢想家たちの集りだと言えた。

だから、皇国移民会社の通訳募集に応じたのもブラジルに興味があつた訳ではなく、ましてや移民事業に共鳴したのでは更になかった。ひたすらに外国への憧れにすぎない。モスコーを通つてヨーロッパ大陸やロンドンを見物できるという条件に、一も二もなく飛びついただけだった。それは平野運平だけでなく、他の四人の仲間も同じだった。

移民たちは列車の行手に転がっている金儲けに夢中になって浮かれている。彼はまだ二十二才だった。金儲けのことはさし当たつてどうでもいい。数年通訳をしてから、スペインへ行こう、と慢然と思つていた。スペインへ行つて何をしようというアテはない。ただ行つてみたかった。強いて言えば、白壁のエキゾチッ

クな風景の中でスペイン娘と情熱的な恋を語ってみたい。

山間のジュンジアイの駅で機関車が替って、石炭から薪になった。盛んな火の粉が振りかかってくる。人々は騒ぎながら窓をしめた。窓をしめても隙間から飛び込んで、うっかりしていると服に焦げ目がついた。人々は船の中では浴衣などを着ていたが、上陸してから洋服を着ている。女はワンピースのようなもので、黒っぽい地味な色が多かった。当時の流行で、袖のところが脹らませてあった。新調した虎の子の服が焦げるのだから大騒ぎだった。

『そーら、ウメちゃんの背中が焦げとるぞ』

『キヤーツ』

『あはは、冗談だよ』

『なあに、ウメちゃん。そんな服の一つや二つ、コーヒーの実をちよつともいだら買えるさ』

そんなやりとりを聞きながら、運平も縞の背広を焦がさないように気をつけていた。

通訳の月給は一律に二百ミルと決められていた。独身者には充分な額だがサンパウロ市の一応の中産階級の一家の生活費が月五百ミル掛ったから、数年後のスペイン行きに備えて貯金をする為にはかなり切り詰める必要がありそうだった。コーヒーの実をもらいだ歩合

いで多額の給料を貰う移民たちと同じようには、服を焦がしてられないのだった。

『通訳さん』

声をかけて、運平の前に西仁志が坐った。まだ二十七才だが船の中では鹿児島県人四六家族百七十二名の代表になって、移民会社側や船側との折衝に当たっていた男である。第一回移民は沖縄と並んで鹿児島県人が多かったから、収容所の中でも西の勢力は強かった。配耕先が決ってから自分よりずっと若い運平にどういう態度で接したらよいか決めかねていたようだった。今までの彼は、なるべく運平と視線を合わさぬようにしていた。

西は笑いながら、

『仲良くやりましょう』

と言った。

運平は頷いた。

西は声をひそめて、

『おれとあなたが力を合わせれば、皆があとをついて来る』

と、言った。

その意味が判かると、運平は不愉快そうな表情になって、窓の外を見た。船中の集団生活の連絡係としての西の役割りは、旅と共に終っていたのだ。それな

のに、この男はずっと指導者でいたがっているようだった。

農場に着いたら指導者など要らない、と運平は思った。一人一人が一生懸命に働くだけのことだ。そして自分は通訳にすぎない。

彼は返事をせずに相手を見殺したまま窓の外を眺めていた。子供の頃は腕白坊主だっただけあって、こういう時の運平の横顔にはふてぶてしい感じがあった。西は不服そうにしていたが、黙って席を立った。

隣の席で男たちが喋っていた。

『外人の食い物は口に合わんが、パンだけは旨いものだ』

『わしも収容所では、毎日パンを買いに行った。生まれて始めて、パンを腹一杯食った』

『サトウ付けて食ったらもつと旨かろうな』

『そうよ。サトウも買いたいと思っても言葉が分からなからな。明日は覚えて買おうと思っていたが買いそびれた』

『通訳さん。サトウは何と言うですか？』

向う側から男が運平に訊ねた。

先着した一カ月の間に彼は必要と思われる日用品の名はコツコツ覚えた。ペラペラ喋られると全然解らないが単語だけならかなり覚えた。

『アスーカルだ』

運平は即答した。

『えっ！』

相手は目を丸くした。それから、

『通訳さんは若いが冗談の面白い人だ。おい、小牧さんサトウは明日買うんだとよ』

と、大笑いした。

『明日買う、じゃない。アスーカルだ』

運平は訂正した。

『ほら、やっぱり、明日買うだと言うてなさる』

案外それで通じるかもしれない、と思って運平はアイマイに頷いた。

彼はそういうことにこだわらない。アスーカルでも明日買うでもいいじゃないかと思う。楽天家でもあった。

だが実務家的な面もあつた。農場入りに備えて日常単語をコツコツと覚えておいたのも、その一面である。それが仕事だといえばそれまでだが、他の通訳たちは必ずしもそうではなかった。

運平が列車の中でサトウの単語を教えていた、ほぼ同時刻に、一日前にフロレスタ農場に着いていた金縁メガネの大野通訳は、移民の買物についていつて「酢」という単語を知らずに目を白黒させていたの

だった。液体では手真似の仕様がなかったので、口に酢を含んだ表情を懸命に見せたのだが、遂に相手に通じなかった。

汽車は火の粉をまき散らしながら、ひどく車体をゆすって大平原を走り続けた。緑の森林におおわれた丘が、行手にはてしなくうねっている。丘を切ったり谷に盛り土をしたりして鉄道を敷くと莫大な土木費を要するから線路は等高線に添って敷いてある。丘から丘へと等高線伝いにくねりながら、汽車は使いに出た子供のように、氣儘に草原にでてモルフオ蝶を追ったり、森のトンネルの中を猿の群れの後をついたりしながら、全体としては北に向かって、平均時速四十キロくらいで進んでいった。

あれほど朝早くサンパウロを出発したのに、グアタパラ駅に着いたときは夕暮れが迫っていた。

一日中固い木の座席に坐って揺られ続けていたので、人々はグツタリと疲れていた。

最後尾の移民専用客車は切り離されて、農園専用の分岐線に乗り換えた。小さな機関車が曳いた。

終着駅はコーヒー園の中にあつた。

グアタパラ農園には二百十一万本のコーヒーがあつた。それは緑の海のように見えた。大きくうねった波

がそのまま停止してしまつたような景色だつた。そして茶色い瓦の駅や農場本部の建物は、広い海に浮ぶ小さな岩礁のようだつた。

二十三家族の移民たちはその大きさに圧倒され息をのんでコーヒーの樹海を眺めた。

『広いもんだのう』

『なんとまあ！』

嘆声があちこちで洩れた。

島国の日本で育つた人々の想像を絶する風景だつた。

二百十一万本のコーヒーはどうてい一望には収められない。向うにかすむ丘の、その向うにもコーヒーの海が広がっているのだつた。不意に、人々は自分が頼りなく小さい存在に思えた。あまりに巨大なものの前に素手で投げ出されて、心細かつた。

人々は黙つて、お互いに寄りそつた。いつの間にか平野運平のまわりに八八名がかたまつていたのだつた。

停車場の前に牛車が二台待っていた。車輪が大人の丈ほどもあつて、一台を八頭の牛で曳く大掛りな牛車だつた。

数人の男がそのそばに立っていた。

一人の男が移民の群れに歩みよって来た。中背で暗い褐色の髪をした五十過ぎの年令の痩せた男だった。平野も前へ進み出た。

『私はサルトリオ。グアタパラ農場の支配人だ』

と男は言った。

『私、日本通訳、平野運平です』

二人は握手した。

仕事の上で紹介された場合は、力をこめて相手の掌を握った方が活動的な信頼感を与える、というようなことをすでに理解していた。サルトリオ支配人の心をつかむような意気込みで、運平は握手した。相手は痩せがたなのにガツシリした手をしていた。

サルトリオは色々と話しかけた。

『シンセニョール。有難う』

と運平は答えて、手荷物を牛車に頼むように後ろの人に指示した。

充分に解りはしないが相手が言っていることは大体見当がつくような気がするし、当然、この牛車は荷物運びに来てくれているにちがいない。移民たちは今や運平一人が頼みの綱だった。彼の言うがままに動いた。

コーヒー園の中の径は砂質土で歩きにくい。

行手の一きわ高い丘の上に、緑に囲こまれた白亜の

館が建っていた。耕主の家だった。この農園は七人の出資による合資会社になっていた。その一人が園主としてあの館に住んでいる夕映えのコーヒー園を見下ろしている美しい館は移民たちの夢の象徴のようにそびえていた。

——人々はコーヒー乾燥場のそばの大きな食堂に案内され、サルトリオ支配人が歓迎の演説をし運平はその幾らかを訳して伝えた。

夕食が配られた。外人の食物は油っこすぎてさほど旨いとは思えなかったが、空腹だったので沢山喰った。米が出たのも有難かった。豚脂でたいたピラフでなかったらもっと旨いのに、と皆は思いながら食べた。

夕食が済むと、牛車が再び動き出した。日はとつぷりと暮れ、冬の澄み切った空に星が大きく輝いていた。気温が降って耳や手の先が冷めたかった。牛車のわだちがギューイギューイと耳ざわりなほど軋んだ。満腹感とはうらはらに未知の生活に入る不安が四辺のの暗さと寒さと混りあって、人々を無口にしていた。疲れがその上に重くのしかかっていた。

少し歩くと牛車は停った。

星明りの下に、黒々と蛇腹のようにうねって、長屋

が幾つも並んでいた。近付けば近付くほど、それが粗末は小屋だということが分った。大急ぎで割り当てられ家に、人々はローソクを手にかかげて入って行った。家、とは言えないかもしれない。屋根の下の土間を土壁が二つに仕切っているだけのものだった。上を仰ぐとすすけた赤瓦がローソクの光にユラユラ揺れていた。土壁には先住者のヤモリがピツタリとはりついていた。

それぞれの長屋のむきだしの屋根の下で、それぞれの夫婦が呆然とした暗い顔を見合わせていた。外国生活といえばいつも洋服をキチンと着て白壁のシャレた家に住むものだ、と教えられてきた。神戸の移民収容所に集合したときも「外国人の生活程度は高い。だらしのない浴衣などは国辱ものだ決して着てはいかん」と役人に高飛車に言われた。

しかし……この家は馬小屋と変わりなかった。外国にも貧しい生活はあるのだ、という当り前のことを彼等は知ったのだった。しかも、自分自身のこととして。

別送した荷物はまだ着かないので、人々はありあわせの布を敷いて、土間にゴロ寝した。

『牛や馬のごと、ある』

疲れた女の声がどこかでした。

翌日は朝から運平は忙しかった。いずれは日本的な生活様式をとり入れるにしても、さし当ってはこの農園の農場労働者たちの生活のやり方を真似る必要があった。

それが一番てつとり早い。サルトリオ支配人がつけてくれた監督に色々と訊ねがら、早急にすべきことを彼は移民たちに指示した。

農園内の売店で食料品や日用品をツケで買う。森から木を伐って寝台をつくる。倉庫に収穫してあるトウモロコシの皮を貰って、ベッドのクッションを作る。先住者がカマドを遺してない家はカマドを作る。少くとも数日分の薪を拾い集める等々……。

小屋の貧しさに文句を言う人もいたが、運平は「目の不平を言っても仕方ない」と言ってとり合わなかった。

コーヒー園労働に必要な農具も売店から買わせた。クワやオノは金具だけ売っていて、柄は各自の好みですげる。枯木よりも森から若木を切って柄にした方が、弾力があつて使いやすいそうだ。クワの柄の長さや角度は使う人の身長に合わせる。要点を運平は監督に手真似を交えて教わりながら、ドンドン仕事を進めさせた。

「通訳さん」

シメという女が不思議そうな顔で訊ねた。

「いくら探しても、便所がどこにあるか分らんですが」

運平は首を振った。

「便所はないよ。その辺の木陰でするのだそうだ。すぐ、放し飼いのブタが来て、片付けてくれるそうだ」

「……」

シメはちよつと青い顔をした。

「又は朝暗いうちに用を済ませるらしい。日が昇るころにはブタの胃袋に納まって跡形もない」

「……！！」

「どうしても馴れなかったらそのうちに便所を作りなさい。しかし、毎朝ブタに片付けさせた方が反ってキレイだ、と外人は言ってるがね」

「そのブタはどうするのだろうか？」

一人言のようにシメが呟いた。

「あんな、昨夜、旨い旨いって此処の豚肉を食ってたじゃないか」

「……！！」

シメは一層青い顔になった。

六月の末だから、コーヒーの実の採取期はすでに半

ばを過ぎていた。農場側の要請で、人々は三日目から仕事を始めた。

朝四時半に鐘が鳴った。カラン、カラン、カラン……ぐっすり寝込んでいるコロノ達を、金属の震動音が執拗にゆさぶり起す。

起きて顔を洗い、身仕度をし、何か食べる。

ランプの光が弱々しくなつて外が白々と明るむと、監督が吹き鳴らす角笛が響いた。

人々は昨日教えられた通りに、クマデやフルイを持って外に出た。運平が監督の一人と並んで立っていた。

『お早よう』

『お早よう』

人々は挨拶を交しながら運平の廻りに集った。まだ陽がささぬ冬の早朝は寒かった。みんな着ぶくれて背を丸めていた。

『皆集ったか？』

『はい』

薄明の中にお互いの顔がボンヤリと見えた。監督と運平を先に立てて、人々はゾロゾロと歩きはじめた。

採取期のこの農園には四百家族のコロノがいる。角笛にせきたてられた羊の群のように、あちこちの長屋から無数の人間が吐きだされ、朝霧の大地を分けてそ

れぞれの持ち場へ散開して行く様子はさながら戦争の一場面のようであった。

イタリア移民の娘たちは赤いハンカチを頭に巻いている。スペイン人やロシア人たちもそれぞれのお国ぶりがどこかに現われていた。新米の日本人たちは、女たちは手拭いを姉さんかぶりにしていた。男たちは烏打帽子ムギワラ帽などあり合わせのものをかぶっていた。

歩くほどもなく、すぐに今日の仕事場に着いた。五千本のコーヒー樹が車道で区切られて一単位の畑になっている。そのはしに並び、一家族当り二畝か三畝を受け持ち一斉に実の採集を始めるのだった。

監督は日本人たちに仕事の手順を説明した。まず、木の廻りに布を敷くそれから、枝に連珠のようについている実をこき落すのだ。木が痛むので決して枝を叩いて実を落してはならない。落した実をフルイにかけて砂や葉を除き、袋に詰めて車道にかつぎ出す。高い枝、低い枝、フルイと受持ちを分担する方が能率が上がる。高い枝は三脚に乗って仕事をする。車道に出したコーヒーの実は、監督の目前でコロノ番号が付いた五十リットル入りの袋に枡で計って詰め直す。監督はそれを帳簿に記入して、乾燥所行きの馬車が運んで行く。

コーヒーを摘む場合、枝に摘み残しがあつたり木の根に実が転がつていたら監督に呼び戻されてやり直しを命じられるから、手を抜いた仕事をしたら反つて時間の損になる。コーヒー園では一粒のコーヒーも大切にする。

定められた畝が終つたら、次の、人が入っていない畝に移る。どの畝に入るかは監督の指示に従う。自分勝手に入つてはいけない。

採取畑のコロノの収入はコーヒーの実際の採取量の歩合だけだ。これが唯一無二の収入である。人々は監督の説明を通訳する運平の声に、一生懸命に耳を傾けた。運平も監督が言う事を全て理解できた訳ではなかったが、移民収容所にいるときに先輩の鈴木貞次郎に何度もコーヒー園労働の話を聞いていたから、大体の通訳はできた。

『分つたか！』

運平は叫んだ。

人々は頷いた。フルイの使い方を除いたら単純な仕事で、すぐ覚えられそうだった。

しかし、フルイの使い方はむずかしそうだった。集めたコーヒーの実には砂や小石と共に小枝や枯葉も混っている。ファイルを振って砂や土を落すやいなや、サッと斜め後方に内容物を投げ上げる。風が巻き起つ

て、枯葉や小枝は空中に散乱し、重いコーヒーの実だけがツグミの群れのように一団となって、空中を一転し後方に落ちかかる。左足を引いて腰をひねりながらフルイに実を受ける

監看が要領を説明しながら実演すると、コーヒーの実はまるで小鳥の群れのように紺青の空を高く叢（むら）って飛び交り、巢に戻るようにフルイにピタリと収まった。いかにも鮮やかだった。見守っている人々から嘆声が挙げた彼が二度振っただけでフルイの中の埃の集積は消え失せて、ピカピカ光る茶褐色のコーヒーの丸い実だけになるのだった。

一応の要領を見届けてから、人々は家族毎に定められた畝に散っていった。樹が茂っているから見通しは利かないが、どの畝にも人が入っていた。すでに仕事を始めているイタリヤ人やスペイン人やポルトガル人の娘たちは、コーヒーの実を摘みながらひっきりなしに唄っていた。彼女たちは澄んだ声をしていた。牧歌的な雰囲気と気ぜわしい活気がみなぎっていた。

『おれたちも唄うか』

誰かが意気込んでラッパ節を唄いだした。しかし、ラッパ節は酒を飲んで唄うにはいいが、ここではピツタリしなかった。

唄いやめると 「カンタ・ジャポン」（歌え、ニッポン）

とどこからか声が掛ったが、何を言われているのか分らなかった。

コーヒーの実をもちだ最初の印象は、手が冷たいということだった。冬の、朝露にぬれた枝をこいでいると、手が濡れ、すぐ感覚がなくなった。葉に触れる服もぐっしりと濡れた。齒が鳴るほど寒かった。

やがて朝日が射した。気温が上昇した。紺青の澄み切った空が輝いていた。コーヒー栽培地帯の冬の乾燥して晴れ渡った空の美しさは独特だった。赤っぽい土とコーヒーの濃い緑と紺青の空と……この三つだけで風景が成り立っていて、視線に当ってカンカンと音が生じそうなほど澄み切って、どんな遠くのものまでも手にとるようにクッキリ見えた。

《これが金の成る木か》

人々は夢中になって、その実をこき落した。六月の終りで採取期も盛りを過ぎていたから、実は固くしぼみ、枯葉も多かった。すぐに、ヤスリをかけたように掌がカサカサになり、あちこちを枯枝で突ついて血が流れた。

コンモリと茂ったコーヒーの樹に首を突っ込んで無我夢中で枝に連なった丸い実をこく。

馴れない人々がやつと数本のコーヒーの実をもちだとき、監督が吹く角笛が鳴った。

ブオー、ブオー。

不安定なつかみどころのない音色でありながら意外と遠くまで響く。いつの間にか九時になっていた。

『メシだ！メシだ！』

運平は怒鳴って歩いた。まだ疲れるほどの仕事はしていないが、暗いうちから起きていたので腹が減っていた。

『休みは一時間だ。また角笛が鳴ったら仕事始めだ』
家族毎にかたまつて畝の間に坐っている人々に運平はそう告げて歩いた。

『通訳さん。一緒に食べませんか』

声をかけられて、

『おう』

気楽に応えて、運平はそこに坐り込んだ。

声をかけたのは牧之段愛熊という、二十一才の若者だった。彼の向う側に十九才の妻のツタと、妻の弟の十四になる次太郎が坐っていた。三人だけの小さな家族だった。

運平は腰の包みを広げた。泊っている監督の細君がつくってくれたサンドイッチだった。

『どうだ、食わんか』

彼はパンを出した。

『ええ』

愛熊は一つとった。

『あんたもどうだ』

ツタにすすめると、幼ない面影を残したツタは、
『パンはうまいが、ビンツケ油みたいの付けてるのが
好かん』

と首を振った。

『ああ、これはバターといって、牛乳からとった栄養
のあるものだ。早くこういうものに馴れんといかん
よ』

運平は坐りながらサンドイッチを頬張った。

彼等は売店で買った米を炊いて持って来ていた。干
ダラを焼いた一片を飯にのせて、コロツテ（樽）の冷
水をかけて旨そうに掻き込んでいた。干ダラはポルト
ガル移民の大好物で、厚い身を水でもどしてジャガイ
モとトマトと共にオリーブ油で煮るのだった。

『どうだ、仕事は』

パサパサのパンを水で流し込みながら訊ねると、

『三人でまだ袋に半分もいかないです』

牧之段は不安そうな目をした。

一日に一人で四〇五袋とれる、というのが日本で聞
かされた話だった。

『仕事に馴れないから、まだよけいは採れんだろう

が、それにしても少ないようです』

『そうか……』

運平は頷いた。

移民会社の宣伝ほどコーヒーの実は成っていないらしい、と彼も気付いていた。やっかいなことになりそうだと思った。

『どうですか、通訳さんごほんを一杯』

『うん』

彼は飯に干ダラをのせた碗をツタから受けとった。ツタは碗を渡しながらチラと運平を見た。その日に娘たちが「通訳さん」を見る憧れの色が含まれていた。未婚の女の視線だった。

牧之段愛熊とツタは名目上の夫婦にすぎなかった。労働力のある家族でないと移民を認められないので、大半の人々が名目上の妻や弟や子を連れて来ていた。日本人は一妻多夫制かと思われたほど不自然な構成の家族すらあって、運平の目の前にいる二十一才の男と十九才の女も、名目上は夫婦でありながら、実際は赤の他人だった同じ村の顔見知りにすぎない。二人の間に男と女の交りがないことは、運平にすら分った。姉と弟の横に、同じ村の若い衆が一人、間が悪そうに笑っているのだった。

『あんたたちも、加世田村だね』

そのバツの悪さに気付かぬように、運平は言った。
『ええ』

とツタが代って返事した。

この農園には十八家族の鹿児島県人と三家族の新潟県人が来ているが、鹿児島県人の大半は川辺郡の出身で、中でも加世田村が多かった。

十九才のツタと十四才の次太郎がはるばるブラジルに来たのも、顔みしりが多いし、従兄の川床栄吉一家も一緒だったからだ。その栄吉一家も寄せ集めで、次太郎と同年で遊び仲間の太吉も川床一家の一人として来ている。どの家族構成も働き手だけで、子供や老人はいなかった。

『旨かった』

めしを食い終って、碗を返しながら運平はツタに礼を言つて立ち上った。牧之段は『へえ』と言いながら、頭を下げた。

十九の娘とこれからの毎晩を一つ屋根の下に寝る男の不幸を、運平はチラと考えた。名目上は夫婦でありながら二人の間に夫婦らしさはまったく生じていなかった。

法律上のサインなど、人間の感情には無力らしかった。
た。

男はその気になっているらしいのだが、女にまつた

くへその氣▽がないのが見てとれた。ツタは自衛上、多分、次太郎と一緒に寝ているにちがいない。

よく観察すると、牧之段たちだけでなく、それぞれの家族がやつかいな問題をなにかしら抱えているようだった。金を儲けて良い暮らしを故郷で送れるように、その目的のために無理に無理を重ねた人ばかりだった。金さえ手に入れば雲散霧消する、貧しい庶民たちの小さな、しかし深刻な問題が蠅のように人々にたかっていた。

……これで、コーヒーが儲からないとハッキリしたら大変なことだ、と彼は考えながらボンヤリ歩きだした。

すぐ一時間が経った。角笛が鳴り、人々は再び熱心に働きだした。冬とはいえ快晴のコーヒー園は暑かった。

見回る運平もたちまち汗と埃にまみれ、目だけがギョロギョロ光っていた。

二時にお茶の角笛が鳴った。三十分の休み。そして、六時の日没と共に終業の角笛が鳴った。馴れない仕事を夢中でやったので人々は疲れ切っていた。それ以上に、余りに少ししか実が摘めなかったので呆然としていた。

牧之段一家は三人で一袋しか摘めなかった。明日から段々馴れたとしても、とうてい移民会社が日本で宣伝したように一日一人四〜五袋とれるとは思えなかった。

今朝出て来たときは寒かったが、期待にあふれていた夕方になって、晴れた夜空が青い水のように冷気を空一面にはりめぐり始めたとき、没した日光の輝きと共に希望までが消えたような感じだった。皆、黙りこくっていたが不満が湧いていた。しかし、それ以上に空腹だった人々は家へ入った。やっと飯ができ、食い終ると、待ちかねたように睡気が襲ってきた。

……十日、二十日とまたたくうちに日が過ぎた。そしてコーヒー園労働に対する移民たちの幻滅と不満は決定的となった。

コーヒーが不作だろうが、収穫期の半ばだろうが、彼等には関係のないことだった。とにかく金にならないのだ。

その上、毎週農場から前貸しされる一人十五ミルの金券（バーレ）で、農場内の売店で買物をしていると、ごくごく切り詰めた食糧品しか買わなくても赤字になることがはつきりした。

朝薄暗いうちから日没まで、ドレイのように働い

て、そのうえ借金ができる……そんなバカな話があるか！ 第一、人々は食い詰めてブラジルに来たのではなかった。よりよい生活を送ろうと思つて千万長者になるつもりで来たのである。巡査の月給がたった十円の時代に、一人百六十円もの渡航費を払い込んでゐる。四、五人の家族なら、支度の費用を加えると千円程度の資金をかけているのだつた。それなのに借金ができる。頭に来て、怒り狂うのが当然である。人々の間に陰悪な空気がみなぎつた。

昼休みになると、梯子の上に乗つて、

『オーイ、家長、集まれ！』

と叫ぶ男がいる。

船中で鹿児島県代表だつた西だつた。

運平が近くにいても、西はもう平氣だつた。若輩の通訳など無視し、叩きつぶそうという敵愾心をむきだしにしていた。

ゾロゾロと家長たちが集まってくると、畝の間の土の上にそれぞれ腰をおろして相談が始まつた。初めのうちは不満や不平のこぼし合いだつたが、日ならずして幾つかの要求を農場側へ突きつけて団体交渉をしようとするはつきりとした目的を持つ會議になつた。

運平は除け者にされた。通訳は移民をだました会社側の人間と見られた。

が、彼は割に平静だった。彼は儲ける心算でブラジルに来たのではなかったし、鈴木貞次郎にコーヒー園の仕組みも一応聞かされていた。だから笠戸丸移民たちが置かれた状況を、客観的に見ることもできた。二、三年頑張って辛棒してみなければ結論はくだせない、というのが運平の判断だった。

彼等は違約金を払っても、すぐこんな処を出て良い仕事を探した方がいいと騒いでいる。しかし、運平がサンパウロ移民収容所で見た自由移民たちの契約システムは州政府が農場側を監視する公平なものだった。だから日本移民が入った処だけが特に酷い処だとは思えない。

このグアタパラにも二千人もコロノ（農園労働者）が働いている。借金だけが增える処に、これだけの人間が居着く訳はない。

一攫千金の夢は破れた。しかし、ここはブラジルでも有数のコーヒー園の一つだ。ここに可能性がなかったら他のコーヒー園にもある訳はない。つまり、“一攫千金”の現実が存在しないのだ。この国でも、地道に働くこと。それ以外に、確実に金を儲ける方法はない、と運平は思った。

それは日本でなら、とつくに分り切った常識だ。万に一つ、いや千万に一つのどえらい幸運が振りかから

なければ、一夜で大尽になどなれっこない。

しかし……どこか遠い処にはそんな日常社会の法則を無視した黄金郷が存在すると人は夢みていたのだ。日本で一生働いても得られない大金も、エルドラードへ行けば手づかみで取れる、と甘い夢をみた。

遥々と、地球の裏側まで大旅行をして来て、人間の生活はどこでも同じである、という平凡な認識に、二十二才の運平は達したにすぎない。

人間のいる処には人間の生活がある。それだけのことだった。血相を変えて議論しているらしい家長たちの甲高い声をコーヒーの樹越しに聞きながら、彼は不意に可笑しくなつて、独りで笑った。

まだ夢がさめぬ彼等がおかしかった。しかし、それは自分についても言えるのだった。美しい情熱的な響きに魅せられてスペイン語を学んだのにこうやって毎日外国語を喋るようになる、それはまず“意味”であつた。

美しい響きに酔うために喋るのではなく、意志を伝えるために喋るのであつた。いくらスペイン語やポルトガル語が異邦人にとってエキゾチックに響いても、それは遠くから眺めていた間だけだった。毎日スペイン語を喋って暮らせば、それだけでまったく変つた素晴らしい日常が展開すると、他愛ない夢につかれて外

語に入っただった。

スペイン娘と熱烈な恋を語るといふ夢はまだ色濃く若者の心に宿ってはいたが、たとえ外国語を喋って暮しても人間の“日常”そのものには変りないという事実は認識せざるを得なかった。

彼は長いあいだ笑っていた。

いやな認識ではなかった。外見こそ違え、人間は同じなのだという心良い認識だった。

……彼は笑いやんだ。じつと、遠くの地平線を眺めた。

緑が波打って遙かに空にとけ込んでいた。赤いスカーフの娘が向うに居て、緑の中にその赤い点が目に鮮やかだった。こんな風景は日本にはない。風景がちがうように人の生活も、更に突っ込めば、やはり国によつて違う筈だった。

その違いは、ここに住んで人の情けにふれたり争ったりしてみないと分らないようだ。

とにかく、目先のことにバタバタしてもダメだ。ここにおいて、支出を押え収入を図ることが、さし当って最善の方法だ。

運平は思いついたように立ち上ると、折から通りかかった馬車に飛び乗って本部へ行った。総支配人のサ

ルトリオに会うためである。

本部には色々な建物がある。今の時期で一番、人の目を惹くのはコーヒーの乾燥所だった。

煉瓦を敷きつめただけの平らな広場にすぎないが、二・五アルケール（約六町歩二反）の広さがあつた。その面積一杯に褐色のコーヒーの実が干され、人々が忙しそうに働いている様は壮観だった。

サルトリオは機械部で蒸気トラクターの修理を指揮していた。機械が解るらしく、二、三人の男がサルトリオの言いなりに動いていた。トラクターといっても、ちよつとした機関車なみの怪物だった。車輪が人の背丈はどもあり、稼動中は消費する水を運ぶために六頭立ての牛車が要った。

『何んだね？』

痩せた初老のイタリア人は、優しい目をして運平を見た。彼は、初めてブラジルが迎え入れた日本人労働者たちに、興味を持っていたのだった。日露戦争に勝った国民だから、並々ならぬエネルギーを持っているにちがいない。雇用者の立場から注意深く、その働き振りを観察していた。

『金券、金に換える、したい』

と、運平は言ったし

『なぜだね？』

『売店高い、グアタパラの町、安い。金、要る』
『そうか』

サルトリオは素速く考えた。

農場内の売店が、町の倍くらい高いのは事実である。賑やかな町と較べて客が少ない売店の品が割高なのは仕方ない。それに利権と結びついた独占事業でもある。

金券といっても、内実は前借しのチケットなのだ。換金する義務はなかった。しかし、日本人たちの要求は大目に見てやろうと彼は思った。初めての人種である。人数も少ない。甘やかしすぎないように注意すればいいのだ。

『よし』

とサルトリオは頷いた。

『今夜、事務所に必要なだけの金券を持ってくるように。すぐ金に換えてやろう』

運平は礼を言つて耕地へ戻った。

……次の日曜日の午後、運平は数人の若者と共にグアタパラの町へ行った。二十二家族から頼まれた細々とした品物を、手帳と照らし合わせながら買い入れ、やとった荷馬車に積み込んだ。

休日なので近在の農民や牧夫たちが馬に乗って集つ

ていた。彼等は赤土に染ったシャツを着て、幅広い帽子をかぶって、ゆつくりと馬を進めたり四辻で立ち話をしたりしていた。馬の鞍に買物でふくれた布袋をくくりつけていた。買物をしているのは男たちばかりだった。馬にゆられて半日がかりで町に出てくるこのあたりでは、買物は男たちの仕事だった。買物をしたあと、顔見知りとお喋りするのが楽しみであり社交であつた。

女たちは小川で洗濯しながらお喋りをする。

日本人は珍らしいので運平たちは日曜の田舎町で注目の的になった。

「おう、ジャポン」

とあちこちから声をかけられる。

「オーヤマ」

「トーゴー」

日露戦争の將軍の名はこんな処まで響いていた。

うっかり相手になると向うはヒマだからキリがない。いい加減に返事をしながら、彼は若者たちと共に買物を済ませ、農場行きの軌道車に乗せた。

全ての依頼主の手に買物を分配し終ったときはトツプリと日が暮れていた。

皇国殖民会社ブラジル代理人、上塚周平がグアタパ

ラ農場へ姿を現わしたのは九日八日の夕刻だった。

痩せて黒い丸ぶちの眼鏡をかけた周平は、運平が驚いて声を挙げたほどやつれ、消耗していた。

二ヶ月前に配耕状態を視察に来たときは三十二才の帝大法学士らしく威厳があり、颯爽としていた。それが俄かに十も老けたような背を丸めて、歩く姿も踉蹌としているのだった。

「どうしたのですか！ 上塚さん」

部屋にヨロヨロと入って来た周平を見て、思わず大声をだして運平は腰を浮かした。監督の家の一室を借りた仮住いである。

「酒はないか」

周平は言った。

サトウキビから蒸溜した強いピンガを出すと、

「うん……」

とうなずいて、コップに並々と注ぐと、苦しそうに一息に飲み干した。

「どうしたんですか」

運平は呆然として、そんな周平を見た。

『ここはどうだね。……皆働いているか』

二杯目のピンガを注ぎながら、低い声で周平は訊ねた。

大体がボソボソした話し方をする人だが、今日は特

にひどかった。目を伏せてコップにものを言っているようである。

『何とか働いていますが大分不平があるようです。毎日集まっては家長会議をやっています。ここの契約を破棄して、もっと有利な処へ行きたがっている。ブラジルよりアルゼンチンの方がいい、という噂も飛んで動揺しています』

『やはりそうかい』

周平は一層背を丸めて淋しそうに頷いた。

『ほかはどうです？』

運平も自分のコップにピンガを注ぎながら訊ねた。

『総崩れだ』

周平はうめいて顔を挙げると、うつたえるように言った。

『どこもかしこも暴動だ。この一カ月、わしは土に頭をなすりつけて、いきり立つ移民たちをなだめ説得しようとして歩いた。……いいか、平野くん。わしはツバを吐きかけられ土下座をして謝って廻ったんだぞ』

周平の目からドツと涙が溢れた。

『それは酷い』

運平は眉をひそめた。

『でも、上塚さんがそれほどしなくても……』
『いや、非は会社側にある。コーヒー園の実状調査が

不完全だった』

と答えて周平はうつむいた。

『上塚さん、あなただって出航間際に採用されたんでしょう。会社が日本でした誇大宣伝の責任はないでしょう』

『いや、わしは会社側の人間です。責任を回避しようとは思わない』

周平は言った。

「……」

運平は黙ってうなずいた。

上塚周平は隣のサンマルチーニヨ農場から来たのだった。そこは初めの予定では運平がかけもちで通訳をすることになっていたが、距離的に不可能だと分ったので鈴木貞次郎が通訳となつて行っていた。ストライキがこじれ、州兵まで出動する大騒ぎになつて、十二家族の農場追放で一応おさまったという。

「皆はどうなつたんですか？」

運平は通訳仲間の四人の顔を想い出しながら訊ねた。

「加藤は？」

「移民たちとケンカしてやめたよ。移民たちも散り散りになった」

「嶺は？」

「まだカナンにいるが、夜逃げする者が多くて、いつまで保つか……」

「仁平は？」

「農場をクビになった」

「フロレスタへ行った大野は？」

「まだ頑張っているが、六カ月の契約がすんだら残る者はないだろうから不安がっていた」

「……」

「あそこも夜逃げにつぐ夜逃げだ。金がないから昼間は追手の目を避けて草の中に隠れ、夜、線路伝いに歩く……。金の成っている場所を探して、言葉も地理も分らない異国を、鉄道の線路だけを頼りにさ迷っているのだよ」

涙が再び周平の頬を濡らした。

暗澹とした表情で運平はきいた。たった二カ月前に別れた友だちだった。暁闇にうずくまる客車へ、「じゃ、先に行くぞ」と身軽く乗り込んだ嶺。午前の太陽に眼鏡をきらめかせながら、夫人と共に帽子を振りながら発っていった大野。寄せ集めで必ずしも全員の気が合った仲間ではなかったが、離ればやはり懐しい東京外語の友だった。

目の前の周平の憔悴した様子を見れば、一人一人で

思いもかけぬ苦しい事態に翻弄されている通訳たちの姿は想像できた。

「こうなった一番の原因は、コーヒーが不作で結実してないことだよ」

と周平は言った。

「仕方がないですな」

「ああ、仕方ない。……しかし、平野くん。だからといって、勝手に飛び出してはいかんのだ。移民の一人は弱い。それが己の欲する処とは言え、バラバラになってはいかんのだ。成功はおろか、乾いた砂に吸い込まれる一滴の水のように、この国に吸い込まれて跡かたもなく消えてしまう。今から十四年前、丁度日清戦争が始まった年に四五七人の中国人坑夫がミナス州の金坑に送られたことがある」

「ほう」

と運平は周平を見た。

「支那で露天掘りに馴れた彼等は、地下二千尺の高熱に堪えられなくて、バタバタと倒れた。生き残ったものは逃亡して四散した」

そこで周平は言葉を切った。

「それで……？」

と運平はうながした。

「それつきりだよ。彼等はこの国に生きながら消えて

しまった」

沈黙があつた。

「すると、私たちもそうなる、というのですね」

暗いイヤな予感があつた。

「そうなりたくない。いや、断じてそうしてはならない。ただ一つの方法は、民族として力を合わせて生きるより仕方ない。余計に金が入る、と目の色を変えて、てんでバラバラに四散したら、行手にあるのは闇だけなんだ」

周平は吐きすてるように言った。

「闇ですか……」

運平は頷いたが、

「でも彼等は金儲けに来たんでしよう。一ミル二ミルに目の色変えても仕方ない」

と言った。

「君までそんなことを言つては困る」

周平は苦々しい表情をした。

移民会社の代理人になつてブラジルに来るくらいだからこの人も変り者にはちがいないが、やはり帝大法学部出身だ、と運平は思った。理想はいいとして、すぐ民衆を束にして方向づける思考法をする。

「彼等にとつて一ミル二ミルは大変な金なんですよ。理想のために死ぬのも人間だけど、一ミルで動くのも

人間なんだ」

「それは分る」

「大体、理想を持って来た訳じゃないでしょう」

「理想のない集団が、こんな状況で人間らしく生きられるかい？」

周平は反問した。真剣な目だった。

「さあ……」

運平は詰ったが、

「どうせ僕はスペインへ行くつもりだから」

と逃げた。

「スペインか……。それもいいだろう。しかし、金はあるのかね」

「いや、二、三年働いて貯めてからの話ですよ」

「しかし、君。移民たちが夜逃げしてしまったら君は当然クビだよ。君も収入の道はないよ。スペインどころか、南米の底辺の闇から出られないんだよ」

「アッ、そうか」

運平は大笑いした。

周平も一緒に笑った。ホッホッと甲高い声で笑う人だった。

「それで、平野君。お願いがある」

周平は顔色を改めた。

「今迄どうやら無事なのは此処だけだ。君の力で何と

か此処だけは散逸を喰いとめて欲しい。第一回のブラジル移民が実現するまでに、どれほど多くの人間の努力が尽やされたか、君も知っているだろう。この経験を生かして、第二回、第三回と移民を成功させるのが私たちの使命だと思っている。しかし、ここが崩れたら、おそらくもう移民事業は途絶するだろう。すでに、ペトロポリスの公使館は移民不許可にするべしとの意見を外務省に打電したそうだ。だが、たとえ一カ処だけでも成功したらそれを手掛りに移民事業は続く。それが狭い国土に悩む日本の将来の為だ、と私は信じる。お願いだ。平野くん君の力で何とか此処を喰いとめてくれ」

「……」

「理想という大袈裟な言い方がイヤなら、君個人のためでもいいさ。君だって、男の意地はあるだろう」

「それはあります」

確かに、自分でも負けず嫌いだとは思っている。

「喰い止めてくれるか」

「何とかやりましょう」

運平はアッサリ引き受けた。

そう答えた瞬間、彼の生き方が自然に決ったのだった。

通訳というのは、資本家と労働者の中間の存在だが、そのどちらにも属さなかった。脱耕者を止める義務も権限もない。しかし、彼が周平に約束した瞬間から、否応なく通訳としての立場を踏み出さなければならなくなった。

移民たちの不満が、農場側との交渉によって解消するのであれば、通訳は通訳としての職責を果たせば済むが、不満の原因は日本での宣伝に端を発している。農場側には無関係だった。運平はまったく自力で、人々の不満を押さえ紛争を防がなければならなかった。

翌朝、運平は一晩泊った上塚周平を駅に見送ってから、馬を駆って四十キロ離れた隣のサン・マルチーニヨ農場へ向った。そこで通訳をしている鈴木貞次郎に会ったのである。

主人が留守の彼の部屋には、スペイン語の辞書のそばに、昨夜周平が書きつけた俳句がポツンと置かれていた。

夜逃げせし 移民思うや枯野星 瓢骨

とあった

上塚が訪れて去った日から一週間ほど過ぎた。サン・マルチーニヨで派手な騒動があった噂は、ここに

もすぐ伝わっていた。こうなったら騒いだ方がトクだ、という投げやりで殺気だった雰囲気濃厚になっていた。

運平が一日の仕事を終えて帰ってくると、井上馬太郎の妻の亀寿が夕食を運んできた。

彼は農場本部の食堂で食事をしていたが、米が出ないので、週に何度か亀寿に食事を作ってもらった。グアタパラにもリオ・グランデ・ド・スール州から米は入っていたが、祭日に、豆の上にパラパラ振りかける程度の調味料なみの使い方だった。これでは日本人には食った気がしない。

井上亀寿に食事の世話を頼んだのは、彼女がほとんど畑仕事に出ないからだった。夫と妻、それに一、二名の働き手という家族構成が普通なのに井上馬太郎の処は九人という途方もない数だった。

家長の馬太郎が二十八才、妻の亀寿が二十六才で、あとは甥だの従弟だの、従弟のまた従弟だの十七才から二十八才くらいの若者がゾロゾロいる不思議な家族だった。

従って彼女は家事だけでも大仕事で、他の女たちのように終日コーヒー園で働けなかった。

食事を運んで来た彼女に、運平は、

「井上に、メシを喰い終ったらちよつと来るように

言ってくれ」

「ハイ」

固い声で答えて、彼女はそそくさと帰って行った。独りで、ランプの灯の影を宿した飯を口に運びながら

へ井上の奴、はたして来るか……と彼は待っていた。呼びだしに応じるようなら希みがある。

騒動を起そうという動きは露骨になった。騒いで、農場側から契約破棄を言い出させれば自由の身になれる。

誰だつて、自由になればもつといいことがありそうな気がする。皆、ワイワイ騒いでいた。会議は大いに氣勢を挙げているようだが、鹿児島県人の川辺郡出身者たちが数の上からも中心だった。高知と新潟の五家族は主流ではない。

男たちの数は六三名だった。高知、新潟は十六人で、全体の四分の一になる。騒ぎの中心と対決するにしても四分の一だけでもしつかり押えておきたい。中でも飛び抜けて大家族の井上馬太郎を押えれば、十六人はまあ井上の考え通りに動くだろう。井上が慎重な性質で、あまり騒ぎを好まない筈だと運平は思っていた。

それに、運平個人に反抗しようとしているのは西だ

けで、あとの人々にとって運平は交渉相手ではなく、
“通訳さん”だった。

彼がメシを喰い終ってぬるい白湯をのんでいると
き、

「入っていいですか」

と入口で声がした。

井上馬太郎の声だった。運平の顔にホッとした表情
が浮んだ。

：第一回の要求書がつきつけられたのは翌朝だっ
た。

仕事に行く前に長屋の前にかたまった一団の男たち
の中から、西が進み出て紙切れを運平に渡した。

「一、ちんぎんのはらいを月ごとにするここと。

一、かぞくごとに伍百ミルぜんしやくすること。

一、ざつむのちんぎんを伍ミルにすること。」

と書いてあった。

賃金を三カ月毎に払うことは契約書に明記されてい
たし、五百ミルもの前借しをする義務は農場側にな
い。日本での誇大宣伝にダマされて、全然儲からぬ処
へ多額の金を費って連れてこられた人々の、鬱積した
憤慨の捌け口が農場側へ向けられたのだった。それは
おかしい、と咎めたところで他に訴える相手はいない

のだ。

「よろしい。農場側へ伝えよう。責任者は誰かね」

と運平は西に言った。

要求の内容はサンマルチャーニヨ農場と同じだった。

「これは皆の意見だ」

西は答えた。

「それは分っている、しかし、交渉には責任者を何人か立てんとね。全員で押しかけて行く訳には行かんよ」

「それなら、俺と、俺の家長の上井忠と……」

西は数人の名を挙げた。彼は上井の家族として来ていたが、家長より三つ年上だった。運平はその名を加えて紙片をポケットに収めた。

農閑期なので、人々は思い思いに受け持ちの区域へ行けば良かった。採取期のように監督の角笛に統治されない。

ポツポツと畑へ行く人影のかつぐクワが朝霧の中をゆれて行く中を、運平は本部へ足を急がせた。

サルトリオ総支配人はモーニング・コーヒーを飲んでいて。別名を小さな昼食と呼ぶだけあって、テーブルには種々のパンや果物やチーズやハムがピカピカに輝く銀器に盛られて、白い服を着た黒人の女中がサーブイスしていた。

「よう、イラノ。何の用かね」

サルトリオは気軽に声をかけた。

「ま、一緒にやらんかね」

「じゃ、コーヒーだけ」

と断って彼は坐ったが、

「私の名はヒラノ。イラノではないです」

と言った。

ポルトガル語にHの発音はないので、ハヒフヘホはHが脱けてアイウエオになる。例えばアサヒはアサイ。ハナはアナ。大抵の人は面倒臭いからそのままにしてしまうが彼は辛棒強く訂正した。

「フィラノ」

サルトリオはむずかしそうに何度か言ったが、やがてヒラノと呼べるようになった。

「日本人、働きたくない。三家族を追い出す。そうすれば、あとの人、働く」

と、運平は言った。

「……！」

サルトリオは驚いたように相手を見た。

サン・マルチンの大騒動の話はすでに聞いていたので、運平の言いたい意味はすぐ分かる。

しかし、まだ騒ぎも起きていない段階で、思い切ったことを言いだす若造だな、と興味探そうな顔になっ

た。

「そうしたら、本当に、他の連中は働くようになるかね」

「シン・セニョール」

と運平はうなずいた。

絶対に自信があるわけではないが、機先を制した方が勝ちだと思っている。桶狭間の近くで育ったから織田と今川の戦の話は耳にタコができるほど聞かされている。

平野家は遠く源氏の流れをくみ、織田の家臣でもあったというからなおさらだった。祖父や養母から聞いて育った物語りが、こんな場合の若者の行動に影響を与えても不思議はない。

「よろしい。お前の言うようにしよう。日本人のことはお前が一番良く知っているからね」

サルトリオは詳しく開かずに大まかに頷いた。

農場としては、金をかけて呼び集めた労働者を一年の契約が済まぬうちに出すのは、損害である。でも、運平の言うように三家族だけで済めば、他の二十家族が助かる。州兵まで出動したサン・マルチン―ニヨのような騒動は避けたかった。

「今晚、言って欲しい。明朝すぐ農場を出るように」
追いかぶせるように彼は言った。

強引なやり方だった。そういう方法が時としては効果があることを、サルトリオは長年の経験から知っていた。

それを、この日本人の若者は対岸の火事からいちはやく学んだらしい。仲々スミに置けない奴だ、という顔を総支配人はした。

「これから、日本人、一生懸命働く。農場は助けて欲しい」

「よし、よし」

サルトリオは真顔になつて、深くうなずいた。

彼は大工あがりだった。”日露戦争で大国ロシヤに勝った国民”という一般ブラジル人の対日認識以上に、日本人の手先の器用さにひどく関心を惹かれていたのだった。他民族の移民だったら、例えば採取出の梯子も二日掛りで危なっかしいものしか作れないのに、日本人たちは現物を一目見ただけでアツという間に本職はだしのものを作った。

職人としてのサルトリオは、無器用な人間は嫌だった。

彼自身も大工だけでなく機械の修理もこなすようになり、だんだんとこの農場で重要な地位に上がったのである。

自分の部下に無器用なのみ込みの悪い人間を三人置

くより、のみ込みの早い奴を一人使うほうがずっと能率が挙がる、と思っていた。

自分が器用な人間は、無器用な人間が営々と積み重ねる仕事の価値を認めてはいても、一緒に仕事するのはまどろこしくて我慢できない。サルトリオが日本人に寄せている人並み以上の関心と好意は、多分に、そんな彼の気質から来ていた。

その日の夕方、十人ほどの家長代表が運平に連れられて本部の事務所にやって来た。みんな気負いたっている風だったが、事務所に入るとやはり勝手がちがって神妙になった。入口には人相の悪い用心棒が煙草を巻きながら数人たむろしていた。大きなテーブルの向うに総支配人が坐っていた。両側に何人かの監督もいた。

サルトリオは口を開いた。

『諸君の要求は、ここにいる通訳のヒラノから聞いた。農場側としてはこのような要求に応じる義務はない。なぜなら、我々が諸君と交わした契約は州政府立合いの公正なものであるからだ。農場側はこのような謀議をこらした責任者を追放することにした。以下、私が名を挙げた家族は明朝八時まで、この農場から退出してもらおう』

サルトリオは三家族の家長の名を言った。

運平の通訳を聞いて、家長たちは咂然とした。暫くして、やっと我に還ったように口々に懇願しはじめた。

『通訳さん、言ってくれ、それはひどい。わしたちは、こうやってもらいたいと思ったことを、言ってみただでだ』

サルトリオは表情を変えなかった。

『ノン、この農場のやり方を変えることはできない』
『そんなこと言うても』

『絶対に変えられない』
『……』

気押されて、人々は動転したまま顔を見合わせた。

『それもいいさ！』

突然、西が昂然と言い放った。

『おれは自由になれたんだぞ。アルゼンチンへ行くぞ。……なあ、みんなおれと一緒に来んか！』

無理に笑顔をつくった西に見られると、家長たちは困惑して目を伏せた。

自由になれるのは羨しいが、一方では不安だった。ここから出たくて騒動を起こすつもりだったが、機先を制されると逆になった。出るなといわれる、と出たくなるが追い出されるとなると尻ごみしたくなるのが

人情だったアルゼンチンがいいというのも噂だけで、本当かどうか知らない。再び船賃を使って言葉の解らぬ外国を旅するのに二の足を踏むのも当然だった。もう少し様子をみてからでもいいのではないか、という弱気にとりつかれてしまう。

『どうだ、みんな。ここで一騒ぎすれば全員追放だ。やろうじゃないか。……どうしたんだ。こんな処にいてもウダツが拳がらん、と言つてたじゃないか』

西がアジった。

積極的に応える者はなかった。

『もう帰るように』

機を失さずサルトリオが宣告した。

十人がゾロゾロと外に出ると、暗い径は星だけが異常なまでに輝いていた。九月の半ばにしては暖かい晩だった。そろそろ春が訪れる気配があった。日本で言えば三寒四温の時節だった。追放処分を受けて昂ぶっている人々を囲んで、すっかり出鼻をくじかれて消沈している家長たちが黙りこくって歩いていた。用心棒が送り狼のように距離をおいてついて来るのも無気味だった。

よりよい生活を求めて未知の世界へ飛び出したい誘惑と、何はともあれ今夜の暖かいねぐらだけは確保し

たい本能が、人人の胸の中で三角波のようにせめぎ合い、ぶつかり合っていた。暗い人影は渺々たる夜の海の漂流物のように、黒々とかたまって動いていった。

翌朝、運平は三家族を荷物を乗せた馬車と共に駅へ送って行った。

上井の妻のヒロはまだ十九才だった。ブラジル移民資格を得るため慌しく挙式したばかりの、まだあどけない娘だった。彼女は泣きはらして真っ赤な目をしていた。長屋の人口で、他の女房たちとの別れを辛がってひどく泣いた。まだ気心も知れぬ夫と、従兄の西の三人だけになって、これから遠いアルゼンチンへ流れて行く女を、可哀想だと彼は思った。しかし、移民の最後の砦となったグアタパラを守るための止むを得ぬ犠牲だった。

運平は無表情にステーションに立っていた。やがて汽車が来て、三家族を乗せた列車はホームを離れた。最後尾の客車の箱がだんだん小さくなりやがて、汽車が巻きあげる上埃りの中にまぎれたまま地平線に消えていった。

第三章

グアタパラ農場にピカピカ光った真紅の車が着いた。

今年から生産されたばかりのT型フォードだった。農場主である株主たちの車だが、総支配人のサルトリオも乗っていた。それに、今のところ車を使いこなせるのは彼だけだった。運転手を養成する必要もあつて、彼はこの新しい機械いじりに熱中していた。

ある午後、

『ヒラノ、車に乗ってみないか』

サルトリオが声をかけた。

運平は馬を道端の木につないで助手席に乗った。

ガタゴトと典雅にフォードは動いた。

『どうだ、乗り心地は。馬よりいいだろう』

サルトリオは上機嫌だった。

先を馬が行く。ブツブツと警笛を鳴らすと、馬は道端によった。

グアタパラの町に出ると、人々が珍らしがってワイワイ後を走ってくる。群衆に埃をあびせながらT型は町を一周した。埃を赤くかぶりながらも人人は後を駆

けて来た。

『どうだ。偉くなったような気がするだろう』

サルトリオは後を振り向いてから、楽しそうに言った。

運平は笑った。

『これは仲々いい車だ。よく出来ている』

そう言われても、初めて自動車に乗った運平には判断がつかなかった。

『日本人の移民はこれから来るのかね？』

サルトリオは訊ねた。

『皇国殖民会社とサンパウロ州政府の間で、三年に三千人入れる契約があります。第一回は七九一人だから、あと二千二百人はこの二年に来る予定です』

『そうだな』

サルトリオはすでに知っているらしく、うなずいたが、

『ヒラノ、お前をちゃんとした地位につけてやろう。』

そして、日本人をどんどん入れてくれ』

と、言った。

『はい』

何気なく運平は頷いた。

『では、今日からお前はグアタパラ農場の副支配人だ』

『ええ。ええ』

冗談だと思って彼は笑った。

『不服かね？』

ジロツとサルトリオは運平を見た。

『は？』

『本当なんだよ。お前は副支配人だ』

『何と言いましたか？』

彼は我が耳を疑った。大分ポルトガル語に馴れたとはいえ、聞きちがえということもある。エンジンの音にまぎれてちがう単語だったかもしれない。

『副・支配人・だ』

サルトリオは力強く、一語一語ゆっくり一言った。真紅の車の行手には、二百十一万本のコーヒー園が遙かに連なっていた。それを無造作にグルツと手で指してサルトリオは言った。

「これからは、お前はこのグアタバラ農場の全ての人間に命令することができ。ただし、私以外はな」

「自分が副支配人……」

つぶやいたまま、運平は呆然としていた。

あまりのことに実感が湧かなかった。

……三家族を追放してから、たしかに彼は先に立って一生懸命働いた。通訳としての立場を踏み越えて犠牲を強いただけに、何としてもここを持ちこたえよう

とだけ考えてやって来た。逃亡者はボツボツあるが、大部分は残ってくれた。

作業はすでに採集期を過ぎていた。人々は一人二千五百本のコーヒー樹を受けもち、除草が主の手入れをしていた。手がすけば、牧場の柵直しや大工仕事などの賃仕事に出た。採集期の季節労働者は去り、人も少なくなっていた。

彼は有利な賃仕事を探してくる一方、草とりはやかましく言つて見廻った。除草期は監督もほとんど不要で、時々馬で廻るくらいなのに、運平に率いられた日本人たちは実に丁寧に草をとった。それは、小さな狭い田畑にしがみついて生きて来た、日本農民の体質だった。移民のほとんどは他の職業出身だが、日本人のだれもが百姓とは一本一本草を抜き、米の一粒をもムダにしないといけないものだ、と思い込んでいたのだ。だから、運平が見廻つて樹の下を覗き込んで、まだ残っている雑草を指摘しても、自分が手を抜いたと首をすくめて仕事をやり直した。

そんなことは粗大な原野に育ったブラジル人には考えられなかった。

ところで、コーヒー園は肥料を使わない。木を伐つて山を焼いたあとの肥沃な土壤にコーヒーを植え、何十年かけてゆっくり地力を消費していくだけの農法

だった。従って実の成り工合は天候の条件を別にすれば除草が完全かどうかで左右されるのだった。雑草が茂っていればコーヒーの成りは当然悪かった。

サルトリオの目には、日本人の除草ぶりは賛嘆に価するものだった。葉切り蟻以上かもしれない。採集期には季節労働者を入れるとして、普段は日本人を主力にしたいと考えるようになっていた。そしてその日本人をまとめているのは運平だった。

移民は、希望する農場が州政府に登録し、移民会社がそれとにらみ合わせて分配するから、一農場がそう勝手にはできない。新移民を必要な数だけグアタバラに引っぱるには思い切った手を打つ必要がある。

それで、サルトリオは運平を運支配人に大抜擢したのだった。

サルトリオ自身も、資本もなく、腕一本で抜擢された人間だった。彼はイタリアで産業革命で没落したギルドの親方の家に生れてブラジルに来了。本来なら、コーヒー園で働いたあとサンパウロ市に移って中小工業の担い手になった階層のイタリア人に属するのだが、グアタパラ農場で大工から機械監督の仕事に手を染めるうち、かなりの発明をした。コーヒー園の中を流れている小川の水力を利用して、等高線にそって溝を掘り、そこに収穫した実を流す装置を工夫、完成し

たのだった。溝は最後に乾燥所入口に流れ込むようにした。運ぶ手間がはぶげ、実の洗浄ができ、比重で三等級に分けられる、一石三鳥の装置だった。この発明の功で、総支配人の席が空いたとき、彼はそこにすえられた。

そういう経歴のサルトリオにしてみれば、若いが見どころのある運平を副支配人に引きあげるのに、何のためらいも不要だった。

……車から降りて独りになった運平は、まだボンヤリしていた。すでに馬に乗っているのだが、習慣的に手綱を握っているだけである。馬も、どうしていいかわからないらしく、勝手に歩いたり立ち停ったりしている。

日本人が気に入ってもっと移民が欲しいらしいことは分る。だが、そのことと、二十二才の若造の自分がドカンと副支配人にされるという点とがどうもうまく結びつかないのだった。

明治の日本に育った彼の感覚からいうと、そんな場合せいぜい自分を監督に引き上げて恩を売ったり、政府の係官や移民会社の幹部に一杯飲ませて接待したりするのが考えられる策略だろう。現に、日本の移民会社は地方の代理人を集めては芸者を揚げて飲ませ、そ

れで移民募集の成績を挙げている。

それなのに、いきなりおれを副支配人にして、ブラジル屈指の大コーヒー園を委せるとは……。武者震いのようなものが体を貫いた。

馬はトコトコ走った。だんだん運平は愉快になって来た。

「アハハ……」

と彼は独りで笑った。

今までは他人のものだと思っていたコーヒー園が、なんだか自分のもののように思えて来たのが不思議だった。こんなやり方が存在するブラジルという国が、少し好きになっていた。スペインへの夢が遠くなった。へそれもいいさいつかは行く機会があるだろう。暫くはここで頑張ってみよう、面白い国じゃないかゝと思った。

「アハハ、アハハ」

彼は哄笑しながら馬を駆けた。果てしなく続く緑の園だった。林の中に若さが燃えていて、どこまでも遠く馬を駆って走って行けそうだった。

毎日のように雨が降るようになった。雨期に入ったのだ。たつぷりと暖かい雨がそそいだ合い間に、カッと太陽が照りつける。自然は豊饒な生命力を惜しみな

く地表に注ぎ込んでいた。

人々は雑草と闘っていた。信じられぬスピードで芽が延び、根が張る。数日仕事の手順を狂わしたら、手がつけられぬほど草は還しく繁った。草の根も一筋も残さないように掘り返すのが、一番効果があるやり方だ。しかし、実に手が掛る。一人に二千五百本の受け持ちは楽ではなかった。

運平はクリスマスを利用してサンパウロへ行った。上塚周平に自分が副支配人になったことを告げるためだった。上塚は喜こんでくれるにちがいない。久し振りに、人々の近況を知りたかった。

一日中汽車に揺られてルス駅に降りたつと、車夫が目敏く見付けて、

「おう、ジャポン！」

と呼んで手まねきした。

近付くと、

「乗れ、乗れ」

とすすめる。

言われるままに乗ると手振りで三ミルの金を要求した払うと、行先も聞かず馬車は走りだした。

運平は呆氣にとられて遥れていたが、やがてへなるほどと合点がいった。言葉が解らない日本人移民が

コーヒー園から逃げだしてくる、サンパウロを目指して来たものの行くあてがないから、終着駅でウロウロしているそんな連中をつかまえて何処かへ運ぶ商売が成立しているらしい。流石は生き馬の目を抜く大都会だ、と彼は感心した。

「どこへ行くんだね」

声をかけると、黒い制服に山高帽の御者は、

「おや、あんたはポルトガル語が喋れるのかい」

と振り向いて驚いたが、

「サンパウロ通り二〇番地だ。そこに日本人の家がある」と答えた。

サンパウロにスーベニル・ショップを開けている仙台の藤崎商店の店員の後藤武夫が家を一軒かりて、移民の合宿所みたいになっている、という噂を聞いたからそこだろうと思った。

「私はそこへ行かない。ロドリゴ・シルバ通り四十番地へ行く。日本の移民会社の支店がそこにある」

と運平は指示した。

「ああ、そこはもう閉めた」

と御者は答えた。

何でも良く知っている奴だ、とビツクリしたが出張所を開けたばかりで閉めるのは変だった。腑におちない。

「本当か？」

「閉めたよ」

御者は自信たっぷりに答えた。本当らしい。

「じゃ、ボア・ビスタ通りペンソン・ボアビスタへやつてくれ」

と運平は頼んだ。

そこに上塚周平が下宿している筈だった。

流石にそこまでは知らないらしく、御者は黙々と馬首を転じた。

「どうする。待つか？」

ベンソンの前で御者は訊ねた。

「そうだな。ちよつと待ってくれ」

運平は降りて中で聞くと、やはり上塚周平も引き払っていた。

「ここにいた日本人ならシルヴァ・テレス街二十八番へ移った」

帳場の男は親切に教えてくれた。

「どの辺だろう？」

「プラス駅の近くだ」

移民収容所のそばだった。通訳組が一カ月半はど住んでいた付近らしい。あの辺なら地理も解るから馬車代の十分の一ですむ市内電車で行ってもいいのだが、あたりには黄昏が迫っていた。

運平は再び馬車に乗った。

繁華街を抜けると、馬車はトコトコ長い坂を降る。ブラス駅の近くは町工場などがあり下町らしきもあったが駅を過ぎて暫くすると風景は俄かに淋しさを加えた。牧歌的なのかなたたずまいではなく、都会の隅に吹き寄せられた貧しい人々の生活が醸し出す遣り場のない寂寥が、じめじめした平べったい土地から漂っていた。

馬車が停まったとき、空には三日月がくつきりと浮んでいた。そして大きくないが、一応はちゃんとした一軒家の前だった。

馬車を帰して、彼が案内を乞おうとしたとき、向うの空地の草むらを二人の労働者風の男が、袋をかつぎながら横切ってくる姿が目にとまった。その影に見覚えがあった。

一人はヒヨロツとして猫背で、もう一人はずんぐりしている。

「上塚さん！」

運平は声をかけた。

「誰かな……」

応えがあった。

運平は走り寄った。懐しきがこみ上げた。

「平野です」

「おお、平野くん」

「元気ですか。やあ、香山くんも一緒か」

笠戸丸で来て、周平の書記になった香山六郎だった。

「よく此处が分ったね」

「上塚さん。私はグアタパラの副支配人になりました。日本人が認められたのです。それをあなたに報告したくて来たのです」

暗い中で、顔をのぞき込むようにして、運平は勢い込んでそう言った。

「おっおっ！」

周平は奇声を挙げて、袋を投げだした。カラカラと乾いた音がした。泥だらけの顔に笑いが拡がった。

「そうか……。夢のようだ」

何度も満足そうに頷きながら、周平は手を延して運平の手を握った。

「おめでとう」

「上塚さんが一番よろこんでくれると思って」

「よくやってくれた」

運平はサルトリオのことを話した。自分を副支配人にしたのも、もつと日本人に入ってもらいたい希望の表明に外ならない。どんなに周平が力づけられるかと思ひながら運平は力を込めて話した。

が、周平の顔は暗くなった。三日月の淡い反射では、伏せられた視線の行方も定かでなかった。

「すると、なにか……。君は日本移民をもっと入れる役目を担わされて、支配人に昇進した、というのか」

「はい」

「そうか……」

周平は唐突な溜息をついた。

「どうしたんですか？」

「切角だが、移民はもう来んよ」

上塚は絶望したように首を振った。

「どうして？」

「皇国移民会社は破産した」

「えっ」

「移民を送る会社はもうないんだよ」

「……」

運平の体から力が抜けていった。

「やはり外務省の許可が降りなかった。再開のメドが立たず会社は消滅した」

立ち竦んでいる運平の耳許を藪蚊がうるさく飛びまわっていた。

「ま、中へ入ろう」

周平は彼の肩を抱いていたわるように歩きだした。

地面に転がった汚ない袋を二つ、香山がかついだ。

殺風景な部屋だった。

安物のベッドがいくつか置いてある。木箱や柳行李が積んである。それだけで、家具らしいものはなかった。

二人の青年が床にあぐらをかいて、手仕事をしている。灯火が暗いので二人の手は影をいぢっているように見えた。

「紹介しよう。私の学友で北米から来てくれた井上新平君だ。こちらの有川新吉君は知っているな」

「ええ」

運平たちが移民収容所に通っていた頃、有川はホテルでジャガイモの皮むきをしていた。一年前に鹿児島県の隅部判事一家と共に新天地開拓の壮途についたが、たちまち行きづまったのだ。

井上新平は自哲の、いかにもインテリらしい感じのする青年だった。

周平は床に散乱した紙切れやブリキ片をどけると、二人の間にどつかと坐って袋を逆さにした。三十センチほどに切った竹がカラカラと転がり出た。

「一体何を始めたんですか？」

運平は呆気にとられ訊ねた。

「玩具を作ってます」

周平が答えた。

「会社が潰れて給料が来なくなった。食えないので、
こうやって玩具を作って売ろうという魂胆だ」

「売れるんですか？」

「まだ分らんが、松永が売り歩いている。なにしろ無
資本だから……ほらこれが紙風船、ブリキの兵隊さ
ん、この竹は竹トンボ。どれも材料はタダだ」

「……………」

「今日はえらい目に逢ったぞ」

周平が溜息をついた。

「競馬場の横の竹を切っていたら、番人に見付かって
散々に油を絞られて」

と香山が説明した。

「平身低頭して謝って、それでも切った竹はちゃんと
持って来たアハハ」

「上塚さんに材料拾いは無理ですよ。オットリして。
松永なんか柵の中のブリキでもチャツと持って来る」

と有川が笑ったが、すぐ気の毒そうな顔になって、
「折角の竹だけど、さっきも松永が戻って来て言うに
は竹トンボはご免だそうです。実演するたびに駆けて
拾いに行かねばならんので、商売にならん、と言って
ました」

「おや、おや、くたびれ儲けのどなられ損か」

玩具の話ばかりしている四人を眺めながら、運平は狐につままれたような顔をしていた。

「井上君はな、わしが困っているのを聞いて、北米からわざわざ金を持って助けに来てくれたのだ」

と周平が運平に言った。

「ところが途中でスリにやられて、無一文で転がり込んで反って迷惑をかけているんだ」

と井上が頭をかいた。

四人は色紙を貼り合わせ、広げるとランタンになる細工を、馴れぬ手付きで顔だけはしかめ面をして一心に製作していた。運平は手持ち無沙汰のまま坐っていた。

紙に使うノリを周平はちよいちよいつまんで口に入れた。

「あまり食べると、ノリが足りなくなります」

有川が冗談とも本気ともつかぬ苦情を言った。

「ホッホッホッ」

周平は指にしていたノリを丹念になめながら、「腹が減ると、なんでも旨いでなあ」

と答えた。

「お前は舌切雀だ」

と井上はまぜ返しながら、自分も食べた。

運平はそつと立ち上りながら、香山に目配せした。

水を飲むふりをして台所へ行った。ガランとして、食べられそうなものもなかった。湿地帯に建つ家の、すえた臭いだけがよどんでいた。

どこか遠くを聖歌隊が通っていた。今夜はクリスマス・イヴだった。

「これで何か買ってきてくれ」

かなりの札を運平は無雑作に渡した。

「ワッ！」

香山が嬉しそうな声を挙げた。

「貰った醤油がまだ残っています。平野さん、牛鍋にしましょうか」

「うん。それがいい。米も酒も買って来てくれ」

「皆さーん。今夜は牛鍋です」

香山が大声で報告すると、

「なにっ！牛鍋……」

三人とも一斉に立ち上った。

あまり急に立ったので周平は立ちくらみしたらしい。

ヨロヨロとへたりこんでから、

「いや、いいでしょう。たまには牛鍋も」

と肩で息をしながら言った。

グアタパラへ帰ると、彼が留守の間に更に数家族が

逃げ出していた。何一つとして彼の副支配人昇格を力付けてくれる材料はなかった。流石に運平は悄然たる想いだった。

皇国殖民会社の消滅を聞いて、人々は彼の周りに集まった。

『平野さん。おれたちはこれからどうなるのだろう』
誰も動揺していた。日本の船が時々ブラジルに来てくれば、まだ自分たちは祖国とつながっているという安心があった。

『おれたちは棄てられたのかい……』

『もう誰も来んのか』

『分らない』

と運平は言った。

『畜生！騙されたんだ。おれたちは騙されたんだ』

口惜しそうにわめく声があった。

『そうだ。確かに、騙されたのだ』

と彼はうなずいた。

政治家や殖民会社や新聞記者たちの『夢』に、そして自分自身の『夢』に騙されたのだと思った。

『しかし、頑張るしかない。へこたれても、ヤケになっても、誰も助けに来てはくれんだ。それも此処で、だ。サンパウロに行っても大したことはない。余計に稼ぐようだが、家賃や食料で結局は出てしまう。それ

を、おれは見えて来た。日本へ帰れる日まで、何とか此処で頑張るんだ』

暗いランプの下で背を屈めてノリを舐めていた周平の惨めな姿が、脳裡にこびりついて離れなかった。一番参っているのは運平自身だった。

事務所でサルトリオは待ちかねていたように、

『いつ移民は来るのかね？』

と訊ねた。

本当のことを答える勇氣はなかった。しかし、嘘もつけない。

『第一回目の評判が悪かったので、いつになるかまだハッキリ決まっていないようです』

と、苦しい答えをした。

『そうか……』

サルトリオは肩をすくめた。

『新移民が来なくては、私が副支配人になっても仕方がない』

辞めさせてくれと言うつもりで、彼はサルトリオの顔を見た。

『私は一度決めたことは変えない。お前は副支配人だ。心配するな』

力づけるようにそう言って、サルトリオは微笑し

た。

その微笑は運平の心にしみた。彼は深々と頭を下げた。

彼は寡黙になった。

グアタパラ農場には、マンボカと通称されるマンジョカ芋栽培地帯と、サトウキビ園と、それらに付随した酒造工場などもあったが、何といっても主力はコーヒー園だった。

そのコーヒー園を受持つ副支配人といっても、差し当って運平が動かせるのは、今では五十人そこそこに減ってしまった日本人だけである。

運平はそれらの人と共に働きながら、毎日コーヒー園を馬に乗って一巡した。一巡といっても二百十一万本である大仕事だった。雨が降っても風が吹いても、彼は休まなかった。そんなことをした人間は、今まで一人もいなかった。何かに憑かれたような働き振りだったが、初めは、無謀で無益な行為のように見えた。

樹は生きていた。

毎日毎日、運平に見られてみると、樹はそれぞれのことを彼にうったえるようになった。彼は広大なコーヒー園の一本一本を知り尽した。正確な判断を即座

にくだせるようになった。いつの間にか、ブラジル人
たちも彼を「セニョール」と呼ぶようになった。朝は
誰よりも早く起き寝るまで仕事をした。そうやって二
年が過ぎた。

……ひどく長い二年だった。人々の生活はだんだん
楽になっていた。しかし、儲けて日本へ帰るにはまだ
程遠い。コーヒーを受持つかたわらに雑役に出たり間
作に精出したり、日曜も休まず働いて、どうにか僅か
ずつ貯えが出来始めた程度だった。

夢中で働きながらも、後続の移民はいつ来るのだろ
うと人々は思い続けていた。もう来ないのではない
か、というあきらめと、いやきつと来るとい希望が
綾なしていたが日がたつにつれて絶望の色が濃くなっ
た。

もう誰も来ないのだ、というあきらめが人々の心を
領した。

或る日、電報が来た。上塚周平からだった。

『イミン九〇九ニン、コウベシユツパツス。スグオイ
デコウ』

何度も何度も読み返しながら、電文を持つ運平の手
がふるえていた。

彼は馬に飛び乗ると、激しくムチを当てた。

「新移民が来るぞー！」

農道を疾駆しながら、唇をふるわせて呼びかけた。枝にビッシリと青いコーヒーの実が成っている。その中の幾つかは早くも赤く色付き始めていた。

樹の蔭からバラバラと日本人たちが飛び出して走り去る馬と人に向って喊声をあげた。労働と栄養のバランスがとれないので、人々はめつきり痩せていた。医者が診ればへ慢性の栄養失調と言ったにちがいない。

晩秋の青い空の下を、運平は一気に丘の頂きまで馬を駆けた。しとどの汗が馬の首を濡らす。

コーヒー園の中で此处が一番高かった。かなりの急坂で労働者泣かせの難所だった。だが、眺望は素晴らしい。

眼下に労働者住宅の三つの群れがある。日本人たちは一番高い処を「奥村」と呼んでいた。次の住宅群は「サンパウロ」水の便が良いので、便利だからサンパウロだ。

その下に「山羊町」があつた。山羊町から平坦になり、ずっと向うに百軒長屋が幾つも重なっていた。その辺が農場の中心だった。百軒長屋の右手に本部の施設が見えた。

それらの施設のはるか向うに、リンコン河のゆった

りした流れの一部が光っていた。

運平は丘の頂きに馬をとめて、景色を眺めた。すっかり馴染めず心細く感じたのだったが、今ではこの拡がりが快かった。針の一点のような自己の存在が、この風景の全てと緊密に繋がっている実感にあった。

彼は肩の重荷が降りたような明るい表情をしていた。

思えば、この二年は苦しかった。破格の昇格は負担すぎた。サルトリオの信頼に応えるというより、むしろ、新来の日本人がバカにされない為に背のびして精一杯に生きて来た。

ウンペー（一本足）とからかわれる度に腹を立てて、自分の名を「かずへい」と呼ばせ、サインも C・H i r a n o とした。

視界の彼方にフォードの赤いボディがきらめいた。運平は「チャッ」と舌打ちした。馬は主人の意図通りに丘を降りた。

駆けてくる馬を認めてサルトリオは車を停めて待っていた。

「いよいよ移民がやって来ます」

「そうか。何人来る」

「九〇九人」

「よし、ヒラノ、全部連れて来い」

「はい」

二人は笑った。

「今夜は前祝いだ。私の家で食事するように。イノウエも連れて来なさい」

サルトリオは言ってギャーを入れた。

破産した皇国殖民会社はブラジル側と契約した権利一切を、土佐の竹村与右衛門へ譲渡した。

竹村殖民商館が仕立てた旅順丸は、明治四十三年（一九一〇）六月にサントスに入港した。運平は井上馬太郎を伴ってサントスへ迎えに行った。竹村殖民商館のブラジル代理人は上塚周平になった。配耕の実務は鈴木貞次郎だった。

「鈴木くん。全部うちへ廻してくれ」

「無茶言うなよ。十七の農場から申し込みがある。均等配分しないと州政府にどやされるぜ」

鈴木は首を振りながらも、結局グアタパラへ二百三十三人廻してくれた。失敗のあとを受けた再開だけに、関係者たちは薄氷を踏む思いだった。それだけに実績のある安定したグアタパラへ、他農場の不平を覚悟で、大量の移民を配耕したのだった。

第三回、第四回、第五回……とグアタパラ農場は日本移民を吸収し続けた。

グアタパラは賑やかになった。運平を中心にした小王国のようだった。長屋を二つぶち抜いてお寺ができた。

僧侶はいなかったが勝手に「西本願寺」ということにして冠婚葬儀はそこでした。日本語学校もつくった。若者たちはブラジル学校の夜学に行くように強制された。カトリックの神父の妹が先生だったから外人の女はキレイだと家長たちもABCを習いに行った。元旦、天長節、四季の祭り、運動会……祖国の行事は全て再現した。

運平は超人的に働き続けた。

採集期になると、枝を叩いて実を落す者がいる。木が痛むので農場では厳禁していたが、あとで証拠を発見するのはむずかしい。東の空が明るんで、白い息を吐きながら労働者が畑に来る。あたりには誰もいない。しごくのは面倒だから枝を叩く。すると向うの樹株の暗がりから黒い影がむつくりと起き、

「オーッ」

と叫ぶのだった。

運平である。決して叱らなかったが、相手は今まで副支配人に見詰められていたかと思うとゾツと縮み上った。

昼間、二百十一万本の畑を見廻る習慣はすてなかつ

た。

夜になると監督たちから労働者の出来高の報告を受ける。書記が横で次々に帳簿に記入した。

日曜日に売店に人々が食料や日用品の買い物に来る。

ツケだから、間違いや思い違いが生じないように、運平は書記を連れて午後遅くまで立ち会った。一週間、働き通しだった。

移民たちの収入も増え、一年で渡航費分だけは稼げるまでになった。

彼はすでに日系社会の名士だった。日本の政治家や新聞記者がブラジルを訪れると、グアタパラ農場を視察するのがおきまりのコースになった。畑中仙次郎や北村政吉など外語学校の後輩も彼を慕って集った。実弟の榛葉彦平も来た。今夜飲もう、といえば、たちまち気の合った若者たちが集った。

第二回移民の山口県出身者の中川誠一に、イサノという十七才の妹がいた。美しい娘だった。

運平は彼女に家事をしてもらった。二人の仲は公然の秘密になった。

しかし、彼は結婚式を挙げようとしなかった。彼女に不満があった訳ではない。へなげか？と自問する

ことがあった。外見はすっかり一農場の勤勉な副支配人になり切っていたながら、心の中にはまだ見ぬ世界を広く訊ね歩きたい若者の夢が息づいていた。結婚することはその夢を断念することだった。家族を連れて異郷をさ迷う悲惨をイヤというほど見てきた運平には、
“夢” が生きているかぎりはおいそれと結婚へ踏み切れないのだった。

最近、びんに白髪が目立つようになったサルトリオが運平を食事に呼んだ。彼は晩婚だった。娘が三人いた。食事は彼女たちが腕によりをかけたイタリヤ料理だった。

「私はまだ十年は働けると思う」

サルトリオは仔ブタの焼肉をすすめながら、

「まだだれにも言っていないが、独立するつもりだと打ち明けた。」

「えっ！」

運平は小さく叫んだ。青天の霹靂だった。

「すると、辞めるんですか、ここを」

「うん」

サルトリオは頷いた。

「とりあえず五十万本を目標にして土地を買う。ヒラノに私の仕事を手伝って欲しい。苗を植えてから四年目に結実するまでの世話を請負ってもらいたい。私は

全財産をつぎ込むつもりだ。四年たったらヒラノも十万本くらい植えられる儲けがある。私の近くに土地を買って、自分の農場と私の処の両方を監督すれば良い」

「そんな都合のいい大きさの土地が手に入りますか？」

運平はいい話だと思いながらも、首をかしげた。

彼の知っているモジアナ一帯のコーヒー園は百万本単位で、土地の切り売りなどしなかった。

「この辺には我々程度の資本では割り込めないさ。しかし、ちゃんとコーヒーが出来て、しかも土地を切り売りする処はある」

「そうでしたか」

グアタパラのコーヒー園については知り尽していた運平だが、他の地方のことはあまり知らないのだった。

「私を助けてくれるね」

とサルトリオは言った。

「ヒラノがついていてくれるなら、私も安心だ」

日本人労働者をすっかり気に入っているサルトリオだった。しかし、実際に日本人を動かすのは運平なのだった。

彼にしてみれば、恩人に尽すのは当然だった。しか

もサルトリオは彼がコーヒー国主になる道まで開けてくれるというのだった。

「へーコーヒー園主……彼は胸の裡で呟いた。遠い遠い夢だと思っていた。雇人たちには目もくれず普段は町に住んでこの国の政治まで牛耳っている“農場主”たち……」

それをサルトリオは協力の条件として、最短距離の太い線で運平に結びつけて提示してくれたのだった。大農場の総支配人を勤めあげたサルトリオが見込み違いをする筈がなかった。また、嘘を言うはずもない。運平の背後には数百人の日本人が力として存在しているのだった。

「フアゼンデイロ……」

急なショックで運平はボンヤリと呟いた。

考え抜いた末の落ち着いた微笑でサルトリオは頼もしそうに運平を見た。

「わしの娘を貰ってくれるといいがね」

さり気なくそう言った。

「君に若い娘がいることは知っている。若いうちはいいさ。それとも、やはりジャボネーザの方がいいかね」

「スペイン女がいいです」

苦しまざれに運平は答えた。

「えっ、それは困った。イタリヤ人の娘はイタリヤーナだからね」

サルトリオは笑ってそのことはそれ以上言わなかった。

サンパウロ市に日本帝国総領事館が正式に開設されたのは大正四年（一九一五）七月のことであるが、事実上の業務は前年の九月から開始されていた。リオ州ペトロポリスの公使館より、首席書記官兼総領事松村貞雄がサンパウロ出張所へ着任したのだった。

サンパウロ州の日本人は一万人を越していた。その連絡中心地はサンパウロ市である。小さいながら日本人社会が誕生していた。

赴任した松村は各方面の日本人と精力的に接触した。

といつても、古株の藤崎商店の後藤武夫を中心に小さくまとまった社会である。後藤が紹介する人物に会えばいい訳だった。出張所の家具も後藤が競売所で買い込んで来たのだった。

所用でサンパウロ市に来た運平が松村に会ったのは、総領事が赴任した約一カ月後のことである。

「松村だが、会いたい」

とホテルに電話が掛ってきた。後藤に聞いたらし

かった。

出張所があるアウグスタ街は、ホテルから歩いて三十分ほどの距離だった。すぐお伺いすると答えた運平は、馬車にもタキシードにも乗らず、歩いて行くことにした。

久し振りに都会に出てくると、街のたたずまいが新鮮に目に映じた。裾が石畳を曳くほど長い、女たちの服装も田舎では見られない。

イギリス地の純毛の三つ揃いの背広を着て、白いカラーをぴんと立てた運平は楽しみながらゆっくり街を歩いた。八月だった。春は間近かに迫まっていたが、高原のサンパウロ市はまだうすら寒かった。しかし、高揚した気分には、この寒さは反って気持ちよかった。

平野運平は二十八才だった。この国に来て六年たっていた。

丁度六年前の今頃、上塚周平がよろめきながら現われて、涙を流した。どこを向いても不満と暴動が渦巻いていた。周平に懇願されて、彼は移民たちを押えるのに無我夢中の日を過した。……それが今では、名実ともに大農場の副支配人であり総監督だった。人間の一生とまではいわないにしても、ここ数年の生活の変わりようは振り返ってみると、夢のようだった。

上塚周平は前年に移民会社の代理人を辞めて日本へ

帰った。通訳五人男ともてはやされた仲間たちも遂に芽が出なかった。仁平は肺を病んで日本へ帰った。結婚したばかりの新妻を連れて帰る金もなく、独りで咳をしながら船に乗った。

語学の天才を自ら任じた加藤も浪々の身となったまま定職といえるものもなく賭博にうさを晴らしているらしかった。大野は何とか成功しようとあがいて、次第に山師的な仕事に深入りしていた。ブラジルで生まれた女の子も鉄道工事監督で奥地に行ったときにマリアにかかって、まもなく死なした。嶺はリオに行つて商店員となつたが、またサンパウロに戻つてブラブラしている。

なぜか彼だけが成功者だった。農繁期には千五百人の人間を使いこなしている。彼の小柄な五体から自信と精気が発散していた。どこへ行つても『グアタパラのヒラノ』で通るのだ。今夜飲もうと伝えれば、何十キロも馬を飛ばして仲間が集まつた。家に帰ればイサノがひっそりと待っていてくれた。

これからサルトリオの新事業に加わつて、四年たてば彼も優雅なコーヒー園主だった。弟や支配人に農場をまかせて、ぶらりとヨーロッパ旅行をするのも夢ではない。コーヒー園主の息子たちはヨーロッパに留学するのが普通だった。あと十年もすれば彼にそういう

生活が待っているのは、ほとんど確実である。サルトリオが、そして運平自身が、コーヒー園の経営に失敗するなど、起こりようがないことだった。

アウグスタ街のゆるやかな坂の途中に、総領事館があった。白大理石の円型階段が前面に張り出した瀟洒な二階家である。

名を告げると館員が応接室へ通した。正面の菊の紋章の黄金色が目を射った。

「すぐ総領事は来られます」

一礼して館員は部屋を出た。

運平は背筋を正して、菊の紋を仰いだ。祖国を出て初めて見る菊の紋はひどく彼を厳粛な気持ちにさせた。

「忙しい处を呼びたてて恐縮ですな」

松村総領事が入って来た。中肉中背、色は浅黒いが、親しみのもてる感じだった。

「わざわざお電話いただいて光栄です」

と運平は頭を下げた。

「貴方の名はかねてから聞いています。ぜひ会いたいと思っていた」

「田舎者です」

「とんでもない。背広の着こなしもいい。田舎者といっても通りませんな」

固くなった運平をくつろがせるような言い方を松村はした。

松村はペトロポリスの公使館では運平の功績を非常に高く評価していることを一しきり述べたあと、近況を訊ねた。

運平は問われるままにグアタパラの邦人の生活振りを話した。彼自身はサルトリオと共に新コーヒー園の造成に乗りだすつもりだと言った。

「ほう、グアタパラを辞める……」

松村の目がキラリと光った。暫く考えている風だったが、

「平野さん、あなたの移民に対する考えを伺いたい」と言った。

「現場にいと、無遠慮な意見しかないのです」

「卒直な意見こそ伺いたい」

松村は答えた。

「私は移民は可哀相な存在だと思っています」

と運平は言った。

「国家や会社に騙されてやって来た訳ですからね」

「はう、これは手厳しい」

松村は苦笑した。

「閣下に申すのは失礼ですが、本当のことです。初めの頃は借金が増えぬようにするのが精一杯でした。今

は随分良くなりました。グアタハラなら一年頑張れば渡航費は何とか払えます。帰りの分はもう一年、つまり二年働けば往復の渡航費は出ます。しかし、儲けようとしたら十年はかかるでしょう。一人も病気をせず、子供も産まず、好条件の農場で頑張った、としての話です」。

「なるほど」

「現実には不可能に近いです。誰でも病気をする。コーヒーの値がさがることもある。つまり、移民は何年働いたって儲からないのです。故郷に錦など飾れんです。

日本で移民を募集するに当ってそんなことはこれっぽっちも言わないでしょう。移民たちはこの国に着いてから騙されたことに気付く。しかし、もう遅いのです。来るだけで無理に無理を重ねて渡航費を算段した連中が、おいそれと帰れる訳はない。いくら地団駄踏んでも、移民の声はどこにも届きません。不貞腐れて働かないと宣言したところで誰も助けてはくれない。飢え死しないために泣く泣く働くより仕様がないので。人間生きているかぎり希望が生まれる。何とか日本へ帰りたい一心で食うものも食わず働く。一ミル二ミルと金を貯めようと思つて……必死に働きます。それが外務省の報告や新聞の記事では『日本移民ハ評判

ガ良ク、農場主達モロヲ極メテソノ勤勉ヲ激賞セリ』
となるのです」

ウームと松村は唸ってから、

「確かにあなたのいうとおりでしょう」

と頷いたが、

「わたしもこの国に来てから、実情はおぼろ気ながら
掴んだつもりです。だが、移民を外国へ送ることを中
止する訳にはいかない」

と言った。

「そうでしょうか」

「我が国は徳川時代の鎖国ですっかり国際社会に立ち
遅れている。どのような犠牲を払っても民族の海外発
展を図らなければならない」

「それは分かります。しかし、連中を希望のない貧し
い生活へ突き落してそれが果して海外発展の名に値し
ますか」

「そこです。移民はどんどん来る。来た人々に豊かな
人間らしい生活をして貰わねばならん。ではどうした
ら豊かな生活ができるか？まず、出稼ぎ根性を捨てな
ければならん。そして土地を買って自作農になっても
らう。ブラジルには開拓を待つ土地が無限にある。安
い土地を買って開拓者になって貰うのです」

「……」

「貧しさから脱けだす道はこれしかないと思う。私もいささか奥地を視察しましたよ、平野さん。開拓と一口に言っても言うは易く行なうは難いことは実感しました。しかし、人々が団結すればできると確信しました。一人や二人の力ではどうにもならないが、千人二千人と力を合わせたら森は拓ける。一家族で一万本のコーヒーを植えたら、百家族で百万本、二百家族で二百万本……それだけでブラジル屈指の大農場に拮抗する勢力でしょう」

「それは、私も同感です」

と運平は言った。

今までグアタパラに視察に来た官僚は十指に余るが、ほとんどがお座なりに見て帰るだけだった。報告書を書くためにイヤイヤ来たという態度を露骨に示す者さえいた。掘り下げれば面倒な問題がいくらでも出てくる、“移民”という貧しくなってしまった人々のことを真剣に考えたくないのだった。要するに、日本から出てくれたらそれでいいのだ。あとは遠い地球の裏側のことだ。海外雄飛というイメージからはみ出すような問題には蓋をしておいた方がいい。

しかし、松村総領事はもう少し親身な立場で考えてくれるようだ、と運平は思った。

「開拓といっても、団結しなければ成果は挙らない。

それには指導者が要る」

と、松村は言った。

「早い話が土地一つ買うにしても、移民たちは言葉が解らない。土地を選び、多くの人々を統率する人物を得て、始めて開拓は成功するのです。そうではありませんか？」

「お説の通りでしょう」

運平はうなずいた。

松村は真正面に運平を視て、

「私の見るところ、指導者たる資格を備えた人物は一人しかいない。それはあなたです」

と、言った。

「平野さん、日本移民が真の海外発展をする突破口を開いて貰えまいか」

「…」

彼は突嗟には何も言えなかった。サルトリオと新コーヒー園を造成するつもりではいたが、そこまでは考えていなかった。

「一つ、お国の為に働いて欲しい。あなただけに先駆者の苦しみをなめさせません。及ばずながらこの松村もできるかぎり力になるつもりです」

松村は頭を下げた。

「考えさせてください」

と、運平は答えた。

諾なつたようなものだった。その瞬間、彼の体の中を熱い風が吹き抜けた。冷たい風のようにでもあった。ずっと前に、こんな事があつた、と彼は思った。六年前に、酒を呷った周平が手を握って頭を下げたのだった、と想い出した。なにかがあの時とそっくりだった。グラツと揺れて、行手の風景がすっかり変わりそうだった。

第四章

……それから二カ月たった。

原生林のなかをヒヨロヒヨロと鉄道線路が延びている。

脱いだ背広を肩にかけて枕木の上を歩いている日本人がいた。運平だった。不精ヒゲをのばし、カラーもよれよれで赤土で真赤に染っていた。

「暑い……」

彼は立ち停って汗をふいた。

線路に添って前と後の視界が利くだけで、細長い帯がすっぽりと原生林の中に埋っているのだった。行手

に小さな橋があつた。下に川が流れている。

「おお」

と、叫んで、彼は土手を降りた。水草を掻き分けてゴクゴクと水を飲んだ。それから顔を洗った。

同じサンパウロ州でもこのノロエステ鉄道線は未開だった。バウルーを起点として鉄道が延びている。開拓者や商人たちがかなり這入りはじめている筈だが、どこに入ってしまったのか人影もない。森が広過ぎるのだ。

運平はサンパウロ市から戻った足で、すぐこのノロエステ線に土地選びに来た。思い立ったらすぐ実行しないと気が済まない性質だった。

バウルー町を根拠に、もう二カ月近くも土地を見て歩いている。いざ始めてみると、土地探しは大変だった。

森に「売ります」と立札が出ている訳ではない。訊ねようにも住人がいない。地主を探すだけで幾日もかかった。

やっと逢えても、地権がいいかげんだつたりする。

ノロエステ鉄道線一帯が将来有望だと教えてくれたのはサルトリオだった。この辺はコーヒー栽培に不適だと思われていたから、大資本家は見むきもしないし、地主も土地を切り売りした。しかしサルトリオの

データではコーヒーは育つのだ。土地が安いのでサルトリオもここに新園を作りたかったが、住人が少なすぎて労働者が集まらないので断念したのだ。

運平は、だから、サルトリオと一緒にこの沿線の土地を見て歩いたことがあって、そこをもう一度、独りで歩いているのだった。

彼のしていることは、サルトリオに対する背信行為かもしれない。

日本人の将来のために植民地を造る、という理念が、サルトリオを助け自分も農園主になる夢よりも、もっと強く彼をとらえたのだった。人は祖国を離れるといつの間にか愛国者になる。生まれ故郷を懐しむ心がそうさせるのであろうか。異郷にいと日本人は誰でも「おいジャポン」としか呼ばれなかった。個人の名は消滅して、おしなべて「日本」としか呼ばれないのだ。日本人であることを意識するなと言う方が無理であった。

彼は決して民族主義者ではなかった。ただし自分だけの成功を追うには、あまりに囲わりの移民たちの前途が暗すぎたのだ。

彼の行手が広げた。数軒の家屋が見える。ペンナ駅だった。駅といっても、汽車は野原の中に停車するだけだった。雑貨店が一軒ある。何十人かのスペイン移

民がこの辺に住んでいた。

馬が駆けて来た。

「オットーさんと連絡がとれました」

呼んでいるのは道案内を頼んだスペイン人の若者だった。幅広い帽子を伊達にかぶり、首には赤いハンカチを巻いている。彼はもう一頭の馬を連れていた。「おう」

運平はその馬にまたがった。

一帯の大地主のビッセンテ・ギマランセスとバウルーで会えた。彼は現地の支配人のオットーと話をするように言った。

今朝バウルーを出て五時間はど汽車に揺られてペーナに着いたが、ずっと原生林が続いていた。しかも、ここは地図でみるとノロエステ線のほんの入口だった。まったく果てしのない大地だった。

若者と共に十分ほど馬を進めると、森の径が広げて農園があつた。豆やトウモロコシが植っていた。さほどの出来とは思えない。手入れが悪いのだ。

作男の家らしい板小屋が五、六軒あり、奥に練瓦建てのどっしりした家があつた。

出て来たのは赤ら顔の大男である。一目でドイツ系と分る顔立ちをしていた。片足を引きずりながら、

ゆっくり歩いて来た。運平の挨拶にもちよつと唇を曲げただけで、ギマランエスとのいきさつもフンフンと鼻であしらっていたが、

「土地をかう！ お前達のように小さな日本人にこの森の開拓ができるか」

と嘲笑った。

よほど横暴な男らしく案内の若者も彼の前では小さくなっている。

運平はムツとして、

「日本はロシヤに勝った国だ」

と言った。

オットーは大笑いして、

「あれはロシヤが弱いからだ」

と首を振った。

「そうかもしれない」

運平は無理に逆らわなかった。

「私たちは戦争ではなく開拓をするつもりだ」

「戦争も開拓も似たようなものだ。自然と闘わなければ生きていけない。お前たちの体格では木一本倒せぬだろう」

運平はモジアナ地方では日本人労働者の優秀性が認められていると話した。

「フーン」

詰まらなさそうにオットーは聞いていたが、

「お前、射撃は上手いのか？」

と訊ねた。

あまりやらないと答えると、

「そんな連中が森に住めるか、ここでは銃だけが頼りだ帰った方がいいな」

と面倒臭そうに手を振った。

「銃よりも鍬が大切だ」

と反発すると、

「バカを言え。銃も扱えんでここでは生きて行けん。おれの右足には弾が入ってるぞ。これを持ってみる」
言いながら吸いかけの葉巻をヒョイと運平に渡した。

何気なく持つと、

「それを持って、あの木の下に立ってみろ」

とアゴをしゃくりながら腰のピストルを抜いた。

へ気の荒い処だ

運平は驚いた。新開地だけのことはある。グアタパ
ラでは、こんなムチャな奴に逢ったことはなかった。
彼は葉巻を持ったままオットーを見上げた。首一つ
分だけ高い。

「どうした？怖いか」

ニヤツと笑った。

へこいつ狂人か。……本当にピストルが上手いのだろうか。もし下手クソだったら、俺は殺されるか、こいつみたいにな片輪になるゝ

そう思ったが仕方ない。

「いや」

と首を振った。彼は指示された木の下に立った。

振りむいて葉巻をかかげると、オットーはピタリとピストルを運平の胸に向けた。一瞬、運平はハツとしたがオットーは平気な顔で銃口をそろそろ移動させた。

タン！

乾いた音が炸裂して、手の葉巻がすっ飛んだ。

「ウハハハ……」

腹をゆすって大男は哄笑した。

「お前はチビだが勇氣がある。大抵の奴は俺がピストルを持って睨むと震え上る。ウハハハ、仲々氣に入った奴だ」

オットーはドシンと運平の肩を叩いた。酷い野郎だと運平は思ったが、済んでしまえば憎めなかった。

「鉄道の沿線はもつと値が上るから売れないが、奥へ入った処なら好きなだけ売ってやろう」

運平はホッとした。

「どのくらい買う？」

「それがまだ分らない」

「分らないで買いに来たのか」

今度はオットーが呆れ顔になった。

「仲間と相談して、また来る」

「そうか。必らず戻って来いよ」

オットーはずっと親しみを見せた。

……帰り路で案内の若者が、

「あなたは凄い」

と言った。

「この辺でオットーさんと対等に話せる人はいない。
みんな怖がっている」

「そうか」

運平は笑っただけだった。

六年も多くの人を使っていたから、尊大で傲慢な大男とも、傍から見ると対等に相手できるようになっていたらしかった。

二カ月振りでグアタパラに帰ると、運平は人を集めて入植計画を発表した。自分たちが地主になって開拓をするのだ。希望者は申し込むように。土地代は測量費込みで一アルケール五〇ミルだ。安かった。草除き仕事をして一月七十五ミルになる。食費に十五ミル引いて、五〇ミル残る。つまり毎月二・五町歩も買え

る。四人家族なら十町歩買える。夢みたいに安かった。夢みたいだ。毎月の稼ぎで十町歩ずつ買えるなんて……。

「希望者は欲しいだけの土地を申し込み、金がなくても頭金さえ都合すればいい」

と運平は言った。

ワツと人々は湧きたった。

随分無茶な話だった。彼自身の生活費はどこからも出ないばかりか、足が出る可能性の方が大きい。いつかは旅に出たいと思っていた。まだ見ぬ国々をめぐり歩いて放浪したい……ペンナ駅奥への出発は彼にとって放浪の一変型だと言えないこともない。放浪だったら金が入らないのも当然だった。人々に夢を与え定着させるために彼は“森”という未知の国へ放浪しようとしている。

たちまち二百家族以上の申し込みが殺到した。グアタパラだけでなく、近くの農場からも噂を聞いて日本人が押しかけた。

「どのくらい買ったらいいやろか」

寄るとさわると人々は相談した。

「コーヒーの面倒は一人二千五百本以上は見きれんなあ。一アルケールに二千本植えて、五アルケール、一万本がいいところだろう。それと、野菜畑と宅地で

「アルケールくらい」

「すると宅地に半アルケールか」

「そうじゃ」

「豪気なもんだなあ。お屋敷が一町歩半とは。……これが日本だったらなあ」

「アホ言え。ブラジルだからこそ、こんなことができるんだ」

「それはそうだ。しかし一町歩半のお屋敷か……わしは何だか嬉しくなつて来たぞ」

「あんた。柿やら桃やら好きなもの植えられますな」
土地があまり安いから必要以上買おうという者はいなかった。三アルケールから八アルケールまで、家族数に見合つた土地を申し込んだのだった。

この噂はすぐサルトリオの耳に入った。

「どういう事なのかね」

彼は厳しい表情で詰問した。

運平は答えられなかった。

ようやく、

「日本人の幸せのために仕方ないのです」

と言った。

「私はお前を日本人だからといって、差別したことがあるかね」

とサルトリオは言った。

確かに彼は差別しなかった。それどころか運平を引き立ててくれた大恩人だった。

だが、この国で言葉が解らず這いまわっている日本人がいることは事実だった。それをイタリヤ人のサルトリオに言っても無理だった。私の農場で働いても人々は稼げると彼は重ねて言った。その通りだった。しかし、移民には“夢”があるのだ。夢をみることでできない人間は、生きている資格がないのだ。運平の決心が変わらないと知って、サルトリオは、憎しみをこめて

「裏切り者」

とつぶやいた。

運平はじつと頭を垂れたままだった。何としてでも、この人にだけはいつか報いなければと思っていた。

第五章

平野運平と二十名の開拓先発隊がグアタパラ耕地を出発したのは大正四年（一九一五）八月一日だった。

汽車はコーヒー園の中をひたすら走った。

申し込みを合計して、一千六百二十アルケールの土地を買った。コーヒーの実の採集が終れば一農年の義務は果たす。十月頃から移住するとしてとりあえず徑を作ったり、仮小屋くらいは用意しなければならぬ。腕っぷしの強そうな青年を選んで先発隊を組織したのだった。

ノロエステ線との中継駅バウルーで一泊した。ここで必要な品々も整えた。

翌日早朝、ノロエステ鉄道線に乗った。朝出て翌日戻ってくる隔日運転の汽車だった。砂利が敷いてないからホコリが立つ。後部はホコリがひどいので、改札口を出ると人々は我先きに前へ駆けて行くのだ。

窓外の風景は一変していた。コーヒー園や牧場やトウモロコシ畑や、およそ人間の営為を示すものは何もなかった。森だけがどこまでも続いていた。そして、冬のノロエステ地方特有の、どこまでも澄み切った青い青い空が拡っていた。その色があまりに青いので、例えば、空に浮んだ一片の雲の白さが、痛いほど目にしみてしまうのだ。しかし、その雲さえめつたに浮いてはいなかった。

この奥深い青さは、乾燥期の森から蒸発する空中の水蒸気の量が、豊富な太陽光線のスペクトルから青だけを抽出するのに最も適した量であるからのようだった。森も、空に拮抗して濃い緑をまとうていた。木々の一つ一つは、種や樹齢を示して微妙にちがっていたが、全体は濃い緑だった。

森には花が咲いていた。冬から春にかけて種々の木が花をつける時期だった。花は赤か白か黄色だった。風景の中に中間色は存在しなかった。アイマイな色や形はなかった。何も混り合わず、花を含んだ森とまっ青な空だった。

時々、汽車は停った。停車場といっても、茅ぶきの小屋か木札が停車目標にすぎない。停まるたびに土埃がモウモウと客車を包んだ。

停まっている汽車から眺めると、停車場付近の住民は一樣にボンヤリした顔付きに見えた。森の住人たちが何故そのように無防備で無知に見えるのか、気負い立った先発隊の青年たちには理解できなかった。ただ、俺たちはあんな風にならないと思うだけだった。

ペーナ駅に着いたのは昼頃だった。汽車はここで停って、機関手も乗客もゆっくり昼食をするのだった。

駅前に雑貨屋が一軒ある。ここに来るのはすでに二度目だから運平は顔馴染になっていた。隊の荷物をあずけサンドイッチで腹ごしらえをしてから、人々は出発した

「よし、行くぞ！」

運平は大声をだした。皮ゲートルに古背広姿だった。

数日分の米と干肉と着換えを負い、腹に山刀とピストルを帯びている。「オウ！」と応えた青年たちの恰好も似たようなものだった。数人には銃を持たせてあった。

ペンナ駅から北へ向って十三キロメートルの森の中にドラーダ河がひっそりと蛇行している。名もない小川とドラーダ河の合流点を起点に、小川に添って東に九キロドラーダ河にそって北に四キロ五百メートルの四角い森林が「約束の土地」だった。

冬なので、頭上の太陽はやや北に傾いている。人々は太陽に向って歩き始めた。集落というほどでもない駅前の部落を後にすると、径はたちまち細くなった。一列になってダラダラの坂を登って丘の中腹まで来ると、その径も雑草や下枝におおわれ始めた。森が深くなつた。二人が交代で前に出て山刀を振う。バサバサと羽音を騒がせて、緑色のオームの群が飛びたつた。

頭部の一点の赤が樹間にきらめいて、すぐ近くの樹へ移ったらしいがもう姿は見えない。そのままひっそりとした。

運平は四月に青木孫八と松岡弥作を伴って、オットーのつけてくれた男に案内されて現地まで行った。ピッカードと通称される細径を辿り、途中からその径もなかった。四カ月ぶりに来てみるとあるとき案内人が開けたピッカードも枝の切り跡でようやくそれと識別できるほどに薄れていた。森は人間につけられたその傷を一刻も早く癒やそうとしたらしかった。

あとで荷物を運搬しなければならぬので、重いものを担って楽に通れる巾に径を開きながら人々は進んだ。

重い山刀は無理に力を込めずに振りおろすのがコツだ。

バサッバサッと生木は面白いように切れた。

一時間に一キロ以上は進んでいる筈だったが、視界が閉ざされて距離も方向も見当がつかないのだった。緑のじゅうたんの下に這り込んでしまった蟻のようだった。

太陽の位置さえ定かでない。

「家がある！」

先頭にいた重本智吉が呼んだ。

森の中にわずかな木を倒した空間があつて、小屋が一軒あつた。人はもう住んでいないようだった。屋根の一部が陥ちていた。開拓者が入つたのだろうか……。しかし、四辺には開拓の痕跡は何一つ残っていなかった。何の為にこんな処に人が住んだのか、崩れかけた小屋は何も語ろうとしない。静かで少し不気味な感じを漂わせながら、小屋はひっそりと存在していた。

人々は小屋を後にして更に進んだ。

七^キはども進んだろうか。時計は五時を指していた。

「オーイ、今日はこの辺で泊るぞ」

運平は先頭に向つて叫んだ。

そこはヤシが多いためか木がまばらになっていて、どうやら夜営できそうな場所であつた。枝に三^ミ四方の天幕を三つ吊して夜露を防ぎ、地にはカンバスを敷いた。夜に備えて薪を集める者飯を炊くもの、山刀をヤスリで研ぐ者……賑やかに大声で話しながらたちまち用意が整つた。塩鰯が焼ける匂いが森に流れた。

「さあ飯だぞ！」

「腹が減つたなあ。やはりイワシの方がボウダラ（干ダラ）よりいい匂いがする」

「値段が高いからなあ」

二十人の若者たちは運平を中心に円座をつくって、飯をむさぼり喰った。

夕暮れが迫っていた。焚火が夜営の回わりに燃やされた。ピングアのビンが回わされる。頬を赫々と照らされながら、若者たちはゴクゴクと酒をラッパ飲みにした。

「火の番は四人ずつ、二時間交代だ。オンサ（アメリカヒョウ）に気を付けろ。班長の山下と重本は各自の班から二人ずつ順番を決めろ。あとは寝てよし」

彼はそう言って、ゴロツと横になった。

森の奥から夜行性の動物の鳴き声が聞えてくる。この先発隊は二百数十家族の、いや全移民の期待を担って森を進んでいるのだった。誰もがその想いで興奮し、張切っていた。仲々寝付かれないらしく、低い話声があちこちでしている。パチパチと火がはぜている。冬の夜だが、焚火が近いのでゴロ寝していても寒さは感じなかった。

運平はいつの間にかまどろんだ。

目が覚めた……。長年の習慣で、日の出のほぼ一時間前だと解る。森は霧の底でまだ眠っていた。彼は天

幕の外に出ると思い切りノビをした。地上に寝ると、やはり体の節々が痛い。しかし、首を曲げたり手を振ったりすると、痛みは他愛なく体から逃げていった。

一人が起きると、紐でつながれたように全員が起きだした。コーヒーをわかしてパンを嚙り、天幕を片付ける頃には霧が白くなり、樹の影だけがとり残されたように黒く霧の中に浮かびはじめた。

「さあ、出発だ」

運平の号令で一列の縦隊は昨日のように進みはじめて移しい霧が頭上から降ってくる。そよとも動かないのに葉の一つ一つからポタポタと水滴がしたたるのだった。

濡れたズボンやシャツが体にはりついて体温を奪った。

行けども行けども霧は晴れなかった。冬の朝は風が吹かないからだった。しかし、かなり太陽が昇ったらしく、少しずつ温かくなってくる。

下り坂になって暫くすると、薄れかけた霧の中に朽ちかけた小屋が浮かび上っていた。

「ホウ……！」

嘆声が隊員の中から洩れた。

こんな処に住もうと試みた人間がいたのだ。小屋の

囲りはかなりの面積の木が伐られていた。切り株からは新しい枝が出て、ヒヨロヒヨロと細い若木が二畝ほどの高さに延びていた。若木は明るい色の葉をつけていた。

「森に敗けて逃げだしたらしいな」

「おれたちは逃げないぞ、この森を征服するのだ」

若者たちは昂然として言い、前進した。

やがて霧が薄らぐと、澄んだ森の空気が一斉に青く輝やいた。樹の根方から水蒸気が妖精のようにきらめきながら立ち登っている。

時計を見ながら、運平は、

「もう近いぞ」

と、皆を上げました。

「あと一息だ」

平坦なドラード河の流域にでた。背丈より高く水性植物が茂り、踏みしめる足許からはジクジクと水が湧く。

草を伐り敷きながら隊は進んだ。

「オーイ、河があるぞ」

先頭で声がした。

「これがドラード河だ」

河岸に立って運平は言った。

河幅は二畝ほどだった。澄み切った水が静かに流れ

ていた。

「きれいだなあ」

グアタパラのリンコン河を見馴れていた人々は嘆声を挙げた。植物におおい尽された原生林の河は濁るところを知らないのだった。

河岸に添って百餘ほど降ると、対岸に小川が流入していた。

「そこが我々の土地だ」

運平は対岸を指した。

「橋をかけよう」

数人の若者がヤシの木を目指して草をかき分けて進んだ。たちまち木が伐られ、二つ割りにした丸木橋がかけられた。

「平野さん、渡ってください」

「よし」

運平が最初に渡ると、二十人は続いて駆けるように渡った。

「万歳！」

「万歳！」

森の中で先発隊は声をかぎりに叫んだ。

滂沱とした涙が運平の頬を濡らした。若者たちも泣いた。原始林の開拓に着手しようとする人々が例外な

く襲われる、あの不思議な程の感情の高揚を人々は経験したのだった。坐わり込んで草を握りしめて泣きじやくっている若者もいた。涙をポロポロこぼしながら、空を渡る鳥を見上げている者もいた。運平はハンカチを出して鼻をかんだ。

サルの声がしていた。ハウハウと、フクロウが鳴くような声だった。地上で何かワメいている生物に好奇心をそそられたらしく、ザワザワと枝がゆれると十匹ほどの黒い顔が木の上からこちらを見下した。ヒトを恐しがる様子はなかった。群れはだんだん大きくなり、二百匹くらいのサルが不思議そうに集ってきた。

運平は枝の上のサルを見上げた。ここはヒトの数よりサルの方が多い、森の世界だった。何が自分を駆り立てて此处へ連れて来たのか……自分でもよく解らない。

日本人の発展のためだろうか。事業欲だろうか。人の世話を焼くためか。そのどれでもない。いつかはスペインへ行こうと夢みながらも、現実の持つ強い力が彼を否応なく此处へ運んで来た、としか言えないのだった。

実費で土地を分けるから、様々な費用は自分の懐から払わねばならず、割に合わない仕事だった。割に合っても、合わなくても、人間は前に向かって進まずに

はいられない時期があつて、彼は今その時にいるようであつた。

ドラーダス河と小川の合流点の平坦地に天幕の設営をし、炊事場を作りあたりの木を一応伐り払つて、その日は暮れた。

翌日から二班に分かれて一班は小屋作り、一班は荷物の運搬に當つた。

原生林に萱の類はほとんどないので、小屋は全てヤシの木でつくつた。丸木を柱にして、割つた木を壁や寢床に使う。小屋の真中に通路があり、両側に並んで寝られるように寢床をつくつた。屋根はヤシの葉でふいた。これらの小屋が入植者たちの収容所になる予定だつた。

荷物は馱から背に負つて運んだが、往復二日かかりで途中で野宿した。かつげるだけかついで十二キロの山道を蟻のように往復していると、流石の若者たちもアゴをだした。この仕事は三十日続いたのだつた。

一週間目には収容所の小屋ができた。天幕はたたんで夜は柱にかかった石油のカンテラの下でくつろぐことができた。冬のせいもあつて虫は予想したより少なかったが、夜は蚊が少しいた。尻を直立させて血を吸う、動作の速い蚊だつた。チクリと痛みを感じて、叩

こうとするともういなかった。もつともカンテラの朧ろな光では蚊の姿も定かでないのだが。

九月になればコーヒー農園の契約が終った入植者たちがやってくる。それまでに一応の受け入れ体制を整えなければならぬから、先発隊は目が回るほど忙しかった米と豆と干肉だけを喰って働き続けていると、誰もが目がくぼんできた。

運平が山に入りきりでは入植者との連絡がつかないので、彼は中継駅のバウル市に「平野植民地事務所」を開いた。イサノもグアタパラから事務所に移って来た。

道路を地元のペドロという男に請負わせて、荷馬車が通れる道を目安に完成を急がせた。九月の半ばに路が出来ると、待ちかねていた入植者たちが移って来た。

丘を越え谷を渡って荷車を押しながら辿りついた人々は、清冽なドラード河一帯に広がる豊かな湿地帯を見て狂喜した。誰が見ても、文句なしに米が出来る地相だった。

「腹一杯米が喰えるぞ！」

誰もがそう叫んだ。

日本人は米がなければ生きていく気がしないのだ。た豆やトウモロコシの主食というのは馴染めない。

コーヒーを栽培するために入植したのだが、コーヒーはコーヒーとして、まず自分たちが食う米が第一だった。米が食えない人生なんて、いくら金を儲けても意味がない。

人々は収容所を中心に仮小屋を建てて、その辺一帯から動こうとしなかった。奥にはゆるやかな丘が続いている。ブラジルの自然の中で “湿地帯” に住むということがどういう意味を持つか……瑞穂の国の民は誰も知らなかった。

河に添って湿地帯が渺々と広がっている。いずれは地区割りにするにしても、差し当ってはその辺に米を植えて食糧を確保する必要がある。

どこをどう耕しても誰にも文句を言われない楽園だった。人々が有頂天になったのも当然だった。草や小灌木をなぎ倒して数日枯らしてから火をつける。火が消えたら、クワの角でチヨイチヨイと穴をあけ、数粒のモミを落して足で土をかける。それだけの手間だった。

若い夫が穴をあけ、その後から妻がモミを入れて穴をふさいでいる一対の姿が、あちこちで人形のようにゆっくり動いていた。決してサルの群がそんな人間たちを木の上から見物していた。

時として一対の動きが崩れ、

「キヤーツ！」

と女の悲鳴が上る。

「へびだあ」

それっと手近かの男たちが駆けよる。何の肉でも食用として大事だったが、特にへびは滋養がある。リューマチにも利くようだった。大蛇の多い処だった。森に棲むジボイヤもいたが、湿地帯を好むスクリー（水蛇Ⅱアナコンダ）の方が多かった。五メートルから十メートルくらいあった。

洗濯は河でしたが、岸边に横たわっていた茶黒色の丸いものをヤシの倒木だと思って足場にしたら、ズルズルと動き出したので気絶した女もいた。向うの草の中から胴の太さの割には小さい鎌首が隆起してこちらを睨んだかどうか？ 彼女の記憶は定かでない。とにかく、足許の丸太が動き出した瞬間、へびの上にいると気づき目の風景が一回転しながら暗くなり、意識がなくなった。

日本刀を持っていた男もいて、それを振りかざして大蛇と闘う勇ましい場面もあった。もっともへ闘かうゝというのは、後になって酒を飲みながらの本人の表現で、他の人の目には、大蛇が怒って向って来たらすぐ逃げ出す決心が腰を後に突き出して刀を構えた姿勢

にありありと現われていたのだが。

獲食——主として水豚——を丸呑みにしたスクリーは脹れた部分を木の枝にかけ、尾と頭を地上の繁みに隠してジツとしていたから目立った。ドラムカンのように脹れた胴を見付けると、男たちは散弾銃をつかんで忍びよった。スクリーが人を襲うことはまずないのだが、家畜に害を与えるし、人とヘビは相性が悪いというか畑の中に十メートルくらいの大蛇がいるとやはり落着いて仕事もできないのだった。

追々に入植者が増え、八十二家族になると、この湿地帯の一角はそれなりに人間臭くなった。収容所を中心にして思い思いに仮小屋を建てているから外観はさながら乞食の集落のようであるが、豊かな自然に囲まれて途方もない自由があった。

何もない……といえば確かに何もない。無一文に等しい三百人はどの集団が掘立小屋に住んでいるだけだ。だが、あると思えば、此処には何でもある。自然の豊かな内懷に飛び込んだのだ。食物も太陽も水も緑も、自然の恵みは全てあり、心の中には自由も希望もあった。

ドラード河に入る小川は「平野川」と呼ばれるようになった。その小川の真上に小屋をかけたのは文

野勝馬である。

「これは涼しくていい」

と自分のアイデアに大満足だった。

小屋の床に穴があいている。勝馬がその上に鎮座すると、平野川の水はほんの暫らく乱れて泡立ったり黄色味を帯びたりした。

「下で水洗いしているときはやらんでくれよなあ」

と文句を言う者もいたが、清冽な流れはたちまち澄んで知らぬ顔だからそれ以上やかましく言う者はいなかった。

文野の小屋の上流に三メートルほどの高さの小滝が懸っていた。米がとれたら精米をするために、そこに水車がつくられた。佗びた水車小屋だったが、ふと祖国の山河をしのびたくなるような風情を開拓地に添えたのだった。

或る日の早朝……ドラード河が異様な唸りを發した。

ウォーン、ウォーンという不気味な音響だった。

“河が鳴く？”

人々は幻聴かと思って不安そうに顔を見合わせた。確かに河が鳴っていた。誰もが聞いている。

何人かの者が恐るおそる河に近づいて、覗き込み、

「ウワァー！」

と叫んだ。

「魚だ！魚だぞ」

河が魚の大集団で真黒に盛り上っていた。人々はフルイや空袋などあり合わせのものを持って走りだした。服を着たまま河に飛び込んで――というより魚を押しのけて河に入り――腰や胸まで漬かりながら、手当り次第に魚をすくって岸へ放り上げた。コイに似た、クリンバタという魚だった。一匹一匹が一キロ以上あって、すでにずっしりと重い。十匹、二十匹……百匹、二百匹と放り上げると、人々はクタクタになった。産卵のために魚群が大河から上流へ乗り込んで来る　“ピラセーマ”という晩春の現象だった。無数のクリンバタの浮き袋から発するグーグーという音が重くなってウォーンと河全体が鳴る魚は人を恐れる様子もなく、本能の命じるままにひしめきながらひたすら上流へ遡っていった。

夢中で掬っていた時間は三十分くらいであったろうか群れは過ぎ、河は平静に戻った。人々がコーヒ―袋に何杯も獲ったクリンバタの後仕末に忙殺されていると、

「魚の群れだあ！」

という叫びが再び起った。

今度はランバリだった。十疋ほどの小魚が銀鱗を陽光にきらめかせピチビチと跳ねている。さながらにわか雨の雨脚が激しく河原を叩いているようである。煮干しにするべく、人々は再び河に飛び込んだ。

ランバリの群が去って日も大分西に傾いた頃、十三才の山下定一は河を見ていた。また魚が来ないかと見張っていたのである。定一少年は奇妙なことに気付いた。河底の色が少しずつ変わっていくのである。茶色だったのが、だんだん黒味を帯びてきて、やがて河は黒い帯のようになった。

少年は手に持った竹槍を刺してみた。そして叫び声を挙げた。激しい手応えが伝わり、竹をしやくり上げると四〇疋ほどのナマヅが草むらに抛りだされた。ナマヅが河底を被い尽して遡上しているのだった。

「なに！今度はナマヅだとな」

最初に駆けつけた男はいきなり河に飛び込んだが、「ギャツ」

と悲鳴をあげた。

ナマヅは両の胸ビレと背ビレに鋭い刺を持っている。

それを素足で踏んだのだった。水しぶきをあげながら転倒した男の背中にも、手にも刺がささった。

岸から手をかして引きずり揚げると、彼は体に大きなナマヅを二匹つけて這い上ってきた。刺にはノコギリのようなギザギザがついている。それを無理に引き抜くと刺のあとに血がにじんだ。外見はさほどの傷ではないが激痛を伴うのである。

「死にそうだ。……ナマヅに刺されて死にたくない」と言って彼は泣いた。

人々は靴をはいて水に入り、刺に注意しながらナマヅを捕った。水底を移動していると、ヌルヌルしているから、さほど能率は上らない。

やがて、ナマヅの群は去り、刺された男の痛みも薄らいだ。幸いに無毒のようだった。

夕暮れが迫り、空が茜に染まる頃、金色の巨きな光が河面を跳躍した。

人々はあまり忙しく魚を獲ったのでヘトヘトに疲れていたのだが、その素晴らしい魚を見たときは疲れも忘れて一齋に嘆声をあげた。

ドラードである。黄金色に輝く巨体を夕日にきらめかせながら群が遡上していた。絶えまなく跳ねる。空中で尾を誇らしげに数回振る。ブルル……と明確な音を響かせてからバシヤリと水音をたてた。

静かな自然の夕暮れの中でブルル……バシヤツという音が交響曲のように奏でられている。

「サケのようだ」

と誰もが言った。

もつとも、ほとんど全員が西日本の出身者であつたから、生きているサケを見た経験はなかったのだが。……これらの、信じられぬほどの、太古さながらの魚の群は、間隔をおきながらも数日に亘つて人々の目前を遡上していった。

サントス市で作りはじめたマルカン印のショウユや自家製のミソを持って来ていたから、思うさま鮮魚に舌つつみをうった。クリンバタは塩焼きがいい。刺身はドラードやビラカンジューバが旨かった。ブラジルの河魚には臭味がないのだった。頭部を兜割りにしてミソ汁にすると、頬つぺたが落ちやしないかと思われた。ナマヅは蒲焼きか煮付けがこつてりして素晴らしい。

野菜はまだないのだった。

森に囲まれていたが、どの植物が食用になるか誰も知らなかった。パウミット・ヤシの芯が食べられることは知っていた。五十センチほどのまっ白な芯が一本の木から一つとれる。軽くゆでてスミソにしたり、米に混ぜてタケノコメシのように炊いた。

サトイモに似たものが河辺に自生していた。野生種なのか原住民のインヂオが植えたものか分らないが、

掘ってもごつい根ばかりでイモはほとんど付いていない。ズイキを汁の実にしたり、干して貯えたりした。

動物の肉ではシカが一番上等だった。タツ（アルマジロ）やケイシャーダ（イノシシ）、ラルガッタ（トカゲ）も旨い、味はおちるがアンタ（バク）やカピバラ（水豚）もいた。しかし、動物を捕るには山へ入って本格的な狩りをしなければならない。そんなヒマはなかった土地を拓き、米や豆やサツマイモや野菜を植えるだけで精一杯だった。

クリスマスが近ずき夏が来て、本格的な雨期に入った運平は実弟の榛葉彦平とイサノを伴って戻ってきた。イサノの兄の中川誠一とヨシノもすでに入植して開墾にはげんでいる。彦平は兄の替わりにサルトリオの新コーヒー園の監督に出向いていたのだが、運平は日語学校をつくり弟に教師をしてもらうつもりで呼び戻したのだった。

雨期に入ったので、急造の道は泥んこだった。大した荷物もないのに、荷馬車は難儀しながらやっと植民地に着いた。

「皆、元気か」

運平は馬を河に入れて洗いながら山下永一に声をかけた。

「はい」

山下は答えたが、ちよつと顔を曇らして、

「二、三人熱を出して寝込んでいます」

「誰だ？」

「桜井と戸谷と柳です」

三人とも先発隊の若者だった。

「大分悪いのか」

「それが、良かったり悪かったりハッキリしないようです。具合のいい日は普通に働いています」

「そうか……働き過ぎだろうな」

「そうだと思います」

「あとで行ってみよう」

山下も河に入って馬洗いを手伝っていたが、運平を見て会釈しながらクワをかついで歩いて行く中年の男を見て、

「そういえば、広田の姉が悪いようです」

と告げた。

「フーン」

運平は馬を草でこすりながら、

「オーイ、広田」

と男の名を呼んだ。

広田千代太の姉の専は、平野川の上に例の小屋を建てた文野勝馬の母である。

「姉さんはどうなんだ。具合が悪いというが」

「体がだるいと言つて寝てます」

「熱はあるのか？」

「この頃はあまりないようです。義兄さんの方が熱があります」

「なに！馬太郎も病氣してるのか」

「はい」

「それはいかん。あとで行つてみよう。あんたも大変だなあ。頑張れよ」

「はい」

運平は洗い終つた馬を適当な処につないでおくように頼むと、自分の小屋へ濡れた服を着換えに戻つた。「すごい処だな、兄さん。イサノさんがビックリしてるよ」

彦平が笑つた。

「グアタパラのような訳にはいかんさ。当分は此処で辛棒しろ」

弟にともイサノにともつかずそう言つて彼は小屋をでた。

文野の小屋を覗いて彼はハツと胸をつかれた。専は見違えるほど痩せおとろえていた。まだ四十四才なのに百才の老婆のようだ。死期が迫つた人間の姿だった。その隣で馬太郎が脂汗を流しながらうめいてい

る。息子の勝馬も寝ていた。

「どうしたんだ！」

運平は思わず叫んだ。

「おい勝馬！ どうした。しっかりしろ」

彼は小屋に駆け込んで病人の肩に手をかけた。勝馬は高熱にうなされて意味のはっきりしないいうわ言をいつている。

「平野さん……」

瘦せた母親がか細い声で彼の名を呼んだ。

「あんたもどうしたんだ、病気なんか負けてはいかんわしがついている早く直るんだぞ、早く」

彼女はうなづいたが、ポロポロ涙をこぼした。

「そんな気の弱いことでどうする。あんたは運動会でわしと二人三脚して一等とったじゃないか。あの元氣を出しなさい」

彼女は何度もうなづいたが、一層涙をこぼした。

「何か薬は飲んでいるのか？」

「……熱さましを飲んでいます」

「どんなかね」

「私は熱はないのですが頭が痛く息が苦しい……うちの人是一日おきにこうやって酷い熱を出しています」
「そうか」

運平は答えたものの、医者でない悲しさにどうして

やったらいいか分らないのだった。

この女は死ぬかもしれぬ——と彼は思った。もともと青白いたちではあったが、三カ月前に入植した頃の元気な姿と較べるとウソのように痩せてしまった。彼女たちは第二回移民船旅順丸で来たのだった。一日千秋の想いで船の到着を待ち、サントス港へ彼等を迎えに行った日の感激を運平はまざまざと思い起こすことができる。グアタパラへ配耕された一人一人の顔と名を心に刻むようにして覚え込み一緒に汽車に乗ったのだった。グアタパラに着いて食事を供された時、文野勝馬はコーヒ―をショウウと間違えてマカロニにかけた。それがおかしいと、前に坐っていた君由という娘が笑い転げたりした。その娘と勝馬が親しくなり馬太郎や専も息子の結婚を望んだが、十五の娘と二十の若者ではまだ早いと相手の親が承諾しなかった。

女が嫁ぐということは労働力が減ることであつた。三人家族で一人抜けたら一家の浮沈にかかわる。二人では労働力不足で、まとまった仕事はできないのだ。ただ好き合ったからといって、おいそれと一緒にさせられない運平も馬太郎に頼まれて仲に立ったが話はまとまらなかった。

その娘の家族も入植している。早く豊かになつて息子が結婚できる日を母親も楽しみにしていたのだ。

「早く直ってくれ」

内心の絶望を隠して、笑顔で言った。

「……」

彼女の乾いた唇の端を微笑が弱々しく通りすぎた。すっかり白くなってしまった髪が乱れて、山姥のような印象を与えた。

「アッアッ……ウツ」

苦しそうに勝馬がうめいた。

額に手をあてると酷い熱だった。

「これはいかん」

彼は小屋の外へ出ると腰の手拭いをとって小川にひたして戻った。絞って病人の額へおいた。

布の冷たさに反応したのか勝馬が目をひらいた。

「オイ、しつかりしろ」

顔をのぞき込んだが、ハッキリと視線が定まらぬらしい。高熱にうかされた瞳がボンヤリと動いている。

暑苦しいのか布団を手でしきりに押しのける。枕を並べて寝ている両親とは対象的に真っ赤な顔をして大粒の汗をかいている。いかにも苦しそうだが、専の真っ青な顔と較べるとまだ生命力が溢れている感じだった。彼女は大儀そうに横たわると、そのまま目を閉じていた。マユを作ろうとしている蚕のように肌の色が白く澄んで、このまま透明になるのかと思われ

た。頬がこけて痩せ衰えているのに、どことなく腫れぼったい感じもあった。

馬太郎は眠っていた。

運平は三人の苦しみを分け合おうとするようにじつと見守っていた。床下をサラサラと小川が流れる音が絶えずしていた。ホウホウと鳴くサルの声、ギヤツギヤツと騒がしいオームの群……野生の生物たちの活力にあふれた森の響きが小屋をとり囲んでいた。

微かな羽音が中断すると、チクツと首筋に刺激があるバチツと叩くと掌に血を吸った蚊がつぶされている。昼間はさほどではないが、河べりだけあつて夕方になると蚊がひどく多いのだった。河の真上のこの小屋は特に多い。

草を踏む足音が近づき人の気配が停った。振りむくと広田の妻の光野だった。鍋を下げていた。

「あんたが食事を作っているんか」

彼女はうなづいた。

「せいぜい滋養をとらせてやってくれよ。またあとで来よう」

彼はそう言って外へ出た。

森が彼を囲んでいた。

三方が原の松林を見て育ち、グアタパラの整然たるコーヒー園を見馴れた彼には、熱帯の原生林は乱雑で

奇怪な印象を受けるのだった。クネクネとした葛を悪趣味な衣裳のように身にまとい、ヒトをよせつけたがらない不気味な目がその奥の探い処で光っているようだった。

「ここはおれたちの土地だ」

森に挑戦するように運平は宣言して湿った革の上を大股に歩きだした。見回わらなければならない病人があと三人いる。

……彼が歩む先には地獄が口をあけて待っていた。

……二日後、十二月二十九日の夜に文野の妻は死んだ翌日、入植者たちが集まって野辺送りを済ませた。ありあわせの板で棺を作り枯木のように軽くなってしまった専のなきがらが納められた。香典は二百レース（約五銭）としたが、集まった香典袋は軽いものが多かった。中を開くと「御香典二百レース。但し、米の収穫後にお払いいたします」と書いた紙切れが入っているのだった。入植して三カ月半。土地代と測量費を払い、道路費を負担した人々の貯えは底をつこうとしていた。何年もコーヒー園で働きの余裕がある人もいたが、山下永一のように前年の若狭丸で来て一農年の終了と共に入植した家族も多いのだ。現金はおろか

食糧も底をつこうとしていた。米の収穫だけが生き延びるための唯一の手掛りだった。

平野川から三百メートルほど離れた場所を拓いて棺は埋葬された。

今日は勝馬の熱はなかった。不精ヒゲに顔を埋めバサバサの髪をした勝馬は呆けたように棺に土がかけられるのを見ていた。父親は小屋で寝ていた。

広田千代太が、

「姉さん」

と叫んで声を放って泣いた。

「なむあみだぶつ………」

うろ覚えの経文が読まれ、線香の細い煙が伐り倒された木の株にまとわりついた。

雨の切れ間で、青空がのぞき陽が射していた。水蒸気がそこかしこから立ち登り、新らしい墓はムンムンした夏草の刺激的な匂いに包まれていた。明るい森の光景だった。しかし、ほとんどの人々は重苦しい、不安で投げやりな気分にとらわれていた。葬式に参列すれば悲しいのが当然であるが、しかし、それだけでは、精神を蝕むような無力感が不気味なクモの巣のように五体にからんでいた。夜、ケモノの鳴声や木の葉のそよぎが耳について寝られない、と目を充血させて不眠をうったえる女もいた。森に不可思議の領域が

あつて、そこに人間の侵入を拒否する意志―悪意のよ
うなものが存在しているような気が朧ろげながらして
ならないのだった。

第 六 章

大正五年（一九一六）の正月がきた。人々はとつて
おきの餅米をとり出して餅をついた。来るべき米の収
穫に備えて、どの家でも臼は作つてあつた。一かかえ
はどの木を両手びきの鋸で輪切りにして、胴に泥を
塗つてから芯を焼いてくり抜いたものだ。餅米だけの
餅をつく家はなかった。マンジョカ（タロイモ）など
を混ぜて少しでも量をふやそうとした。開拓したあと
にはヨモギやワラビが芽をだした。もう少したつて新
米がとれるようになったらヨモギモチが腹一杯食え
る。

収容所の二つの小屋の回りで新年会が開かれた。雨
期もそろそろ終ろうとしている。毎日暑かった。南国
の出身者たちではあつたが、これほど暑い正月にはま

だ馴染めなかった。餅だつてすぐ饅えた臭いになってカビが生えてしまう。

「雪が降れば、とまでは言わんが、せめてもう少し寒いと正月らしくていいのに」

とこぼしながら汗をふきながら新年会に集ってくるのだった。

熱があつて来られない人が増えていた。症状はほぼ共通していて、だるい日が続いたあと突然発熱する。一日発熱すると翌日一日なり二日なりはなんでもない。

「おこりのようじゃ」

ピンガをなめながら一人が言った。

「なに、おこり……」

運平はそれを聞きとがめた。

おこりという一種の熱病が日本にもあることは知っている。佐倉宗吾の印旛沼の話が講談で有名だった。おこりはマラリヤ性の熱病の一種である。

「……すると、勝馬たちの病気はマレッタ（マラリヤ）なのか」

彼は陰しい表情で考え込んだ。

グアタパラでもリンコン河添いにマラリヤがあると
いう話は聞いたことがあるが、実際に病人を見たことはなかった。通訳の大野や香山たちが鉄道工事に行つ

てマラリヤにかかった。十日ほど寝込んだら直ったとも言いうし命からがら逃げ戻ったという者もいた。マラリヤかどの程度の病気なのか、彼には知識はなかった。彼だけでなく、ここに居合わせる誰一人として知らなかった。

「マレッタ……」

「…」

人々は不安そうに囁やいた。

「おい山下。お前知っているか？」

運平は訊ねた。山下永一は台湾に養蚕指導で行っていた。

「知りません。台湾でも自分がいた処にはマラリヤはありませんでした」

永一は首を振った。

「そうか」

運平は腕組みをしたまま溜息をついた。

人の群れからポツンと離れて、定一少年がしゃがんでいた。山下永一の親類の子だった。叔父と一緒にブラジルへ行くといったら親が喜んだというくらい、近所迷惑の腕白小僧なのに、今朝から元気がなかった。

「おい、定一。餅を食え」

運平は声をかけた。

少年はノロノロと顔をあげた。蒼白だった。

「どうした？」

運平より早く永一が驚ろいて声をかけた。

「家長、ボク寒い」

少年はそう言うのと遠目にも解るほどガタガタと震えだした。

「いかん、マレッタだ」

永一が少年を背負って小屋へ駆けていった。十三才の少年を負って木株と泥の径を急ぐから、後から見ると滑稽なほどよろけているが誰も笑わなかった。

へこれで六人……胸のうちに運平は呟いた。すでに一人は死んだ。マラリヤがこの程度で収まるのか、もつと蔓延するのか見当がつかない。

彼は目の前のアルミコップにピンガをなみなみと注いで一息に呻った。

「皆んな、今日は正月だ。今日こんなに沈んでいては今年一年中そんな顔になるぞ」

「そうだ、平野さんの言う通りだ。病いは気からと言うぞ。飲んで騒ごうじゃないか」

「よーし、あとでおれも唄うぞ」

運平は立ち上がった。

数歩進むうちに酔がまわって足許がふらついてきた。
た。

真っ直ぐに歩けない。

へ正月らしくていいさゝ

と思ひながら、彼は山下の小屋へ辿りついた。

「どんな具合だ、坊主は」

声をかけて中へ入った。

「寒いよう、寒いよう」

腕白小僧の本領を発揮して定一はわめいていた。ヤシの二つ割りを並べた床に敷布団を敷いて寝かされた定一の上に、掛布団が三枚かかっている。

「もつと掛けてくれよう」

永一と妻は困ったように顔を見合わせた。一人一枚づつしか布団がないのだった。二人はあるだけのシャツや布や蚊帳まで掛けた。

「まだ寒いよう。もつと重くして」

「よし、重くしてやる」

予備少尉の山下は軍人らしく手短かに答えて、木箱を布団の上にのせた。

「どうだ」

「あんた、そんなことをして……」

と妻はオロオロしたが少年は、

「もつと重くしてえ」

と言った。

今度は柳行李も乗せた。

「少しはぬくいかな？」

「うん」

布団や木箱や行李の山の下で少年の声がした。少年の体の震えにつれて木箱や行李が揺れている。

……一時間ほどして再び小屋を覗くと、今度は少年は暑がっていた。天井がグルグル廻る、と訴える。茄ったような赤い顔をしてしきりに布団を跳ね除けようとしていた。額に手を当てると、燃えるように暑い。ひどい熱だった。確実に四十度は越しているだろう。

へこれがマラリヤか

と運平はその熱におどろいた。確かに《熱病》そのものだ。断片的にマラリヤの話を聞いたことがあるが無関心に聞き流していたことが悔まれた。キニーネという薬が効く、ということくらいしか覚えていない。記憶の底をまさぐっているうちに、ふと或ることが浮んできて彼は愕然とした。

——マラリヤには潜伏期がある。その間はだるかったり気が滅入ったりする——

そう聞いたことがある。

ここ数日、ほとんどの人々の動作が妙に不活発に見えるのを、いぶかしんでいた。淋しいと言ったり、眠られないと言う者もいる。すると……彼は唇を噛んだ。多分、この入植地はほとんど全員がマラリヤ菌に

感染していることになる。

「山下、あんたはだるくないか？」

「ええ、ここ一週間はど疲れやすくて、風邪気味かと思っていましたか」

「やはりそうか。気を付けた方がいい。わしは早速サンパウロへ行ってキニーネを手に入れてくる」

今日の汽車はもう間に合わない。一日おきだから明後日の正午にペンナ駅からバウル行きに乗り、一晩泊ってサンパウロ行きに乗り継ぐしかない。

「医者に診せたいがなあ……」

少年を見ながら彼は呟くと、

「こんな処まで来てくれる医者がいるとは思えません」 と山下ははじめから諦めている口調だった。

最も近い開業医の在所はバウルだった。往診というには遠すぎる。数日がかりの旅行だった。札束を積みめば来てくれるかもしれないが、札束どころかたった二百レースの香典にも事欠く人々の集団だった。一時間ほどで少年の熱はウソのようになくなった。どうだと訊ねると気分はいいと答えるが流石にぐったりして身動きしなかった。

測量図が完成して届いていたので、翌日は家長たちを集ってもらって地区割りをした。出身県同志で幾つ

ものコンパを作って地積を分割するのである。いま人々が集って米を作っているドラード河畔から順に番号をつけて十八のブロックに分けてあった。番号が若いほど河に近い低地で、だんだん高地になる。人々の感覚では低地で米ができる処が一等地だった。兵庫県のコンパに中心人物の山下永一の姿がなく代りに定一少年がいた。

「おい坊主、今日は熱ないのか？」

運平が訊ねると、少年は首を振って、

「今日は何ともねえ。でも今度は家長が震えてるよ」と答えた。

そういえば欠けた顔が随分ある。かなり寝込んでいるのだ。組分けやら地積の計算などで、その日は抽選をしてブロックを決めるまでにはいかなかった。一等地？ の低地を誰もが欲しがっているからである。日本人にとって農地Ⅱ米作地という観念は抜き難いものだった。ブラジル人がどう思おうが、日本人は米をお宝のように感じるのだった。米ができない土地を買っても満足できなかった。

「佐太郎さんやーい」

岡山組の山本佐太郎を呼ぶ女の声が林の向うでした。

「赤ちゃんが産れそうだよー」

「おっ。そういえば、腹が痛いと言った。しばらく腹（アメーバ赤痢）かと思ったからガヤバの葉を煎じて飲ませといたが……」

「産気づいたのとアメーバ赤痢を間違える奴がいるか！早く行け。誰がとり上げるのか」

「なに、誰かいるさね。あいつは今度で二人目だから独りで産むと言った。それより土地の割り当てはどうなりますか」

「今日は決めない」

と運平が答えた。

「早く行つてやれ」

「おう」

と応えて佐太郎は駆け出した。

その後姿を眺めていると、熊本の門前角平がソワソワして、

「うちのも、どうも今日産れそうでどわす」

と言った。

「早よう行け！」

運平が一喝すると、

「おう」

と角平も駆け出した。

「子供作りばかりに精出さず、米も作ってくれよー」
後姿に向って誰かが叫ぶと皆は大笑いだ。

働き手三人以上の家族、単独は不許可、というブラジル移民の資格を得るために夫婦になった若者が多いから三、四年たった今頃はナゼカ女たちのお腹はふくれているのだった。ヨチヨチ歩きの幼児も多かった。

翌日、留守中のことを弟の彦平や外語の後輩の畑中仙次郎たちにくれぐれも頼んで、運平はサンパウロへ行った。

サンパウロの薬局でキニーネの値段が高いので驚かされた。三百人の治癒と予防に必要な量は、彼が携えてきた金額ではまるで不足だった。あちこち奔走し、州農務局から大ビン一杯のキニーネを寄付して貰えた。松村総領事も話を聞いて大いに驚き、医術の心得のある者を至急派遣すると約束してくれた。

キニーネの白い粉末が詰ったビンを大事に抱えて彼がペンナ駅に帰り着いたのは一週間後だった。疲れていたがそれ以上に早く薬を届けたかった。駅前にあずけてあった馬にそのまま飛び乗ってムチを当てた。

寝台車で旅行すると疲れないようだが南京虫が巢喰っているから、反って寝られないことが多い。そうかといって固いベンチに座って長時間揺られていると、体の関節がきしんでくる。

一度ムチを当てた丈で、徑を知っている馬は勝手に

走ってくれた。馬は利口な動物だった。主人が居眠りをしていても居酒屋の前でチャンと止る馬さえいるのだった

丘を越え、谷をめぐって運平を乗せた馬は細径を駆けた。森に染まって馬の首筋を流れる汗も緑色に光った。

ドラード河のそばまで行くと、

「ワン、ワン」

吠え声がして、愛犬のレオンが尾を振って走って来た

「おお、よしよし」

彼は馬をドラード河に乗り入れ、一気に渡渉した。レオンも泳いでブルブルツと体を振った。大きな犬だった 家の前で馬を止めると、

「あなた、大変です」

とイサノが転がるように走り出した。

「彦平さんが……」

「えっ、マレッタか！」

彼女は無言で大きく頷いた。

小屋の中で彦平があの日のだいふ少年のように、唇を紫色に変色させてガタガタ震えている。

「彦平……！」

「兄さん」

「寒いのか？」

「うん、寒い。この世の中にこんな寒さがあるのかと思うほどだよ。体の芯まで凍えて、まるで背骨が氷でできているようだ」

彦平の言葉はガチガチと鳴る歯音にさえぎられて途切れ途切れにしか聞えない。

「今すぐ薬をやるから」

運平は慌しく大ビンの赤い封蝋にナイフを立てた。

イサノは言った。

「この三日間というものの彦平さんは酷い熱でほとんど何も食べなかったのです。今朝は気分がいいと言って粥を沢山食べたけど、暫くしたら吐いてしまって、今度は寒い寒いと言うんです」

運平はそれを聞きながらアルミの匙で白い粉末をすくった。汽車の中で繰り返し読んだから、用量は暗記していた。――初日に一グラムずつ三回服用する。二日目から〇・五グラムを一日三回服用して四、五日続ける――一グラムがどのくらいの量か、薬局でサンプルを買ってきた。その紙包みを背広の内ポケットから出して見較べながら、彼は掌に薬をこぼした。

イサノが水を持って来た。

「彦平、飲むんだ」

布団の中で海老のように身をこどもて震えている弟

の上半身を抱き起して、掌で口をふせぐようにして薬をあげ、水をのませた。激しく震動している機械の注水口に水を注ぐようだった。強くコップを押えつけないと水がこぼれてしまう。

「あつ、平野さん、お帰りなさい」

畑中仙次郎の声がした。

振り向くと畑中と福川がヤシの木で急造した担い台を運び込んで来た。

「おう、今帰った。——なんだ。それは？」

「彦平さんの熱はちよつと酷すぎるようです。このままでは死んでしまうから、バウルへ連れて行こうと福川と話し合ったのです」

「……」

運平は考えていたが、

「そうしてくれ」

と同意した。

若い弟をここで死なしては不憫だし、小屋の中に病人がいては足手まといでもあった。

「畑中、暫くバウルと一緒にいてやってくれんか。事務所の仕事も溜っているから、それを片付けてくれ」
「はい」

畑中たちはテキパキと彦平を運び出して荷馬車に乗せた。

「出発します」

「頼む。これは二日分のキニーネだ。あとはバウルで買ってくれ。気を付けてな」

「平野さんも気をつけてください」

畑中にくつわをとられた馬は一、二度首を振ってあがいてからゴトツと荷馬車を動かせた。

それを見送ってから、運平はイサノの小屋へ入った。

「おい、これを飲め」

イサノは言われるままに薬の粉末を水で流し込んだ。

「ああ強い薬だこと。胸が焼ける。……あなたも飲まないの？」

「おれはこれでいい」

彼は棚からピンガをとってアルミコップに注いだ。「うどん粉をくれ。丸薬にしないと配るのに不便だからな」

旅の疲れがにじんだ横顔を、丸木の隙間から射した光が射っていた。

「謙蔵さんが何度も来ました」

とイサノが言った。

山本佐太郎が男子を得た一月二日に、荒木謙蔵の妻は女子を産んだ。名付け親になってくれと頼まれてい

た。

「謙蔵のところへ行ってくる」

運平は丸薬作りをそのままにして小屋をでかけたが、ふと思いだしたように出来たての数粒を紙に包んでポケットに納めた。ついでに山下永一の処に薬を届けようと思ったのだ。

ドラード河をはさんだ平地の草原の南側に、森がなだらかな斜面で盛り上っている。草原と森の接点に径がほんの一部ここからも見えた。

その径を通り馴れた運平には、寒苦に身を縮めた弟が今どの辺を荷馬車に揺られているか分るのだった。あの第三の廃屋を過ぎて、木の根を敷きつめたような上り坂の難所を通っているにちがいない。馬のあえぐ息や、馬をはげます畑中の芦、木の枝が荷馬車をこすって跳ね返るざわめきなどが聞えそうだった。

やや南に寄った中央に真夏の太陽がギラギラと輝いていた。その暑さに圧倒されたように昼さがりの森は静かだった。日蔭でじっとしていれば涼しいが、戸外でちよつとでも体を動かすと夥しい汗が流れた。それも砂漠の川のように、数センチ肌を伝わるうちに蒸発してザラザラした塩分だけになってしまふ。こんな暑い処で寒さにふるえるのか、いくら病気とはいえ、不

思議だった。

運平は長靴をはいて草の中をまっすぐに謙蔵の小屋を目指した。

草いきれの中に小屋はあった。声をかけたが無人のようだった。彼は内をのぞいた。ヤシの木の寝台の上に赤ん坊がスヤスヤ眠っていた。

彼は入って赤ん坊を眺めた。真っ赤なクシヤクシヤの顔をしていた。美人になるかどうか、まだ見当はつかない。どんな名前をつけてやろうか、と彼は考えながら小さな生命を見守っていた。両親は畑の開拓に出かけているのだろう。午後の森は静まって物音一つしなかった。

へそうだゝ彼は微笑してペンと紙を出すと

荒木静加 大正五年一月二日生レ

と書いて、枕元にそっとおいた。

三十才の女と三十三才の男が初めて得た子だった。二人とも目の中に入れても、という可愛がりようをしているにちがいない。

いい名だ、と運平は満足して立ち去ろうとした。赤ん坊の顔に尾を高々と上げて、針が刺ったように細く蚊がとまっていた。彼はいきなり蚊を叩いた。赤ん坊はウエーンウエーンと泣き始めた。

「おお、よしよし、泣くな。小父ちゃんが悪かった」

再び寝入るまで彼は辛棒強く静加をあやした。

松村総領事が八方手を尽してくれたへ医術に心得のある日本人▽が一月の下旬に着いた。戸田義雄と名乗り、妻と妻の弟妹二人の四人連れだった。

それを見て運平は眉をひそめた。入植者八十二家族の大半、つまり百五十人以上がマラリヤにかかって倒れている。そこへ家族を連れて来るのは無謀に思えたからだ

しかし、話をしてみると戸田は気さくな男だった。陸軍で看護卒をしていた経験があり、コーヒー農園を出てサンパウロでモグリの歯科医を開業するべく器具を買ったが、借金でどうにもならず弱っていた処に、松村総領事の話の人伝えに聞いて都落ちを志願してやって来ましたと言った。従って、家族を置いて単身で来るという訳にはいかなんと言う。

松村総領事のポケットマネーから何がしか出ているにせよ、運平も医師としての報酬を払うなどとも出来ない相談だから、危険だとは思ながら戸田の家族全員の移住を認めざるを得なかった。戸田は家族と共に畑をたがやしなから、マラリヤの治療に当ると張切っていた。しかし、マラリヤについての知識はゼロだと告白した。運平は大いに落胆したが、考えてみると日

本人でマラリヤの事を知っている人間はいないのである。

「マラリヤは怖いですよ。やられないように気を付けてください」

運平が案じて忠告をすると、

「マラリヤも怖いでしょうが、私には借金とりの方が恐しいのです。私がマラリヤの流行している処へ隠れれば今度は借金とりがこわがってもう追ってはこんでしよう今夜からはやっと安心して寝れます」

そう言った戸田は嬉しそうに笑った。

世の中は広い、と運平は感心した。借金とりとマラリヤと天秤にかけて身の振り方を決める人もいるのだ。

そんなことを言ってもいざマラリヤの病人を見たら驚いて逃げだすかと思ったが、元看護卒だけのことはあつて戸田は平気な顔で小まめに働きだした。

「毎日熱」で唸っている山下永一元少尉の小屋からチャッカリと陸軍将校用のマントと長靴を借りだして、威風堂々と馬に乗って巡回した。北支あたりならいざ知らずこの暑いのにマントと長靴を身につけている戸田を見て、運平はびっくりした。戸田は行き交う人に馬上から将校風の肩の力を抜いた敬礼をして馬を進めている。看護卒として日清戦争で軍医の馬のあと

を駆けずり回っていた戸田は、ブラジルでやっと将校になる夢が叶ったらしかった。馬上の戸田を見送る運平の呆気にとられた顔にやがて微笑が浮んだ。

一月三十日に久保友一の妻のフジヨが死んだ。二十九才だった。

酷暑の二月になると野火が猛るようにマラリヤは激しくなった。マラリヤ蚊は雨期と乾期の境い目に最も跳梁する。あまり水量が多いとボーフラが流されてしまいうし乾期で水たまりが絶無でも育たない。雨期の名残りの水たまりがあちこちにある今こそ、マラリヤの病原虫を体中に持ったアノフエレス蚊が繁殖し跳梁する最盛期だった。濁り水にも産卵する普通の蚊とちがい、アノフエレスは澄んだ溜り水に産卵する。濁ることを知らない原始林の沼や水溜りは、だからアノフエレスにとって楽園なのだ。

キニーネさえあれば、と思ったが、燃え上った火の手にバケツで水をかけるように、キニーネの効果はマラリヤの矯激をくいとめ得なかった。体が衰弱して、キニーネを与えても吐いてしまう患者も多い。ようやく飲んでも、弱り切った心臓や肝臓が強い薬の副作用に堪えられないのもあった。

食物を買う金が残っている家族も少なかった。芋粥かスイトンをすすれば良い方だった。稲は青い穂をつ

けはじめていた。もうじき米がとれる、何とかそれまで持ちこたえれば弱った体も栄養がとれる、と人々は歯を食いしばって熱に堪えようとした。「毎日熱」でなく「三日熱」「四日熱」のはっきりした症状の場合には、震えない日は畑に出た。鍬を振り上げると体がふらつく。それが熱のためか空腹のせいかの区別もつかないのだった。

二月二十四日にイサノの姉のヨシノが女の子を産んだブラジルに着いてすぐ男の子を産んでいてこれが二人目だった。富子と名付けた。イサノは朝から手伝いに行っていたが、産まれたという報せで運平も見舞いに行った

近くの上野トモエや山本あいのも臨月の大きなお腹をかかえて手伝いに来ていた。彼女たちの夫の上野庄平も山本順治もマラリヤで寝込んでいた。もう二人産んだトモエはそうでもなかったが、初産のあいのは、「産まれそうになったら、どうしたらいいだろう」

としきりに心細がっていた。夫の看護をしながら独りで赤ん坊を産み、畑へも行かなければならないのだった産婆がいらないから夫がとり上げるのに、その夫が寝込んでいるのだ。

「あたしが付いている」

とトモエは慰めていたが、ほとんど同じ日に産まれ

そうだった。

「あたしのお産は軽いから、産みながらあんたを手伝ってやる」

とトモエは勇ましいことを言った。

「イサノ、お前が行ってやれ」

と、運平が言うと、

「ええ」

と答えたが、二十才になったばかりの子を産んだことのない彼女は不安そうにうつむいた。
へこの子が育つように

運平は心で念じて小屋を出た。

その足で、彼は静加の小屋へ見舞いに行った。静加が生れてから、両親とも倒れてしまった。

大きなジャトバの木が亭々とそびえている。その下に荒木謙蔵の小屋がある。風が渡っていた。梢がやわらかに鳴っていた。本来なら、貧しいが希望にみちた平和な生活があつてよい小屋だった。

「入るよ」

声をかけて運平は中へ入った。

「ああ、平野さん……」

細い女の声が応えた。

静加の母のクノだった。数日前に見たときに比べて

一段と彼女は衰えていた。夫の謙蔵は真っ赤な顔をしてお汗をかいていた。

運平はハンカチを出して謙蔵の額の汗を拭いた。発熱の最中で意識が混濁しているようだった。静加はその後二カ月たっているのに、名を付けてやった日よりも縮んでいるようだった。細い枯枝のような小さな手を突き出してしきりに訴えるように泣いた。

「よし、よし」

クノはようやく寝返りをうつと、乳房を出した。三十才の女盛りの筈なのに古い木の根のように萎び切っていた静加は生命力のありたけを出して乳首にかじり付いたがすぐに泣きだした。

「お乳が出ないのです。この子がお腹を空かしているのに、一滴もお乳が出ないのです」

クノはそう言って口惜そうに涙をこぼした。

小麦粉をうすくといて煮た汁を与えているが、静加は嫌がって仲々飲もうとしないという。

「私はもう駄目です。生きていく力がなくなっただの自分で分ります。でも、この子が可哀そうで死んでも死にきれない。平野さん、お願いです、何とかこの子を助けてください」

クノは泣きながら両手を合わせて運平を拝んだ。彼女は胸をはだけたままだった。痺せ衰えた女の半裸身

から一種の凄烈な美が漂っていた。

「そんな弱気でどうする。すぐ米がとれる。米の汁を飲ませたら、静加は元気に育つ。あんたもだ。バカな事を考えるな」

そう叱りながらたまらなくなつて、彼は小屋を飛びだして畑へ走った。稲はもう穂をつけていた。それを千切つてつぶすと、白い汁がでた。だがモミを白く染めるだけで汁だけを集めるほどの量はなかった。彼は氣違ひのようにあちこちの稲から穂を千切つてはつぶした。

空しい努力だった。

彼はそこに坐り込んでハンカチで鼻をかんだ。泣いても仕様がなないと思ひながら、涙がこぼれて鼻をつまらす。

戸田と二人で運平は薬を配り、見舞いに一軒一軒廻った。何もしてやれない見舞いは苦しかった。運平にできることは一緒になつて苦しむだけだ。そこに座り、石油のカンテラが消えていれば石油を注ぎ火を点してやり、ぐったりとした病人の手を握つて力付けてやる。死んでいく人を助ける力は彼にはなかった。息を引きとる時間まで枕元にいて見守つてやるだけだった。

戸田は昼は巡回をし、夜は自分の小屋でキニーネを丸薬に丸めていた。暗い入植地を星の光りを頼りに運平はトボトボと小屋を廻った。自分の小屋に戻ると張りつめた気がゆるんで虚脱したようになるのだった。そしていいような悲しさ淋しさに襲われた。酒を飲まずにはいられなかった。深夜になるとあびるように、彼は独りでピングを飲んだ。石油のカンテラのいらだたしいほど乏しい光に映らされて、アルミのコップがボンヤリと浮んでいる。コップの中は真っ黒な影がわだかまっているだけだった。彼は目をつぶってその黒い影を飲み干す。

ブーンと蚊が耳許で低く鳴っていたが、彼は蚊帳へ入ろうとしなかった。

へ逃げてくれ！皆ここから逃げてくれ！

心の中でそう叫びつつづけていた。しかし、不可能だった。体が動かない病人の群れがどうやってここから脱出できるだろう。行く処もないのだった。第一、どこかで静養する金がない。

チーチーチ……と涼しそうに鳴く地虫の音がパタツとやんだ。柔らかな足音が近ずいた。

小屋へひっそりと戻ったイサノへ、

「どうだった？」

と彼は訊ねた。

彼女の従兄弟の中川逸二と妻のフクノが重態なのだった。一人息子の智も発熱していた。

イサノは黙って首を振ったが、堪えかねたようにワツと泣き崩れた。彼女は三つちがいのフクノを姉のようにしていた。二才になった智はイサノを「オバチャン、オバチャン」と呼ぶ。イサノはそんな智を可愛がって、よくおんぶしていた。たしかに可愛い盛りの男の子だった頬をつつくとすぐ笑うのだった。

イサノの嗚咽は運平の胸にキリのように刺った。こんな処へ連れて来た男を非難しているようだった。彼は再びピンガを注いで呻った。カンテラの光がグラツと揺れた。

二月二十八日の夜十一時に、日高卯平の妻ウキが死んだ。まだ二十五才だった。

翌日三月一日に葬式をした。集まれる者は少なかった。

ほとんど全員が病気にかかっていた。運平とイサノの元気なのが不思議なくらいだった。集まった人は「三日熱」の発熱しない日の人たちだった。毎日熱が出る人もいる。

熱はさほどでもないのに貧血して目に見えて衰弱していく者もいた。二重感染、三重感染で複雑な病状を

示しており、肺炎や肝臓障害も併発して戸田も手のつけようがない、と蒼い顔をしていた。

墓穴を掘り、棺を埋め人々は頭を下げた。線香の細い煙が生命にあふれた夏草の上を流れていった。

運平はうつむいて新しい墓標の前を離れた。死んだウキと同じ年の夫の卯平が墓標に手をかけて佇んでいる姿をこれ以上見ているのが辛かったのだ。

運平は右足に靴をはき左足は下駄をはいていた。ちよつとした傷がどうしても治らず化膿して、靴をはけないのだった。ビッコをひきながら彼はジャトバの大木を目指して歩いた。その下に荒木謙蔵の小屋がある。

「入るよ」

いつものように、彼はそう声をかけて、返事はなかったが、入口に扉代わりに吊したコーヒーの空袋をはねた。

異状な感じが彼を襲った。

床の上にゆったり動いているものがあつた。静加だった。母の乳房をまさぐっていた。

「少しは乳が出るようになったかね」

変だと感じながらも運平はクノに声をかけた。彼女は向うむきになって赤児に添寝していた。応えはなかった。

「クノ」

ちよつと強く彼は呼んだ。女の姿は動かない。

「おい！」

彼は駆けよつてその肩に手をかけた。ゴロツとクノの体が仰向けになった。露出した肩も乳房も冷めなかった。

乳房をとられた静加が泣きだした。もう、オギャーという赤ん坊の声ではなく、ヒクヒクと肉塊がけいれんしているだけの泣きかただった。

「バカな……！」

彼は絶句した。

「あんたが死んだら誰が静加を育てるんだ。えっ一体だれが……」

大声で呼んだが、やがて力なく頭を垂れて合掌した。

「済まん。済まん……。さぞ死にたくなかったろう。産まれたばかりの静加を残して、死に切れなかったろう。わしを恨んでいるだろう。済まない」

彼はそのまま石になったように動かなかった。

パツと勢よく入口の空袋が開いた。夫の謙蔵だった。

やつれ果てているが、目が生々と輝いている。

「あつ、平野さん、いてくれたんですか。やつと米が

とれたんです。米が。見てください。これさえあればクノも乳がでる」

謙蔵は両の掌でかかえて茶碗を運平の方へ差し出したが、相手の硬ばった表情に気付くと、ギョツとしたように横を向いて、寝ている妻を見た。

「……」

茶碗を持つ手がブルブルと震れはじめた。

「クノ……お前……」

謙蔵はふらふらと妻の傍に近付いた。

「あ、あ……あ」

茶碗が落ちて死んだクノの胸にわずかの米が散らばった。まだ軟らかい乳液のような半固体だった。とても臼などではつけない。謙蔵は一粒一粒爪でモミをはがしてやつと茶碗の底にたまるほどのものを集めたにちがいがなかった。

「クノ……クノ……。お前が死んだら俺はどうするんだ。静加と二人で熊本へ帰るのを楽しみにしていたじゃないか」

かきくどく謙蔵の耳に静加が空腹を訴えるか細い声が入ったのだろう。謙蔵は妻の胸にこぼれた新米の汁を指先ですくっては静加の口へ運んだ。その指が震えて赤ん坊の口へとどかない。熱の発作に襲われたのだ。運平は謙蔵の腕に両手を添えて静加が吸いやすい

ようにした。

「お母さんのお乳だぞ」

運平は静加にそう言いかけながら泣いた。

その晩、通夜をした。翌日、葬式だった。謙蔵たちの熊本県玉名郡の出身者は多いのだが、誰も動けない。米崎加賀須と糸永俊三が棺をにない、前浜三松が謙三を背負って墓地に行った。

帰って来ると運平はいつもよりずっと多く酒を飲んだ。従兄弟一家三人が重体なのでイサノはほとんど戻らなかった。空腹を覚えて台所を覗いたが、冷えた鍋の中にウドン粉のかたまりの沈んだ汁があるだけだった。暖めて食べる気にもなれず、それをレオンにやって運平はサツマイモの葉の煮付けを肴に意識がなくなるまで酒を飲んだ。

……目覚めると、ひどく喉が乾いていた。彼は服を着たまま寝ていたのだった。起きて戸外に張り出した庇の下の台所へ行つて水をゴクゴク飲んだ。イサノが夕食の仕度をしていた。西の空が毒々しいほど赤く染まって森が燃えているように見えた。三月三日は一日中寝ていたらしかった。

「誰か来たか」

彼はイサノに訊ねた。

「坂井さんと久保さんが来ました。沖田初太郎さんの弟の彦五郎さんと吉武さんの守ちゃんが死んだそうです」

「……」

「それから前浜圭作さんも死にました」

「ちよつと行つて来る」

運平は下駄をつっかけて外へ出た。

「夕食は……」

イサノの声が迫ったが彼は返事をしなかった。昨日の午後から何も食べていないが食欲はなかった。

トボトボ歩きながら、今日は桃の節句だと想い出した。

去年グアタパラでは女の子がいる家で共同で雛祭りを賑やかにやった。運平も呼ばれて甘酒をのんだ。ブラジルに来て産れた子が多いので “二才、三才の女の子たちばかりで色気がない” などと憎まれ口を叩いて皆を笑わせたりした。

運平は立ち停った。

死んだという吉武守の誕生日が桃の節句だった。母のサトに負われてあの日も来ていたが、父の亥作が「チンチンをつけて三月三日に生れやっ」と言っていたのを覚えている。すると、守は満二才の誕生日に死んだことになる。

亥作もサトもひどいマラリヤをやっている。サトもすぐ死ぬだろう。亥作も死ぬだろう。五つの男の子と三つの女の子は割に元気だった。

運平は動けなくなった。足が別の意志を持ってしまったように進まないのだ。彼は長いことそこにうずくまっていた。死者たちの家へ向って歩き出す氣力が充実するまでひどく時間が掛った。

彼が再びノロノロと歩き始めた時、あたりは夕闇がつつんでいた。時々、視界の中を人がフラフラと幽鬼のように歩く姿が過ぎるのだった。

夜だけ鳴く鳥がギャツギャツと騒いでいた。大きな翼を持ち、地表を低く飛ぶ鳥だった。ホタルの群れが湧いていた。息をつめなければ通り抜けられないほどの濃い群れが狂ったように乱舞している場所もあった。蛍に導かれるように彼の肩を落した姿は、病人や死人たちの家を一軒一軒めぐった。

三月五日に橋本豊吉の次男の政道（五才）と山下ムメの夫の仙次が死んだ。正月の土地割りの日に生れた門前角平の長男の馨も死んだ。

翌日は林田伊十の妻のトクが死んだ。

その翌日はイサノが姉のようにしていた中川フクノが死んだ。イサノの必死の看病も効果がなかった。夫

の逸二もほとんど意識がなく、妻の死亡も分らないのだった子供の智も絶望だった。二才の智は弱り切って何を与えても食べる元気がなくグッタリしていた。無理に口を開けて抑え込んでも、すぐに吐いた。イサノは偏執狂のように、何度も何度もサジを智の口許へ運んだ。イクノのなきがらも、寝ている逸二もひどく黄色い肌の色に変色していた。

翌八日に、イクノと同じ年で、しかも同じ山口県なので仲良しだったヨシノが死んだ。杉野四郎の妻で、イクノの隣の小屋に住んでいた。イサノとも仲が良かった。

三人とも名前まで似ているのだった。

朝、目覚めるのが運平は怖しかった。今日は誰も死にませんように、と心から祈った。家は浄土真宗であるが、さほど信心深くもない若者だったのに、何かに祈らなければ朝起きられなかった。

運平の祈りを無視して翌日の九日も三人死んでいった山下ムメの妹の寺田スエと、西ハツエの夫の卯八郎と、国崎音平の娘のヤエ子だった。

棺を作る板がもうなかった。ノコギリで板を引く体力のある男もほとんどいなかった。

ヤエ子は柳行李に納められた。紐で十字にしぼって

ある。運平は黙ってその紐をほどくと行李のふたを開けた去年の九月に産れたばかりの赤ん坊だった。

「なむあみだぶつ……」

沢山の子が死んでいく。マラリヤ病菌に対する抵抗がないのだった。

彼があけた行李を覗いて母親が再び泣き出した。その声が運平の神経をズタズタに切り裂いていく。彼は必死になって地藏尊の姿を心に念じた。せめて死後、救われて欲しかった。運平がふたを閉じると音平がその行李を抱いて力なく歩きだした。その妻と、鋏を持った運平との三人だけの淋しい行列だった。

翌日（十日）静加が死んでしまった。

このごろ運平は七時頃目覚める。グアタパラ時代は四時に起きて皮ゲートルを付けていたものだったが、夜遅くまで酒を飲んでいたので、どうしても朝が遅くなる。

酔いつぶれないと目がさえて眠られないのだ。

五時半に太陽が森の向うからのぞくと、まるで高跳びの選手のように一気に中天に駆け上ってギラギラと輝くだから涼しいのはほんの朝の一刻だった。

熱がなくて動ける人が稲をとり入れている。刈った稲の穂を四国の出身者は千歯でしごいた。九州者はしのい（叩い）だ。一日働けば十俵はモミにできる。そ

れを水車小屋で玄米にする。今度は自分のウスで精米にする。

半日つけば家族の一週間分の食いぶちの精米ができる。

病気の合い間の労働だからそれほどの能率は上らなかった。炎天下で働くと、体力が消耗した。それが病気には最も恐しい。しかし、働かなければ食う米がとれない。

生命力と熱病とのギリギリの闘いだった。

運平が薬を配っていると、米崎青年が

「平野さん！」

と呼びに来た。

彼は謙蔵と同じ熊本の玉名郡出身で隣の小屋に住んでいる。死の報せにちがいなかった。

「静加が死にました」

「……やはり駄目だったか」

運平は小走りに駆けだした。左足の下駄が木の根にひっかかり、彼は転倒した。倒れたとき、切株の先で切ったらしく、起き上ると右手の掌から血が出ていた。

丁度近くを通りかかった戸田がすぐ手当てをした。看護卒出身だけあって、怪我の手当ては鮮やかなものだった。目にもとまらぬ速さでホータイを巻き、しか

もあとで崩れないのだ。

運平はジャトバの大木目指して駆けた。

空袋をはねて小屋に入ると謙蔵がひどくボンヤリと上半身を壁にもたせた姿で座っていた。

小さく縮んだ赤ん坊がそこにいた。そつと手を当てると体は冷たくなっていた。

二カ月前に運平がここに座って産れたこの赤ん坊を眺めたときには、この一家にまだ暗い影はさしていなかった。両親は働きに出ていて、赤ん坊だけがスヤスヤと寝ていたのだった。それで「静加」と彼は名付けて女兒の前途へのはなむけとしたのだった。

あのとき、すでに彼女の顔には死の予告のように一匹の蚊がとまっていた。

「可哀そうに……静加」

彼は声にだして呟いた。この赤児だけは何とか育てたかった。クノに済まない。

運平は視線をあげて父親を見た。謙蔵はキョトンとしていた。悲しみに虚脱しているのだろうと思った運平が再び静加の死顔に目を移した瞬間、

「アハハハ……」

笑い声が響いた。

ギクツとした彼は謙蔵を見た。肋骨をヒクヒクさせて謙蔵は笑っていた「ヒヒヒ……ハハ」

口からよだれが流れていた。

「狂ってしまいました」

後から入って来た米崎が低い声で言った。

「いつからだ」

「二、三日前からおかしかったです」

高熱が続いた為に脳神経が痛んだようだった。

「埋葬の仕度をしておいてくれ」

米崎に頼んで運平は外へ出て深呼吸をした。深く息をしたとき、右手がズキズキと痛んだ。膝もしたたかに打ったらしく痛い。ゆるんだ鼻緒を引きずるようにして彼は河口繁雄の小屋へ行った。小屋には誰もいなかった。彼は墓へ行った。五、六人の人影が立っていた。娘のハヤ子が死んだのだった。茶箱に納っていた運平はぬかずいて合掌してから蓋をあけた。赤い可愛い日本着を着せられて、髪にリボンがついていた。グアタパラで産まれた子だ。

「父ちゃん、お米が食べたい、と言って死によった。やつと米がとれたがもう食べる力はなかったです。不憫な子じゃった」

繁雄はそう言って泣いた。

運平は地面を見詰めながら頷いていた。彼の目のまわりは赤く憫れたようになっていた。毎日病人を慰さめて廻るが、戸外にでると涙がこぼれる。涙と酒でい

つも目が血走っていた。

米崎と二人で静加の小さな体を埋めて、夕焼けの中を家へ帰った。明日はバウルへ行って医者を呼んで来ようと決心していた。何とか頼めば誰か来てくれるだろう全財産を投げだすつもりだった。

小屋の横でイサノが身をこごめているのが見えた。近よると、彼女は嘔吐しているのだった。

運平は顔色を変えた。

「マラリヤか？熱はあるか？」

彼女は首を振った。

「どうしたんだ。アメーバ赤痢か……」

イサノはうつむいた。首筋が赤いのは夕焼けのせいだけではなかった。

「……そうか」

彼女は小さく頷いた。

翌朝、運平は身仕度をして馬に乗った。いつものようにレオンが平原のはずれまで送ってきた。満足にエサもやれないので痩せているが、野生の小動物を追ったりして犬なりに食いつないでいるらしかった。馬はあり余る草を喰んで丸々と肥えていた。久し振りの遠出に勇んでいないている。

空には鳥が飛び交い、ドラード河には黒い魚影が素

速く横切った。サルたちは初めてここに着いた日のようにザーツと梢をゆるがせて移動し、ヤシのピンポン玉ほどの小さな黄金色の実を取って食べながら、運平と馬を見下していた。強い太陽をあびてどの樹木も盛んに育っていた。

自然はすべての生物に豊かな恵みを与え続けていた。

人間だけがその中で死に絶えそうになってあがいていた森の径に馬を進めながら、それが運平にはひどく不公平で不可解なことのよう思われた。自然には一種の秩序があつて、みだりにそれを乱そうとする存在は手ひどい反撃をうけるものようであつた。マラリヤは森がその身にまとつた鎧なのかもしれない。自らを防衛するために隠している様様の陥穿の一つ……。

ペーナ駅で馬をあずけて昼食をした。ペーナの人々もトレス・バラス（平野植民地の所在地名）のマラリヤがひどいという噂は聞いていて、心配してくれた。

「医者を迎えに行く」

と彼は言った。

「ここに医者が来たことはない」

と雑貨店の主人は言った。こんな処まで来るのはせいぜい祈祷師までだそうだ。

夜、バウルーに着いた。事務所に行くと、弟の彦平はほとんど回復していた。

「発熱する時間が毎日十分か十五分くらい早くなりはじめるんです。そうしたら一週間くらいで楽になりました」

と付添いの畑中仙次郎が報告した。

入植申込者がひき続いてやって来るので、事務所はまだ必要だった。今はマラリヤが出ているから、入植は暫く待つように……と言って、申込みだけを受け付けているが、中には、

「マラリヤがこわくて開拓などできるか。すぐ行く」と元気のいい人もいて畑中を手こずらすのだった。かなり払込金が事務所にあった。

翌日、その金でポケットをふくらませて運平は医師の門を叩いた。

二人に断わられ、三人目の医師がやっと同行を承諾した。

「往診料は距離で計算するのを貴方は知ってるでしょうペンナ駅では非常に高くなりますよ。いいですか」

医師は念を押した。

医師が計算した金額は往診料だけで運平がグアタハラで副支配人として得ていた給料の数カ月分に相当した。

運平は半金を前払いした。いくら高くても来てくれるだけで有難い。

十三日の夕方、運平と医師は植民地に着いた。

イサノが、七日に死んだ中川フクノの夫の逸二が危篤だと告げた疲れ切った医師に無理を言って逸二の小屋へ案内した。

脈をみて、カンフルを注射すると医師は立ち上った。

「どうでしょうか？」

訊ねると、

医師は首を振った。

「手遅れです」

「なんとかありませんか」

「貧血、肝臓機能障害、それに伴う重症の黄疸……何よりも衰弱しすぎています」

「……」

「今夜か、明日一杯でしょう。お気の毒だが」

二日滞在してそれぞれの処方箋を書き、医師は逃げるように去っていった。確かに町の開業医が我慢できる処ではない。彼は午後三時頃に診察を切り上げ、夕食を済まし午後四時頃からは収容所の中に吊ったカヤ付ハンモックに潜り込んで一步も外へ出ようとはしなかった。

逸二は医師の言葉通り翌日の夜、死んだ。二才の誕生日を過ぎたばかりの智が一人残された。叔父の誠一が引きとったが、智は熱のため脳障害を起こしていた。富子を産んだばかりのヨシノは少ない乳を二人に分けた。体を不規則に痙攣させながらも、智は母乳を欲しがるといった。もし元気になっても常人になれるかどうか……

ヨシノはこの幼ない甥を不憐がっていた。

医者を見送った翌日、サトが死んだ。桃の節句に生まれ、二年後の同じ日に死んだ守の母親である。

大人を入れる棺はおろか、代用になる箱もなかった。火葬にすることにした。

「定一、薪を集めて来い」

運平に言われて、山下少年は木の枯枝を沢山引きずって来た。森を拓いたから枯枝はどこにも転がっていた。

定一は「三日熱」だったが、もう直っていた。体力のあるうちにかかってしまったので、病菌との闘いに勝ったのだ。定一の家長の永一はまだ完全には快復していないが、病気との闘いの峠はとづくに過ぎていた。

坂井作造がサトの死体を背負って来た。サトの夫の玄作は危篤状態だった。玄作の方が危ないのに、子を

失ったサトがあっけなく先に逝ってしまったのだった。

サトの体を枯枝の上に横たえようと、作造はさらに厚く枯枝をかけて石油をまいた。

「お前はもう行け」

運平は定一の頭を押した。

定一は動かなかった。へ子供には見せない方がいい
ゝと彼は思ったが、今更見るなど言っても、毎日のように誰かが死ぬのを少年は見ながら生きているのだった。

マッチの小さな炎が投げられる。黒煙が昇ってメラメラと炎がサトを包んだ。

人々は合掌しながら炎を見守った。

サトの体が少し動いたようだった。やがて、体が燃え始めた。不意に頭が割れて脳漿が流れ、青い炎が強く立った。

運平は思わず目を瞑った。

彼は瞑目したまま、立っていた。パチパチと木がはぜる音が続き、火勢が顔をあぶる。……やがて、段々に火の熱さが弱まった。

再び目を開くと、青い空も緑の森も元のままだった。サトの体だけが灰になっていた。

サトの夫の玄作は六日後に妻と息子の後を追うよう

に息を引きとった。その翌朝、沖田新太郎が死んだ。
……こうやって三月が終った。

四月になっても病勢は下火になる気配はなかった。
三日にとし子が息をひきとった。三月に死んだ政道の
弟でやっと二才になったばかりだった智も七日の午後
に死んだ。二才二カ月。幼な児たちの魂はまるで水蒸
気のように、あまりにあっ気なく昇天してしまう。

八日に死んだのは上本スエである。四人家族全員重
態で、まず母親の命が尽きた。あとには痩せおとろえ
た二人の幼な児をかかえた父親の己之吉が重体のまま
残された。

医者の方箋に従ってキニーネ以外の薬を買いに、
戸田は二度はどバウルーへ行った。

四月早々、戸田は、

「もうキニーネがありません」

と運平に告げた。

「え……？」

おかしい。毎日飲ませればいずれ無くなるのは当然
だが、今までの減り方のペースからいうと、もう少し
残っている筈だった。この一週間だけ数倍の消費をし
なければ無くなる筈がない。

「変じゃないか」

運平は戸田を追及した。戸田はあっさりと、

「実は借金が気になって仕方ないので、バウルーに行ったとき、キニーネを少し売って送金したのであります」

と答えた。

「何だと！」

命の綱のキニーネを売る奴があるか……運平の手が震えた。殴りつけようとして固めた拳は、
「済みません。しかし、あとで必らず少しは送金するからとこちらへ来るとき約束したのであります。向うも困っているのです」

と、うなだれた戸田の言葉で、力なく垂れた。

運平は戸田に報酬を払っていない。いつかは充分なお礼をして報いたいとは思っているのだが、差し当ってそんな余裕は全然なかった。戸田も金が目当てでここに来ているのではないことを知って、その好意に甘えていたのだ。

それにしても、借金の返済にキニーネを当てるとは！運平だったらキニーネだけは死んでも手放さないだろう

……でも戸田はマラリヤより借金が怖いからこそここに来たのだ。借金が気にならない性分ならここに来ないのだ。そう考えると、戸田の行為を許すより仕方な

いのだった。

「……」

運平は深い溜息をついた。

「バウルーに行って買って来る。……グチを言うようだが、わしも悪かったが一言いって欲しかった。売るときは安く、買うときは高いのだから」

「平野さんが苦勞しているのを見たら、金のことは言えなかったのです。それで、ついキニーネに手を付けまして」

「とにかく、買ってくる。どのくらい要るだろうか？」
「分かりません。差し当って、この大ビンに一杯は要ると思います」

運平のバウルー事務所は四つ角のしもた屋である。その道に面して「ノロエステ薬局」があった。

彼は大ビンに一杯のキニーネを詰めて貰った。代価は高かった。運平がかき集めた金は三分の一にしかならなかった。

「不足分は後払いにして欲しいのだが」

そう頼んだ。店主はとんでもないという風に首を振った。

「お願いだ」

「無理だよ、あんた。安い薬ならともかく、これだけの薬を信用貸しすることはできない」

近くに事務所を開いている運平を見知ってはいたが、話にならないというように店主はビンをとろうとした。

彼はそのビンを握りしめた。

「毎日、仲間が死んでいるんだ。この薬があれば命が助かる。頼む、借してくれ」

「そんなことを言っても……」

店主は当惑した。

「払ってくれる保証があるのかね」

「必らず払う」

「口約束だけではねえ」

「おれの命をやる。払えなかったら、ここへ来て死ぬ」
運平は涙を流しながら店主を見た。本当に死ぬつもりだった。

「……」

暫くして、

「持って行きな」

と店主はアゴをしゃくった。

荒っぽい利益の追求をしながらも、信用した相手には細かい詮索をしない新開地の商人らしい気つぶだった。

その代わり原価の何倍なのか見当もつかない薬価にちがいがなかった。

事務所を弟と畑中に頼んで、彼はビンをかかえて開拓地に戻った。森は美しかった。樹木の温気が激しく彼を包んだ。黄金色の昆虫が枝にとまっている。紫の強烈な色彩を木の間にきらめかしてモルフォ蝶が飛んだ。しかし、彼は地獄へ向かって馬を進めているのだった。

森が尽きて草原の向こうに開拓地が望見されてた遠目には平和な風景だった。そして、そうではなくてはならないのだ。そのつもりで彼はここを拓いたのだった。

…：開拓地の集落が散在して、向こうの森と接するあたり、墓地がある地点から今日も煙が昇っていた。運平は唇をかんだ。

氣力が萎えていた。このままどこか遠い処へ姿を消したかった。

主人の氣持を敏感に察したように馬も動かなかった。

手綱をゆるめたまま、彼は向うの森の細い煙をボンヤリ眺めていた。

ワンワン

レオンが嬉しそうに駆けて来た。レオン（ライオン）と名付けたものの狼のように痩てしまっている。レオンは彼の足に飛びついた。

彼は手綱をとり直して馬の腹に膝の力を伝えた。

「ハイヨ！」

馬と犬は速足で草原を進んだ。

その日、火葬に付されたのは徳永元八の妻ヒデだった前日には右田辰彦の長女アキコが死んでいる。満一才の赤ん坊だった。

薬のビンを戸田の小屋へ届け、運平は墓地へ急いだ、

もう誰もいなかった。ヤシの丸木をそいだ墓標が乱杭のようにあちこちに立っている。ヒデの墓標を見付けて、彼は近付いた。切り口からまだ樹液がしみだしている。

彼は合掌して頭を垂れると瞑目した。

目をあげ、頭をあげようとしたができなかった。目の前の墓標の墨がうんげんにボヤケ、やがて大きく揺れ始めた。ゆつくりと地面が近ずき、運平はそのまま倒れた。

それから数日は、断片的にしか意識がない。戸田の呼ぶ声と、馬の背に乘せられて運ばれた記憶がある。イサノが薬を飲ませてくれたのを覚えている。

体が揺れて、運平は目をひらいた。

「あつ、気が付いた。平野さん、平野さん」

眼鏡をかけてる……ああ、畑中だ、と彼は思った。バウルから戻って来たのか。仕様のない奴だ……。彼は数人にかかえられて運ばれようとしていた。

「どうするんだ」

「平野さんがマラリヤにやられては困ります。バウルへ連れて行きます」

畑中が言った。

「わしは行かん。おろしてくれ」

「駄目です」

「行かんぞ。わしだけ行かれぬ」

大声をだされて畑中たちは仕方なく彼を小屋へ連れ戻した。

「平野さん、キニーネを飲んでください」

戸田が棚の小ビンから白い丸菓をだした。

「ピンガをくれ」

「……」

「早くくれ」

イサノが仕方なく酒をとった。それをグツと飲んで、

「おい、どうしたんだ。皆、不景気な顔をして。一緒に飲んでくれ。畑中飲めよ、グアタパラで毎晩のんだように、楽しく飲んでくれ」

運平は二杯目のコップを口に運んだ。手が震え始め

ていた。カチカチと齒がアルミに当って鳴った。

「寒い……寒いぞ」

こぼれたピンガがアゴを伝わった。

堪えきれず、彼は身をこごめた。まわりの人々は消えて行き、真白な風景の中に独りになった。雪が霏々と降っているのだった。そこを裸で歩いている。

△ここはどこだろう？▽

凍えながら彼は思った。知っている風景のようでもあるし、まるで知らない処のようでもある。日本であることは確かだった。しかし、彼の故郷の静岡ではない。静岡なら松が必ず目につくはずだった。

雪は深々と彼を埋めようとしていた。イサノが布団を掛けてくれているのを、意識の一方で感じていた。だが自分は雪の中だ。凍え死ぬかと思ったがやがて雪は融け始めた。ブランコに垂っているようだった。四辺が揺れていたが。そのうちにゆっくり廻り始めた。黒い雲が湧いては渦巻いて彼の五体を翻弄した。

何かが重くのしかかっていた。彼は夢中でそれを払いのけた。汗をびっしりかいている。暑い……苦し
い……

どのくらい続いたろうか……。寒さも暑さも、苦しさも黒雲も、妖術師のまやかしのようにあとかたなく消えた。

彼は目を開いた。畑中がポツンと座っていた。

「どうですか？」

「気持が良い」

低い声で運平は答えた。

「マラリヤもいいもんだなあ。後が風呂に入ったようにサッパリする……ピнгаをとってくれ」

「薬を飲んでください」

畑中が言った。

「ピнгаがいい」

「平野さん、あなたは死ぬつもりなんですね」

「……」

「分っています。死ぬつもりなんだ」

畑中は泣きそうな声をだした。

「……」

「でも、あなたが死んだら、ここはどうなるんです。あなたが居るからこそ、皆がんばっているんだ。平野さんが死んだら明日にでも、此処には誰もいなくなってしまう。すぐ、又もとの森になる。そうしたら、今迄の犠牲者は犬死じゃないですか！どんなに苦しくてもここに開拓者の楽園を築き上げるのが、生き残ったものの死者への唯一の供養じゃないですか」

「……」

「平野さん、死なないでください」

「ありがとう。畑中。わしの気が弱くなっていたようだ」 運平は微笑した。

「薬をのんでください」

「いや、やはりピンガにしよう」

と彼は言った。

「必らず直るから心配するな。こういう直し方もある、ということを見せてやる」

呆れたように口を開けている畑中を前にして、運平はゆっくりとピンガのコップを口に運んだ。

五月一杯、運平は床から起きられなかった。間断なく寒さ暑さが襲ってくる。肝臓に入り、それから赤血球に侵入するマラリヤ原虫プラズモジオに抵抗して、体が必死の闘いをしているのだった。人間どおしの戦争に荒廃がつきもののようにマラリヤとの闘いに少しずつ勝利を収めながらも運平の肉体は疲れ切っていた。皮膚はたるみ、濁った黄土色を呈している。肝臓も脾臓も肥大し、胃はただれ、食欲はほとんどなかった。しかし、運平は頑強にピンガを傾け続けた。

どうやら動ける日もある。彼は杖について見舞いに歩いた。彼が高熱にうなされている時、再びバウルの医師が乞われて往診したが――転地をして、栄養と休息をとれば直る――と診断をして帰った。確かにその

通りだろう。しかし、現実には不可能だった。

……稲が黄金に色づいていた。穂も重そうに重なっている。熱の合い間に動ける者が緩慢な動作で収穫していた。ほんの一週間はどの食いぶちを穫るともう疲れて動けないのだった。

彼は畑中に頼んだ。

「ペンナ駅で人を集めて米を収穫して貰ってくれ」

畑中は馬に乗って走っていった。足許を見られて高い日当を要求されても、背に腹は替えられない。この米を収穫しないと来年まで食いつなぐことができない。

少しばかりの荷物を重そうに背負って男が歩いてくる。

「平野さん……」

男は深々と頭を下げた。男は磯本役蔵だった。妻が後に鍋や釜をさげて従っていた。

「おお、行くのか」

どこかのコーヒー園で働く知人を頼って落ち延びていくのだ。先月の十六日に生後一年のフミ子を死なした。

乳が出なかったのだった。

「元気だな」

「お世話になりました」

二人の男と一人の女はもう一度頭を下げた。うるしに似た木の葉が黄色く色づいていた。秋だった。

地上は猛暑といつていい毎日だが、青く澄んだ空の高みを季節が過ぎているのだった。秋は空の高みから木の葉に息を吹きかける。一組の男女の後姿を見送ってから、運平は杖を墓地へ向けた。

肩で息をしながらだらだらの斜面を墓地を目ざして登っていた彼は、ふと足をとめた。

墓地に一人の男がいた一本の墓標をなでていた二十八才の糸永俊三にちがいはなかった。十日はど前に恋女房のモジが死んだのだった。

運平は墓への径を辿らずに、散在する小屋の一つへ向かって歩きだした。もう無人になつた小屋もあった。

径を折れても、俊三の哀れな姿が臉に焼きついていく。

妻が生き返るのを待っているような姿に思えた。彼は熊本の上名郡だが、死んだモジは対岸の島原だった「わたしや肥前の島原そだち、剛毅朴訥ありのまま」

という唄のとおり、素朴でやさしい仕草もある女だった。大きい黒い瞳をしていて、いつもは伏目がちだが、何かの調子にパツと目をあけてこちらを見る瞬

間、ハツとするほど美しかった。俊三があきらめ切れないのも無理なかった

運平が病臥していた間にも、墓標は増え続けていた。

藤本テル（十六才）。前甲ミツエ（八才）。沖田セツエ（五才）。浜崎直記（二十才）……。

直記はいま墓地に佇んでいる俊三の義弟だった。モジの弟である。俊三は妻と彼女の弟の三人でブラジルに來たのだった。俊三だけが辛うじて生き残った。

先発隊員の一人で、平野川の上に小屋を建てて陽気な文野勝馬の父の馬太郎も死んだ。勝馬も独りぼっちになった。

上本政一少年も、先月に母のスエを、今月になって父己之吉と妹シズエを失ってやはり独りぼっちになった。

一家の中で十七才の生命力だけがマラリヤとの闘いにどうやら堪えられたのだった。

運平は何軒かの小屋を訪なった。病状を聞き、はげますことだけが彼にできる唯一のことだった。

行手にジャトバの大木がそびえていてその下に淋しそうに小屋があつた。かつては荒木謙蔵とクノそして産れたばかりの静加の三人の家庭があつた処だった。

クノも静加も死んでしまった。狂った謙三が病いにとろえた身を一人で横たえている小屋だった。

トボトボと運平は小径を辿った。通る人が絶えて、経は再び草に埋もれようとしていた。扉の空袋の一方が外れて黒ずんで垂れている。黙って運平は中に入る。熱で頭がおかしい謙蔵に声をかけても仕方がないからだった。

すぐ、彼は眉をひそめた。小屋の中が臭かった。病人の不潔な臭いではなく、肉が腐乱した臭気だった。謙蔵は死んでいた。体に移しい蛆が湧いてうごめいていた。臭気に堪えて運平は立っていた。

「なむあみだぶつ」

称名が思わず口をついた。彼は額にべったりと汗を浮べながら仏の御名を唱え続けた。

病気の謙三に食事を運んでいたのは同郷の米崎加賀須だった。しかし、米崎も発病したので、その世話を糸永俊三に頼んだのだ。だが、妻と義弟を喪って腑抜けのようになった俊三が数日、謙三の処へ行くのを忘れたとしても責めることはできないのだった。俊三自身もまだ熱がある。

謙蔵のなきがらは布団にくるんで運び、茶毘に付した妻と娘のそばに新しい墓標が立った。それは只のヤシの木にすぎないが、十メートルも離れて眺めると、

幼な児を中心にした夫婦の姿がありありと見えるように思われた。

第七章

六月がきて、冬になった。

移民たちがブラジルに着いてすぐ珈琲もぎに狩りだされ、早朝の寒さに震え上がって指に息を吐きかけた、あの深く印象に残っている季節だった。

六月は聖人たちの月でもある。十三日の聖アントニオから、聖ジョアン（ヨハネ）、聖ペードロと収穫祭が続くのだった

毎日、毎日、雲一つない青空が森の上にあつた。日中かなり温度が昇るが、陽が西に傾くと共に地上の温度は一斉に空に昇っていった。冷たい夜気の中で、星は氷のようにきらめいた。

オリオンが頭上に重石のようにのしかかり、サソリ座の赤い星が血走った目のように睨んでいる。あまりに星たちの光度が強いので、南十字星のようにいくら

か光の弱い星の方が、眺めていると心が落ち着いた。星の群れがすぐ近くまで降りて来て、頭が押し潰されそうに感じる夜もあるのだった。

六月になると、マラリヤはほぼ終焉した。まだ火葬場の煙が立ち昇る日もあったが、マラリヤそのものよりも肝臓や心臓を痛めてついに回復せずに死んだ人々である。

この時期の死者は中年が多かった。池戸リヤの夫、竹次郎。大田長次郎の妻、イト。森島リマの夫、政市。みんな四十代だった。

十九才の山本経治が死んだのは例外といえる。

全滅した家族、働き手を失って仕様なしに移転した家族……平野植民地はほぼ半数に減ってしまった。しかし今が森を伐る唯一無二の時期だった。伐り倒して充分に乾燥させ、火を放つ。一度できれいに全焼しないと半焼けの倒木が散乱して後始末だけで半年もかかってしまう十月に最初の雨が降りだす前に森を焼く必要があった。

人々は割り当てられた地区へ移動した。そここそ、自分の土地だった。

あちこちで開拓が進んでいる。ノロエステ線一帯を股にかけた山伐りの請負師たちが活躍していた。斧使いと鉋使いの男たちを配下に従えて、森林の中の飯場

を風のように移動する男たちだった。

或る日、そんな請負師の一人のクストリオが馬を乗りつけた。オットーの友人で、黒い髪をした肥った大男で統率力のある評判の請負師だった。入植する時にももって山伐りを頼んでおいた。素人がコツコツ伐るより、専門家に頼んだ方が仕事が早いから反って安上りなのである。

しかし、今では一アルケール当り百五十ミルの伐り代を払える家族はない。運平は困ったが、新しく入植しはじめた家族の森をほんの申し訳に伐ってもらうことにした。マラリヤに遇わなかった家族は請負師を頼む余裕があった。クストリオもマラリヤの惨状を聞いていたから違約をせめず、小面積の仕事を引受けてくれた。

請負師は斧使いに一日五ミル、鉋使いに四ミルの日当を払う。道具は請負師の負担である。悪質な請負師は飯場で人夫に煙草や酒を高く売り、日曜日には女を連れて来てその上前をはねるという。クストリオは一切そういうことをせずに仕事の能率を上げることが第一にしていた。だから、彼の配下には優秀な人夫が集まっていた。

クストリオの配下が森を伐り始めると、見学にいった人々はその鮮やかさに目を見張った。一日汗みどろ

になつてもいくらも伐れない木が、彼等の手にかかる
と勝手に倒れて行くようにさえ見えた。普通の木は二
人の斧使いが向い合つて伐る。一米以上の大木は四人
が四方から斧を打ち込む。もっと大きな木は六人が二
人ずつ組んで三方から伐る。そうやって二人が組んで
一カ処に斧を打ち込む為には、斧使いは前後左右どち
らからでも重い斧を自由自在に扱えなければならな
い。どんなに足場が悪くても切口は二十センチ以上の
幅に広がることはなかった。

亭々たる大木にとりついた六人のうち、三人が斧を
振りおろす。カーンと一つの響きしかしなかった。次
の組の斧も又、カーンと一つに響いた。相手の姿も見
えない大木なのに、二つの音だけがリズムカルに森に
響くのだった。

仕事の手順を考えて、木が倒れる方向は寸分の狂い
も許されない。彼等はかしいだ木を反対の方向へ倒す
ことさえできるのだった。複雑に蔦がからんだ樹木は
一本伐つても倒れない。次々に十本も伐るとメリメリ
とすさまじい音響を立てて一斉に倒れる。いつ、どの
方向へ何本を倒すか……彼等は実に適確に仕事を進め
た。斧使い達は一人一人が自分の技術に誇りを持った
山男たちだった

「なんとまあ！」

「モチはモチ屋と言うが大したものだ」

見物している入植者たちは開いた口がふさがらないのだった。

自分たちが伐ると、木の性質も知らないから、柔らかいつもりで斧を打ち込むとガツと硬い音がして、手がしびれたり刃が欠けたりする。枯木や「鉄木」などは斧も刃が立たないからいいじってはいけないのだ。

「アイテテテ……」

としびれた手をかかえてしやがみ込むのだ。

鈍だつて長い柄をすげているから、振りまわしているとヘトヘトになる。指を切ったり、鞆丸を打ったり、果ては俄かに倒れかかる木に片足をはさまれたり、自前でやるのは楽ではなかった。

半月から一カ月はど乾燥させて、火を放った。

「こんな素晴らしい木を燃してしまつて勿体ない」

と誰もが思うが、それしか方法はなかった。

組をつくつて森を取り囲み、朝露が乾いた十時頃に一斉に火を付ける。

パチパチと音がして、明るい陽光の中にだんだん炎が立ち始める。火が盛んになるとゴウゴウと耳を聳する大音響を立てて森は燃え、大きな竜巻が数カ所で起つてすさまじい火柱が天へ昇った。火柱の高さは四十メートルくらいあった。その囲りに小さな火柱が幾

つも立った。

煙と黒灰で空はどんよりと曇り、あたりは異様な暗さに包まれる。太陽は真赤な円盤のようになって弱々しい光をたたえている。夜光性の鳥たちがギャーギャーと叫び声をあげて飛び廻った。

充分に火が廻ったのを見定めて、地主は酒を加勢者に振舞って労をねぎらう。

森は夜になっても赤々と燃えていた。太い枯木の太木だけが、炎の中に黒々と立っていた。凄い眺めだった。

夜明けになると、細い木はとくに燃え尽き、大木だけがあちこちに赤いシルエツトになって転がっているのだった。

山焼きがすむと、小屋を建てる。見渡すかぎり黒こげの切株が乱立する中にポツンと一軒だけ小屋が建つ。およそ人間の住居でこれほど殺風景な住いはないだろう。

隣人の小屋さえ見えない。すべてのものが死に絶えたような焼け跡である。しかし、注意して足許を見れば、土は新生の息吹きをひそめて広がっているのだった。

山焼きのあとに最初に芽を吹いたのはサマンバイヤ

（ワラビ）だった。あれほどの猛火の跡になぜ芽が出るのか信じられないくらいだった。風に乗って孢子が飛んで来たのか？地中深く根が張っていたのだらうか？ワラビは焼跡の地表に小さな緑色の疑問符を無数に突き立てていた。

なぜ？

なぜ？

女たちは嬉々としてワラビを摘んだ。手がアクで真黒になるほど摘んだ。オヒタシは故郷の味がする。

ワラビが呆け、シダの葉型を整える頃に雨が降り始めた。十月だった。コーヒーの苗をつくる。米を植える。綿を植える。雨期蒔フエジョン（豆）を植える。しなければならぬ事が山のようにあり、目が廻るほど忙しかった。

欧州では第一次世界大戦の戦火が広がっていた。農産物は国際的に値上りしている。中でも綿は異常な値上りを示していた。白い黄金という言葉が綿の異名として生れかけていた。

目標はあくまでコーヒーだが、勝負の早い綿を人々は植えた。

自分たちで森を拓き、作物を植えるのであるから、まだ作付面積は知れたものだったが、毎日毎日、夜明

けと共に畑へ出て日が暮れるまで鍬を振った。

入植区は十三区に区切ってあった。運平は中央の九区に居を構えた。相変らずヤシの半割りの丸木小屋だが、入口を入ると居間兼事務所。右に寢室を二つ。寢室の前にベランダをつけたので、少しは家らしい感じがする。

日中の厳しい直射日光を背後に負って、家は南面していた。なだらかな斜面の中央に、ポツンと一軒だけ建っているのだった。三百米はど斜面を降ると平野川の爽やかな流れがあった。

隣の八区は測量師に言い含めて五アルケール余分にとつてあった。学校や青年会館や墓地などをそこに置く予定である。

恵みの雨が降り続く日々の中に、大正六年（一九一七）の正月がめぐってきた。

運平の家の前に人々は集って正月を祝った。去年の正月よりも何もない。しかしいい正月だった。久し振りに唄が出た。

「今年は豊年満作で、道の小草に米がなる」

運平も楽しそうに手を打ってはやした。そしてひっそりなしにピンガを飲んだ。アルコールが切れると手が震えるようになっていた。

夜、小用に立つと、家の周りに乱立する焼けぼつく

りが月光を浴びて黒々と立っている。その向うには深々と森が眠っている。牧歌的な白昼とはガラリと趣をかえて凄惨な光景が月光の下に展開されていた。焼木は淋しそうに佇んだり、苦悶して身をよじり手を差しのべている人の姿に見えた。死者たちの群が彼の家を取り囲んでいる。ギヤーと断末魔の怪鳥の叫びがすぐ近くでする。ホッホッホッと女が笑うような音が森から響く。斜面の下方には蛍の大群が乱舞していた。谷全体が光り、渦巻いていた。蛍の塊りとは思えぬ、大きな青い光が移動するのを視た夜もあつた。現実の夜景は六カ月前の日々に彼の心を絶えず引き戻すのだった。彼の手は習慣的に酒ビンとアルミのコップに延びた。酒の酔いだけが彼の心を麻痺させてくれた。

二月になると稲の穂がふくらんだ。早植えの稲がとれ初めた頃、イサノほ男の子を生んだ。

「ジョゼ」

と運平は名付けた。如是という漢字を当てた。坊さんのような名だったが、それが彼の心境でもあつた。

入植者はボツボツと増えていた。平野川の対岸に二百四十アルケール買いたした。畑中仙次郎の名で分譲させた。一千アルケールや二千アルケールでは小さい、と運平は思っていた。際限もなく大きな土地に植

民地を作りたかった。

四月、五月と稲をとり入れ、五月と六月が綿つみだった。枯れた綿畑に白い花が咲いたように綿がはじけている。地質が良く綿がのびながら、人の姿はすっぽりと隠れてのんびりとした話し声だけが聞えてくる。運平は綿を売り込みにサンパウロへ行った。値は良かった。量さえ多ければすぐにも人々は豊かになれると思つて満足だった。

綿の金が入った。初めてといつていい現金収入だった。寄付金をつのり青年団の労力奉仕で七月には念願の学校を建てた。それまで仮小屋で福川薩然が教えていた。新学校は旭小学校と名付け弟の彦平が教師になり、昼は児童夜は青年学校に授業が始まった。僻地学校として正式に登録しポルトガル語による教課も組み入れる予定だった。

その頃、鈴木貞次郎が滞在していた。コチア郡に入植者を世話してからブラブラしている鈴木に運平はサルトリオの新コーヒー園の苗造成請負いを依頼したかったが遠い処なので思うにまかせなかった。

十月の末に一頭の馬が駆けて来た。乗っているのは金髪の大男だった。

「オットーさんじゃないか！」

「おお、ヒラノ。頑張っているかい」

大男はゆっくり馬からおりた。馬も人もひどく汗をかいていた。

オットーは最近は大ウルーに住む方が多いはずだつたこんな処に姿を見せるのは珍しい。

「俺をしばらく匿ってくれんか」

とだしぬけに彼は言った。

「どうしたんですか？」

「フン！」

オットーは口惜しそうに地面に唾を吐いた。

「ブラジルがドイツに宣戦布告しやがった」

「えっ、それは知らなかった」

「戦争もしないのに、クソッ。バウルでな、馬鹿な野郎がドイツの悪口を言うから一発かましてやった」

「殺したんですか」

「いや、死にやしない。しかし、俺は敵国民だからな具合が悪い」

日本もドイツと戦っている。しかし、この原始林の中では、そんな事はどうでも良かった。

オットーは一週間ほど居て、自分の農園へ戻った。バウルーから刑事が行った筈だが、一度行つて居なかつたらもう二度と来ないさ、と言った。

「有難う。もうちよつと大きいベッドがあればもつと居るんだがね」

オットーらしい憎まれ口を叩いた。馬に拍車をかけた。谷の曲り角で小さくなつた彼の姿が振り向いて手をあげた。祖国が戦争をしている男の後姿は淋しそうに、見送る運平の目に焼きついた。

そろそろ雨期が始まる。オットーがいた日々も人々は綿の植付けに忙しかった。雨期蒔豆も植える、米は勿論だった。籾を播くとき、一粒一粒拝して土に播くのと言う男がいるくらいで、なんといつても米が日本人の生活の中心だった。

雨は順調に來た。十月の末からボツボツと降りはじめ綿も豆も順調に発芽した。山を焼いたあとの新畑だから雑草はまだ生えない。目が和むような柔らかい緑は全て丹精した作物の緑だった。

十一月の十三日。

晴れた日だった。乾期にはナイフを突き立てると刃が欠けそうな青空だが、十一月の空の青はずっと淡かった。

その空の一角に雲が湧いていた。ベランダにいた運平がその不思議さに気付いたのは、雲がかなり拡つてからである。

「…？」

彼は首をかしげて空を仰いだ。雲は銀色の光を發してかがやいていた。金属のような光だった。

その不可解な雲はゆっくり拡っていた。

「平野さん」

近くの植田勘三郎が走って来た。

「なんででしょう？あれは……」

「分らん」

二人は並んで首をかしげながら空を仰いだ。

「オーイ」

「平野さん」

栗木や上野も空を言ながら不思議そうに集って来た。

その頃には雲の先端は頭上に達していた。日がかげり雲は銀色の光りが消えると茶色っぽい色になった。

「雲じゃない！何か飛んでいるのだ」

誰かが叫んだ。

確かにそうだった。何か生物が飛んでいるのだ、しかし、生物とすればとんでもない大集団だった。この広い空を埋めているのだ。四辺が薄暗くなった中を、雲のようなものはゆっくりと高度を下げていた。小鳥だろうか？羽のようなものが一斎に陽光にきらめいている。

パラパラと大粒の雨が降るようにその生物は地上に降り始めた。

「イナゴだ！」

「イナゴにしては大きいぞ。バッタだ！」

黄色いぽい茶褐色のバッタだった。大きさは六センチくらいであろうか。疲れ切っているらしく、地表に降りると力なく歩き廻っていた。

ゴーツともブアーとも聞える異様な響きが上空をおおっていた。それに混ってキチキチと舞い降りる翅音が段々繁くなった。群の中心がこのあたりに降下しはじめたのだ。

「これはえらい事だぞ」

「驚いたなあ」

運平たちはあつ気にとられて地上と空を交互に眺めた。飛んでいる群の幅は五メートルくらいありそうだった。長さはずっと長い。二十メートルあるのか四十メートルあるのか見当がつかなかった。

「あなた！」

イサノのけたたましい悲鳴が裏で起った。

「どうした。イサノさん」

植田がまず走って行った。運平たちも家の裏へ廻った。

「アアッ」

「オゝ！」

人々は一斉に声をあげた。

裏に自家用の野菜畑がある。ニワトリ用のトウモロコシも植えてある。疲れがとれたバツタがその青い色彩にびっしりたかっているのだった。すさまじい食欲だった。葉を咀嚼する音が雨のようにも遠い潮騒のようにもザワザワと聞えるのである。

「大変だあ……」

植田も栗木も上野も目をむくと、自分たちの畑の方へ転がるように駆けていった。

「シツシツ」

とイサノはバツタを追い払おうとした。数匹が申し訳のように飛び立っただけだった。

運平は石油カンを持ってガラガラ叩いた。口で言うよりずっと効果はあるが、逃げてでもすぐ替わりのバツタが飛来する。

レオンも主人に習って吠えた。犬の声は仲々効果があつた。

イサノもビスケットのカンを叩いた。

「これじゃ駄目だ」

いくら追っても、後を振向いたらもうバツタがたかって葉を喰っている。見るまに葉がなくなり茎まで消えはじめた。

運平は石油カンを投げすてると家へ飛び込んでベッドの敷布やフトンカバーを抱えて戻った。カンを叩いて追い、素速く布を野菜にかぶせる。囲りに小石を置いてしっかり押えた。

バツタは布にとまったが、布を喰い破るそぶりはなかった。たゞ動き廻っているだけである。

運平はありとあらゆる布……シャツ、風呂敷、合羽、手拭いを持ち出して野菜にかぶせた。流石にジョゼのおしめだけは持ち出さなかった。トウモロコシは丈が高いから、手の下しようがなかった。すつぽりとかぶせられるほどの大きな布はない。

バツタは次々に飛来して小さなトウモロコシ畑に降りた。バツタの上にバツタがとまり、とまりきれないバツタが滑り落ちる。二人が見ているうちにトウモロコシ畑は完全に消滅した。

「皆の様子を見てくる」

彼は馬にまたがって走りだした。バツタがひっきりなしに額を打った。

一番近い植田の畑に近ずくと、カンカンとけたたましい音が響いている。ブリキカンより固い音だった。植田の家族は鍋を叩いて畑を走り廻っていた。夢中らしく、鍋はひどく変型していた。

運平は等高線に添って十区、十一区、十二区と馬を

駆った。どの畑もひどい。事態は絶望的だった。あまりにバツタの数が多く手のほどこしやうがない。それに、まったく経験にない出来事なのでどう対処すればいいか運平にもまるで見当がつかなかった。

馬首をめぐらせて七区六区へと駆けた。泣きながらバツタを追っているのは桜井初次郎の妻君だった。

その隣りの太田長次郎はマラリヤで妻を失っていたから、二人の子供と三人でバツタを追っていた。

「どうだ！」

運平は呼びかけた。

「だめです。こいつら逃げやせん」

悲痛な返事がかえった。

「兄さん！」

異変に授業を中止して戻って来た彦平と帰り路で逢った。

「大変なことになりましたね」

「うん……」

運平は唇をかんだが、

「お前、ペンナ駅まで行ってくれんか。この土地に古い住人たちが、何か対策を知っているかもしれない」「そうですね」

彦平はうなずいた。

「行つて来ましょう」

「必要があるかもしれない。金を持って行けよ」

「はい」

彦平は水を入れた皮袋を鞍に括りつけて馬に鞭を当てた。

「急いで戻ります」

声と共にクツワの音が遠ざかった。

家の中までバツタは入って土間や机の上を動き回っていた。

彼はバツタを払って椅子に座わり、ピンガを飲んだ。

何気なく足許をみると、脱ぎ捨ててある下駄に数匹のバツタがたがっていた。身をかがめて下駄を手にとってみると脂がついた鼻緒が喰い千切られていた。

「クソッ！」

彼は癩癩を起こして、土間のバツタ目掛けて下駄を投げつけた。

夕方が近ずくとバツタはパラパラと飛び上り近くの森にとまった。地上では寝ないようだった。凄いバツタの群で、森は茶褐色の厚い甲冑をまとったように見えた。

頭をめぐらすと周囲の森はギッシリとバツタで盛り上がっていた。バツタが動くのか、森は夕日を受けて

キラリキラリと赤い金属的な光を不気味に反射するのだった。

完全にバツタの群に包囲された状況だった。言いようのないほどの圧迫感があった。

日が沈む頃、彦平は戻ってきた。

兄の顔を見るなり、彼は首を振った。

「方法がない、と言っていた」

「……」

「奴等はてんから諦めてるよ。何もしようとしない。それからペーナ駅の近くで汽車が立往生して大騒ぎなんだ」

彦平は興奮して喋った。

「線路に群がつているバツタの脂で、車輪が空回りして汽車が進まなくなっているんだ。客たちはペーナ駅へ徒歩で辿りついて大騒ぎしていた」

「いつバツタは飛び立つんだ？」

「二、三時間で飛べば、それは移動の途中の休憩だが、この様子ではずっといるだろうと雑貨店のオヤジが言っていた」

「ずっと？」

「二十日くらいらしい。……卵を産んでそれからどこかへ飛んで行くそうだ」

運平は溜息をついて暮れようとする森を眺めた。

これほどのバツタの群は、ノロエステ鉄道線の行きつく先のマツト・グロツソ州の大森林地帯で発生し、何かの理由で食物が不足して大移動を開始するのであった。

小地域の被害は毎年のようにあるが、こんな大群は十年に一度くらいではないか、と汽車の乗客の一人が語っていたそうである。

日が暮れると入植者たちは運平の家へ集まってきた。

みんな蒼い顔をしている。初めての経験なので対策の立てようがないのだった。

ミシミシ、バキッ！

という響が森から夜のしじまを破って聞えてくる。バツタの重みで木の枝が裂けているのだった。巨大な防虫綱でもあればいいのに、と言いがうがそんなものがある筈がない。空カンを叩いたり棒切れを振りまわすより方法はないのだった。共同で作っているカフェー（コーヒー）の苗床がある。今年の七月に川の近くに種子をまいたのだった。年が明けたらすぐに半年ものの苗をそれぞれの畑に定植する予定だった。どんなことをしてもコーヒーの苗だけは守らなければならない。日光で焼けないように苗床にはおおいがして

あるが、おおいを厚くしてバツタを防ぐことにして作業の当番を決めた。

決まったことはそれだけで、人々は溜息をつきながら帰っていった。

運平は独りでいつまでも起きていた。イサノと如是はとつくに寝ていた。ピングをちびちび飲んでいると、森から細い枝が折れる音が時々聞えるのだった。折れた枝にとまっているバツタが飛び立つ音がザーツと聞えることもあった。

夜が白々と明けた。バツタの群は森に膠着していた。

△昨日たらふく喰ったから今日は大人しいのか▽

と鉛色に光る森を眺めながら人々は胸をなでおろしたが、朝日が射すと赤くなった森が動いた。

一匹二匹：百匹千匹：一万匹十万匹：みどり色の甲の下に隠した赤い羽根を広げて一斉に飛び立ったバツタは畑の緑目がけて襲いかかった。森にはいくらでも植物があるのに、人間が栽培した農作物がごちそうらしい。

カンカンカン：：：：：。

空カンを叩く音が朝の開拓地のあちこちから起こった。

空カンを押くことなど造作もないようだが一日続けると実に疲れる労働だった。半日でカンは潰れて音がなくなる。それを苦心して叩いてどうやら元通りの型に直すのだが、二度三度と直すと音が悪くなるのだ。ボアンボアンとひびく元氣のない音になる。物のない開拓地だから空かんも貴重品だった。頭を下げて隣人に空カンを貰いに行く人もいた。

空カンを押いたところで、さして効果はないのだった。

しかし、何もせずに手をこまねいて作物がみすみす喰われるのを傍観してる気にはなれない。

バッタの新しい群は翌日も地平線に湧いて飛来した。

三日はど経つと、開拓地は死んだように静かになった。

もう喰われる作物が無くなったのだ。だから空カンを叩いてバッタを驚ろかす必要もなくなった。神社のお守りを畑に立てた者もいたが無効だった。今度は森の葉が喰われ始めた、パウミット・ヤシの柔らかい部分がまず喰われた。樹によつては樹皮まで喰い尽され無残な姿になった。

一週間たった。

多くのバッタの動作が緩慢になった。腹がふくれて

いるメスらしかった。

十二日目のお昼頃、森で葉を喰っている筈のバツタは再び畑へ飛来してきた。見守っている人々の囲わりで、狂ったようにバツタ同志がぶっかかり合っている。何のことか解らなかったが、一匹だけに目星をつけて動きを追うとオス同志がメスを争って戦っているのだった。勝ったオスは待っているメスと交尾する。地上で何万という交尾、低空ではバツタ同志の壮絶な闘い……人々は憎さも忘れて自然の壮大な生殖劇に見とれていた。

ふと気付いて、

「アッ、アッ」

と人々は叫んだ。

交尾が終ったばかりなのにメスの尾の先がスルスルと七、八センチも延びたのだ。

「なんとまあ……」

感心して眺めているとメスは後尾を柔かい土に差し込んでじっとしている。

「ヤヤッ！もう卵を産んどるぞ」

土をどけると米粒の三分の一くらいの薄茶色の粒がおよそ百個ほど固まっているのだった。

人々は慌ててメスを叩き潰して回わった。無抵抗のメスは無残に潰された。棒も板切れもドロドロになっ

た。

しかし、次次に広い地表に舞い降りるバッタの数の方が圧倒的に人間の殺すバッタより多い。

午後三時頃……多分、総てのバッタが産卵を終えたのだろう。何匹かが高く高く飛翔しはじめ、それを追うように次々に群は地上を離れた。

空に茶色い雲が湧き、高度を得ると銀色に輝き始めた銀色の雲は風に流される煙のようにたなびいて遠く移動していった、遂には地平線近くの空にとけ込んでしまった。地上には無数のバッタの死屍と虚脱状態の人間たちが残った。

午後雷雲が暖かいにわか雨を赤い土に叩きつけた。

「すぐ種をまこう」

かなり時期が遅れているが、僅かの収穫でも待たなければ生きていけない。バッタとの連日の闘争で疲れ切っていたが、休むひまはないのだった。空袋を背に負い、雨の中で鍬を振りはじめた。

雨に恵まれて、種は再び青々として芽をふいた。赤い土が青く萌え、初夏の太陽と雨が連日訪れて芽をぐんぐん延ばしてくれた。

芽が二十センチ近く延びた頃、孵化したバッタの幼虫が続々と地上に這い出してきた。羽のないチビツ子

のくせに意外と動作が素速く、人間が近付くとピョンピョン跳ねて逃げるのである。地表に出たばかりは青色だが暫くすると黒く変色した。

ゾロゾロ、ゾロゾロ地上を這って合流し、黒い河のようになつて動くのだった。

彼等は親のバッタ以上の食欲を持っていた。人々は今度こそ本当の氣違ひになつたように、カンを叩いて走り廻り、穴を掘つて幼虫を追い落とし、石油を振り撒いて火をつけたが、一週間目には完全に敗北した。人が行くと作物の下に陰れてしまう。殺しても殺しても地の中から湧いてくる。伐り残したヤブに入られたら、手がつけられないのだった。畑の作物を食い尽した幼虫はピョンピョンと森へ跳んでいった。あちこちの樹が丸裸になり、白い肌をさらした。

孵化して約一カ月、翅が生えて成虫となつたバッタ達は或る日、高く高く飛んだ。どのような能力があるのだろうか？ 見たこともない親達が飛んで行つた方向に若いバッタ達の大群は銀色の雲になつて飛んで行つたのだつた。

二度の襲撃をうけて、作物は何も残らなかつた。種をまく時期をとくに過ぎていた。ただ、二度目に植えた米だけが助かつた。遅蒔きだから収量は少ないだろうが全然とれないよりましだった。この僅かの米が

助からなかったら餓死をまぬかれない瀬戸際だった。しかし、収入の道は絶たれたのだ。

米が助かったのは、幼虫にとって直立した稲は登りにくいからだった。それに低地は水もある。いつの間にか大正七年（一九一八）の正月も過ぎていたのだった。幕も正月も念頭になかった。十一月の十三日にバツタが来て作物を食い、肥り、十二月に卵を産んだ。ヘトヘトになって再び種をまき終ったら新年早々幼虫が這い出し、四十日はど暴れ廻ったのだった。

コーヒーの苗を定植する時期が少し過ぎていた。二月十日には乾期用豆も蒔かなければならない。食い物もないのに、牛馬のように、いやそれよりもっと酷く働いて働いて、働かなければならないのだった。

森を拓く、とは不思議なことだった。これほど自然に痛めつけられ、生死の境をさ迷うような貧しい日常なのに、人々の間に一種の明るさがあるのだった。

どんなに貧しくてもここは自分の土地だ。人に頭を押さえつけられ、命令され、搾取されているのでない、という意識が人の心を明るく意欲的にしているのだった。

日語学校の横に板囲いの道場がつくられ、日曜になると青年たちが、

「エイ！」

「ヤーツ！」

と剣道にはげんでいる。

自製の竹刀だけで防具も小手に布をまいたただけだが、それでけっこう楽しいのだった。

道具が不要なせいもあって相撲も盛んである。

六月の半ばの日曜日に、運平が剣道の試合を観戦していると、

「ちよつと平野さん」

と徳永が呼びに来た。

教室に入植者の重だった顔が並んでいる。何となく思いつめたような表情をしていた。運平が入って行ってもバツが悪そうに何も言わない。

「どうした？徳永君」

運平が訊ねると徳永は言い憎そうに口籠りながら話を切り出した。入植者たちはまだ地権証書を受けとっていない。土地の値は測量費と地権の書類付きということであつた。そろそろ正式に地権を手に入れて安心したいのだが……。

「おう。そうだな。皆の言うのがもつともだ。早速バウルへ行って登記の手続きを済ませよう」

と運平は答えた。

「ありがとうございます平野さん」

皆は口々に言って頭を下げた。

剣道の試合を見終って運平は家へ戻った。じつと腕組みをして考え込んだ。

確かに、土地代に登記費も含めていたが、その金は一ミルも残っていない。運平は数年は働かなくて暮せるだけの金を持っていたが、入植時の諸費用とマラリヤで使い果した。バウルで買ったキニーネの薬代だけで一千六百二十アルケールの土地代より高かったのだ。その全てを彼一人が負担した訳ではないが、とにかく有るだけの金は費した。マラリヤの後から入植した人の金まで払いに廻した。マラリヤの後から入った家族も多いのだ。マラリヤで使ってしまったからもう一度払え、とは言えなかった。マラリヤで多数の死者を出した責任を運平は日夜感じ続けていた。その為に自分が丸裸になるのは当然だと思っていた。

しかし、現実に金はない……いつものように運平の手は無意識にピンガに延びた。ピンガが切れていると不機嫌で、イサノにもガミガミ小言を言ったりする。体内にアルコールがないと人間的な感情を持てないほど運平の体も心も疲れ果てていた。自分が見た夢のために、人々は此処に入植したのだった。

結局、全ての責任は自分が負わなければならぬ。石にしがみついてもこの開拓地を成功させたかった。

しかし、この苦しきはどうだ。

夢は、夜空に浮ぶ月のようなものか、近ずけば荒廃した不毛の世界に過ぎないのだろうか？ 運平は落涙した。金が欲しかった。六月の寒さが割丸太のすき間から執拗に吹き込んで来る。少年のように膝をかかえて、彼は苦しい酒を飲んだ。

翌日、運平は旅立った。馬も人も吐く息が白い。土地の登記はバウルでする。だが彼はバウルのホテルに一泊しただけでサンパウロへ向った。バウル事務所は不要になったのでとくに閉鎖してあった。

サンパウロに夕方着いて、翌日彼は総領事館へ重い足を向けた。友人は大勢いる。しかし、誰もかれも生きてるのが精一杯だった。小遣いくらいなら融通してくれるだろうが、まとまった金を持っている移民など一人もいないのだった。どう思案しても、松村総領事以外に金策のあてはなかった。できることなら地権のことなど放っておいて、知らん顔をしていたい。しかし、毎日苦しみ続けている入植者たちにとっては自分の土地を持ったVという事以外には慰めはないのだった。そして、自分の名が記入された登記証を手にとらなければいつまでも漠とした不安はつきまとい、いる。安心できない。

：金はない。入植者たちを安心させてやりたい。運平はトボトボと総領事館の門を潜った。

応接間へ現われた松村は運平を見て驚いたような表情を一瞬浮べた。二年前の颯爽とした精悍な男とは別人がそこにいた。弱々しそうに、何度も頭を下げ、顔色が冴えない小男がそこにいる。鼻の先だけが不自然に赤く、彼自身も気にしているようにハンカチを出して何度も何度も鼻をこすっている。酒が切れているので、その手が微かに震えていた。

運平の用件を聞いて、

「幾ら入用ですか」

と、松村は訊ねた。

「八コントです」

「ほう、大金ですな」

松村は困ったように言った。

「私もそれだけの金の手持ちはないので。すぐ要るのでしょう？」

「なるべくなら……」

低い声で、うつむいたまま運平は答えた。

「いや、これは失礼。私の言い方が悪かった」

「……………」

運平は下をむいたままだった。

「私の妻がへそくりを持っています。それで立て替え

ましよう。いや、恥を言うようだが、総領事など右から左へ金が出てしまうのですよ」

「奥様のお金を借りるなどんでもない。辞退いたします」

「金は金です。それとも女の金などイヤですか」

「とんでもない。そんな失礼なつもりで申したのではありません」

「まあ、上へ行きましょう」

二階が総領事夫妻の住居になっていた。

「菊子。平野さんに八コント用立ててあげなさい」

「はい」

と答えて菊子は手文庫から紙幣を出した。

「平野さん、返済はいつでもいいのですよ。返済しなくてもいいと申し上げたいが、貴方のことだから返すつもりでしょう。植民地が楽になったら返してください。だから、なるべく早く返して貰いたいとも思います。つまり、植民地が一日も早く成功して皆の生活が楽になるように祈ります」

「有難うございます」

運平は卑屈なほど幾度も頭を下げて礼を言った。札を受取る手の震えがさつきより激しくなった。

「札など言わないでください。貴方に酷い苦勞をかけて心から済まないと思っていますのです」

「ありがとうございます」

「体にだけは気を付けてください」

松村は震える手に視線を注ぎながら心配そうに言った。辞去する運平を松村は階下まで送ってきた。入口で頭を下げ、門を出るとき頭を下げた男を、松村は沈痛な表情で見送った。

運平はバウルーに戻り、弁護士を通じて旧地主のギマランエスのサインも貰い、完全な登記書類を作成させた。

六月二十五日。酷く寒い朝だった。しかし、一人一人の名が記された土地登記証を持った運平は心も身も軽く汽車に乗った。皆の喜ぶ顔を早く見たかった。

正午にペンナ駅に着いた。

「酷い霜だった。今朝は二十年振りだという。コーヒーは全滅だろうな。あんたの処はもうコーヒーを植えたのかね」

馬をあずけてある駅前の家の主人がそう言った。

「今年初めて植えた」

「それは……」

主人は肩をすくめた。

運平は店先でピンガを一息に呷ると馬に飛び乗ってその尻を叩いた。

「急げ！急ぐんだ！」

そう馬に叫んだ。

霜がとけてぬかるみの山道を馬は泥を運平の背中まではねながら一散に駆けた。

森を駆けていて気付いたが、葉が赤茶けて爛れている木があちこちにあった。葉の幅の広い木はど霜に弱いらしい。特にカブシソウという大きな葉の木は真赤になっていた。多分、葉だけでなくこのまま木も枯れてしまうかと思われた。火に焼かれたような感じにカサカサに変色していた。

ザブザブとドラーズ河を渡り、一区へ馬を乗り入れた河尾の畑のコーヒーの苗は赤く焼けていた。三千五百本全滅。太田の処は手が足りなくてほとんど植えてないがやはり全滅……桜井、四千本全滅……。

「どうだ！」

「やられました」

桜井は苗のそばに坐り込んでいた。

六区まで来ると生き残っている苗もある。十区、十三区と標高が昇るにつれて生き残っている苗が増えていった。

運平は家に戻ると指令を出して全員に集ってもらった。来ない者もいた。こんな処よりコーヒー園に戻った方が楽だからすぐ荷物をまとめて出て行く、と言っ

ているのだった。

確かにその通りだった。全てが初めてなので予測して対策の立てようがない。グワタパラでコーヒーを知り尽したと確信した運平だったが、まったく知識になり出来事が次々に起ってくるのだった。彼も、他の人と同じように無力だった。自然の前にはまるで産れたての赤子のようなものだった。

運平は植民地の図面を拡げて霜の被害状況の報告を聞いて記入していった。

×印と○印があちこちに付けられた。やがて、覗き込んでいた人々は

「ホウ」

と嘆声を挙げた。

○印は生き残った苗である。×印は枯死、△は中くらしいの被害……それらは霜の通り路をハッキリ示していた。

最初、一等地と皆が思っていた低地は根こそぎ×印だった。くじ運が悪くて泣く泣く入った高所のコーヒーは生き残った。十四区の山下永一の六千百本がそっくり残っていた。

「これからは×印の処へは二度とコーヒーを植えるな。○印の延長に植えるんだ」

運平は言った。

皆はうなずいたが、力のないうなずき方だった。再びコーヒーを植える気力が湧かないのだった。他人のコーヒーを請負って苗から結実まで四年、面倒を見るだけで一財産作れるほど手間のかかる仕事だから、やる気が失せるのも無理なかった。

「頑張ってくれ。もう一度コーヒーを植えてくれ」

彼は声をはげまして皆の顔を見たが、人々はうなだれていた。

「な、頑張ってくれ、ほれ、これが土地の証書だ。自分の土地だ。頑張ってくれ」

彼は証書を一人ずつ渡しながら言い続けた。

「ブラジルは結局、コーヒーの国だ。本当に成功するにはコーヒーしかない。もう一度植えてくれ。頼むぞ」

言いながら、自分が無理を言っているのがよく分っていた。

本当なら棉つみが終って現金が入り始める楽しい時期なのだ。それなのにバツタに喰われて棉は一本も生えなかった。その上、コーヒーがやられた。米は細々と食いつなぐしか穫れなかった。バツタの幼虫が去ってから蒔いた乾期蒔きの豆が穫れるが、売っても金額は高が知れている。油や石油や布や肉や……生きて行くために最低は必要と思われる品物を買う金の十分の

一にも満たない筈だった。食い物もないのに重労働をしなければ前へ進めない。やっと前へ進むと自然が用意した陥穿が大きな口をあけて待っているのだった。

皆がすっかり閉口たれているのは痛いほど感じている。一番参っているのは自分だった。しかしここで自分が弱気を見せたらもうこの植民地は無人になる。一年もしないうちに再生林におおわれ駅から来る途中にあった小屋のように森に埋ってしまうだろう。

そうしたら何の為に此处で人々は死に、苦しんだのだろうか？ 何の為に……？

「皆、頑張ってくれ！」

血を吐くような声で運平はもう一度叫んだ。氣力の限界だった。

「やります」

山下が答えた。

皆もうなずいた。痩せて、ボロボロの服を着た三十数人の家長たちの集団だった。

七月、八月……寒さの中で森を伐ったり、狩をしたりして人々は生きた。

やっと十月になった。棉、豆野菜の種まき、コーヒーの苗床作り、来るべき雨にそなえて毎日忙しくなった。

もういくらなんでも、霜もバツタも来ないだろう。雨期には湿地帯へは蚊の出ない日中しか行かないように注意しているから、マラリヤの心配もあまりない。

サンパウロ市では十月にスペイン風邪が流行して多くの死者があつた、という噂が流れてきた。遠い街の出来事だつた。

種を蒔き終つたが、雨は仲々降ってくれなかつた。人々は毎日空を仰いで、晴れ渡つた青空を眺めた。雨どころか雲一つない日が続いている。

十一月……。例年ならそろそろ日本の梅雨のような天候になるというのに、空は一点の曇りもなく晴れ渡り、空気は乾燥し切っていた。

十二月になつても雨は降らなかつた。土に鋭い亀裂が走り、野菜の芽は遂に出なかつた。米は、青田が黄色く変つた。わずかに綿だけがヒヨロヒヨロと苦しそ
うに延びた。

昨年の六月に綿を売つて幾らかの金が入つたきりだつた。今年の豆は食べるにも売るにも足りない。カ
ンテラを点す石油も買えなくて、どの小屋も日が暮れ
ると暗くなつた。

十二月の三十一日の午後彼は独りで墓参りに行つた。

学校の近くに新墓地の敷地を用意したが、幸いに死

者がなく、この旧墓地にしか墓標は立っていないのだ。

平野川の水車はゆつくりと廻り続けていた。しかし、来年はここで撞く米はなかったのだった。ドラー
ド河に添った共同米作地は黄色を通り越してすでに赤
く枯れ果てていた。

乾き切った風景の中に最初に入植者たちが建てた小屋が黒ずんで散在していた。主を失うと小屋はすぐ荒廃する。座礁し見捨てられた小舟のような眺めだった。大野勝馬が建て、そこで両親が死んだ小屋の傷みが一番早かった。ヤシの割木は柔らかくて扱いやすいが傷みも早い小川の上に作った小屋は丸太の根元が腐って崩壊していた。小川の水かざし少なくなっている
ので小屋は流されもせず潰れた丸木の下をチヨロチヨロと水が流れていた。運平が近ずくとランバリの影が浅い水を下流へ走った。

運平は墓へのゆるやかな斜面を登った。息が切れた。
た。

最初は体を動かすのが大儀だった。体が弱っていた。
た。

墓標の一つ一つに彼は合掌した。移転した家族が骨を移したりしたので当時より墓標の数は減っていた。
それでも五十以上はあった。

荒木謙蔵、荒木クノ、荒木静加と記された三基の前に佇んだ。彼はハンカチを出して鼻をかんだ。――乳が出ない――といって泣いたクノの姿がまざまざと想い出される。死んでしまった母の乳房を吸っていた静加……。

気が狂って最後に死んだ謙蔵……。

彼は墓に頭を下げた。

「わしはこの植民地を閉ずる決心をした。あんたらの死を無駄にしてしまうのだ。どんなことをしても此処を成功させたかった。……しかし、もう駄目だ。雨が降らない。どうにもならんのだ。わしはこれ以上皆が苦しむのを見ておれなくなった」

彼は土下座をした。

「皆……許してくれ」

涙を流しながら彼は墓標の群の一つ一つに詫びた。いつの間にか白い蝶の大群が彼をとり囲んでいた。森の水辺には蝶の群が棲息し、人や動物の血の塩分をしたってむらがり集まってくるからそれは珍しい現象ではないが、息もつけぬほどの蝶に囲まれて彼の視界は白く白く閉ざされた。

彼はつかの間の白昼夢の世界にいた。

「万才！」

「万才！」

と叫ぶ若々しい芦が聞こえる。その声に応えようと
して、彼はハツと我に還った。蝶の群が乱れ、墓標や
背後の森が再び見えた。

夢だった。森の中でみた一瞬の夢だった。

彼は力なく立ち上った。クルクルと蝶は彼と共に移動したが、やがて高く舞い上った。乾き切った白っぽいザラザラとした空に、蝶たちの姿はすぐまざれてしまった。

大正八年（一九一九）一月一日。

「明けましておめでとうございます」

全入植者の家長や主だった働き手が集まって来た。
新年の挨拶を交わしたあと、運平は、

「皆に言いたいことがある」

と改まった。

「この植民地を拓くために今日まで頑張って貰って平野は心から感謝しています。しかし、今やどうにもならない処まで来てしまった。今日は正月だと言うのに、我々はご馳走どころか食べるものも無い。三年半の苦労も遂に実を結ばなかった。わたしはこれ以上の苦労を諸君にかけるのは、とうてい忍び難い。この植民地を放棄する訳では決してないが、どうかもう一度コーヒー園に戻って再起の機会をつかんで欲しい」

皆は答えられず黙っていた。

「わしの不徳の至りだった。諸君にひどい苦勞をさせた。深くお詫びする。どうかコーヒー園へ戻りもう少しは人間らしい生活をしていただきたい。お願いします」

運平は深く頭を下げた。

「平野さんはどうするつもりですか？」

畑中が訊ねた。

「わしは此処に残って、死んだ者たちの墓守りをしながら、皆が戻って来る日を待つつもりだ」

「平野さんがいるかぎり私も此処で頑張りますよ」

畑中は言った。

「私も残ります」

前田友吉、久保友一、山本佐太郎なども口々にそう言った。

「そう言ってくれるのは嬉しいが、諸君の将来を考えるとやはり一度退去してもらいたい。子供たちに食べさせるものもない諸君の姿を見るに忍びないのだ」

訴えるように彼は皆の顔を見渡した。

「平野さん」

と山下が言った。

「あなたが此処にいてくれる限り、私達は出ません。初めは金を儲けるつもりで此処の土地を買いました

が、今はそうではないのです。仲間が死に自分たちの汗が浸み込んだ土地に花を咲かせたい一心です。移民にだって移民の意地がある。私は残ります。平野さん、いつものように、オイ山下此処にいる、と怒鳴って下さい」

山下が言い終ると、皆は一斉に同意して運平の周りに集った。

「平野さん！やりましょう」

「こんなのは苦労だなどと思っていないです」

「私は残ります。野垂れ死になる覚悟はとうにできます」

もみくしやにされて運平は何か言おうとしたが言葉にならなかった。

「あゝあ……あ」

ありがとうという一言も唇がふるえ、彼はそのまま声を放って泣いた。

金策に運平はサンパウロへ行くことにした。平年作ほどではないが六月に綿だけはとれそうだった。それを先売りして金を手に入れるしかない。この旱魃では綿の値も高いだろう。今売ったら足許を見られ幾らにもならない。苦勞して育てた綿を捨てるようなものだ。売りたいなかった。しかし、明日の食い物がない

のだ。背に腹は換えられなかった。子供たちにせめて一冊のノートぐらいは渡したいと言う親もいる。運平は全員にはかつて、結局、綿の先売りをすることにした。

ペナナ訳に出てバウルーで一泊するのは、いつものコースだった。ノロエステ鉄道線は一日に二便に増えていた。開拓が進んでいるのだった。

バウルーの定宿で運平はバツタリと鈴木貞次郎に逢った。

「やあ、久し振りだ」

日に焼けた鈴木は運平の手を握った。

「また、何で此处にいるのだ？」

運平が訊ねると、

「これだよ」

鈴木は指先で金のゼスチュアをした。

「金策か？」

「そうだ」

「わしもだ」

運平は苦笑しながら言った。

上塚周平が再び日本から戻って、去年の五月にイタコロミー植民地を開いた。同じノロエステ線の、ペナ駅より更に先のエイトール駅付近だった。鈴木その他に、香山や間崎、坂本たちが中心になって建設中だっ

た。運平も訪ねて行ったことがある。地味の良い処だった。

「上塚さんの友人の菊地恵次郎という男が日本から三万五千円持って来てくれた。上塚さんは土地の入金に三十コント費ってあとの二十コントで間崎に二十八家族集めさせて米を植えたのだ」

と鈴木は言った。

そこまで聞けば後は分る。棉だけはどうやら助かったが、稲が早魃に遇ったらひとたまりもない。

「どんな高利でもいいから金を借りて来てくれ、と上塚さんに頼まれた」

「そうか」

「あんたはどこへ行くのだ？」

「サンパウロで綿を先売りするつもりだ。どうだ、ついでだから一緒に行ってくれんか」

「行ってもいいが……」

「頭が利かなくなつて、細かい計算ができなくなつた。付いて行つて貰えば、少しは有利な売買ができて助かる」

「……」

「ぜんぜん計算ができなくなつたのだ」

鈴木は痛ましそうに運平を見た。

「あまり飲まん方がいいのじゃないか」

「わしはもうダメさ」

「そんなバカな。これからだぞ、おれたちの人生は」

鈴木はおこった様に言った。

二人が定宿のロビーで話していると、夕暮れの街路にヒヨロヒヨロした影が浮んだ。

「あ、上塚さんだ」

鈴木が腰を浮かした。

結局、運平は独りでサンパウロへ発った。いくらか金のあてが出来て、上塚と鈴木はイタコロミーへ戻ったのだった。

別れるとき、鈴木は、

「体が第一だからな」

と言つて何度も運平の手を握った。

サンパウロで滝沢仁三郎を通じて商人と先売り契約を済ました。今年は値がいいので予想収穫高の三分の一を売っただけで当座はどうやらしのげそうだった。

植民地へ戻ると、体がだるく節々が痛かった。旅行疲れだろうくらいに思い、気にとめていなかったが、急に発熱した。サンパウロで流行っていたスペイン風邪だった。

「平野さんが悪い」

風邪くらい病気と思わない人々も、見舞いに行つて

驚ろいた。呼吸が苦しそうだった。

イサノは冷たい水を汲んで来ては運平のほてった額を冷した。

彼女が外へ出たとき、運平は枕元の彦平に何か言っ
た。声がぜいぜいして聞きとりにくかった。

「……イサノとジョゼを頼む」

と運平は言っていた。

「兄さん。そんな弱気を出さないで下さい」

彦平は兄を励ました。

「頼むぞ、彦平。頼むぞ」

「ええ、心配しないでください。それより、早く直る
んです。なに、すぐなおります。この風邪はパツと熱
が出て、すぐ直るそうですからね」

運平は頭を振った。

「もう終りだよ。ジタバタせん。スペインへ行こうと
夢みて日本を飛び出したわしが、ブラジルの山の中で
スペイン風邪で死ぬとはな……」

彼は低く笑ったようだった。

山下や畑中が見舞いに来たとき、彼は言った。

「白いものが見える……家の壁か……わしはどこかへ
行っていたらしい。この植民地をもっと大きくしてく
れ。もっと、もっと大きくしてくれ」

「はい」

「向うの森も皆で買ってくれよ。わしの夢だ。……豊かになってくれ」

運平は目をとじた。

「白いものがまた見える」

放浪したい魂がスペインへ行っているのだろうか。墓標の囲りを乱舞していた蝶の群を見ていたのだろうか。

運平が死ぬとは誰も思っていなかった。大石という若者が見舞いに来たとき、家は無人だった。

「平野さん、どんな具合ですか？」

何気なく声をかけてのぞくと、運平の様子が変だった。

「平野さん！」

大声で叫んだが、わずかに唇が動いただけだった。大石に手をとられたまま、まもなく運平は息をひきとった。

しめやかに通夜が営まれ、翌日彼の遺体は新墓地に埋葬された。

「静岡県小笠郡出身

平野運平

大正八年二月六日死

享年三十四才」

と書かれた一本の木が建てられた。

（補）

これで平野運平の物語は終る。

これは史実である。史実を作品化する場合、「歴史そのまま」か「歴史離れ」をしてフィクションを加えるべきか、という二者択一を作者はするわけだが、ここでは事実だけを書いた。登場人物も全て実名である。

移民の歴史は知られているようで、細部になるとほとんど知られていないというのが私の実感である。それを正確に知って貰うために、作品が窮屈になるのを承知で知り得た事実のみを記した。

オットーが運平に煙草を持たしてピストルで狙撃する西部劇もどきのエピソードなど本当にあった話である。

ただ、エピソードの日時や場所がハッキリしない場合は、前後の関係から筆者が推定して書いた。ついでに言えば、オットーがピストルを撃ったのは、土地を見せに行く山径でだったかもしれない。この場面は叙述がやや変えてある。

入植当時のマラリヤの犠牲者は六十余名とも七十余名とも伝えられているが、今回は正確な数を確認でき

なかった。ここには、私が調査して死亡日時までを確認できた四十三名の名を哀悼と鎮魂の心をこめて誌した。

平野植民地に入植した人々の苦難は今日からみると異状なほどであるが決して特殊な例ではなく全て開拓者が味った苦難であつた。グアタパラ農場があつたモジアナ地方から移つて、平野植民地を皮切りにノロエステ線を拓いていった開拓者たちの回想を聞くと、大正期から昭和初期にかけて全ての人々が平野植民地と大同小異の体験をくぐっている。私は特異な例としてではなく、典型として平野植民地を選んだのだ。

平野植民地は、運平の遺言を守り、昭和十年に隣接した土地に更に三八五〇アルケール買い足して栄えた。森が畑に変わるにつれてドラード河の水量も増えた。今は四、五メートルの河幅になった。

松村総領事に運平が借りた金は、後に村人たちが出し合つて日本へ送った。松村貞雄はすでに亡く菊子未亡人から「志だけをいただく」という手紙と共に金は返送された。その金は松村奨学金として今日も生きている。

かつての第八区に、森を背後に負つて墓地がある。二月六日の運平の命日には「平野さんはこれが好き

だったそうだ」と言って、人々はピングガを黒い墓石にかける。

（終）

聖人たちの湾

サルバドール港には三百六十五の寺院がある。

急峻な地形だったから、曲りくねった石畳の坂道を黒人女が頭上に品物をのせて上下するのが珍らしかった。

港に面して下町があり、三十メートルほどの高さの断崖が山手と区切っている。設計技師の名をとってラセルダと呼ばれる大エレベーターが、下町と山手をつないでいる。

トランクをさげて下町を歩くと、暑くて私はたちまちぐったりとしてしまった。

木蔭に立ちどまるとウソのように涼しい。海からサラサラした微風がたえまなく吹いてきて、清潔な木綿の肌ざわりで私を包んだ。これが有名な北東伯の微風（ブリーザ・ノルデイスティナ）か、と思いながら、私はそこに坐り込んでしまった。これほど心地よい木蔭をはじめて知った。只じっとしているだけで私の皮膚

全体に濃い快感が行きわたるのである。

私は、再び歩き出す気をすっかり失くしたように、坐っていた。この地方の人間が「月曜日は休みの次の日だから」と億劫がって働きたがらぬ氣持が分る。

私は宿屋の前に立って外観を一わたり吟味してから、中へ入った。平屋だが天井が高いので四角い箱のようだ。ホテルというよりは下宿屋である。

動いた影に向って、私は「娘さん」と呼びかけた。影がとまった。目と唇がよく動く感じの若い黒人の女中だった。

「主人はいますか」

「ちよつと待つて」

白木綿のふわふわしたスカートをはいた肥った女が、廊下の薄暗がりを押しひろげて現われた。

「今日は」

「今日は。一週間ほど泊りたいけど部屋ありますか。一人部屋のほうが良いけど」

「うちには一人部屋はないのよ。空いている部屋があれば一人で入れてあげるけど、いま全部ふさがっているねえ：あんたの同国人が泊っているよ。その部屋になさい、話が合うだろうから」

「私の同国人？」

「そう、日本人。サンパウロから昨日来たよ。あんた

もサンパウロかね」

「いや、リオ・デ・ジャネイロから」

「旅商人かねえ」

「教会を見に来たんですよ。それと黒人呪術も」

「カンドンブレー！、それならドナ・ジョアナがよく知ってるわ」

トランクに身をかがめながら、女中は女主人を見上げて云った。

「ドナ・ジョアナは集会の責任者なのよ」

私は娘の右肩に私の右肩を押しつけて、「サラバ・メウパイ」と云った。それは信者のあいさつなのだ。娘はトランクから手をはなすと、左肩を私の左肩にしつけて「サラバ」と云って笑った。私の両肩に黒人の肌の滑らかな感触が残った。

「ヒヤー、あんたは信者かね！、日本人の信者なんて一度も見たことはねえだ」

女主人が叫んだ。

「いや、興味があるだけですよ。よく見に行きます。でも、リオやサンパウロの呪術はもの足りないなあ」

「そりや、あんた。このバイヤ州は本物ですよ。ここがほんとのブラジルなんだから」

「へえ、そうするとリオやサンパウロはブラジルではないみたいだ」

「あそこはお金をかせぐところですよ。働くだけ……働くだけ……」

黒人呪術には雑多な精霊が祭られている。聖ジョージや聖アントニオなどキリスト教の聖人達、マホメッド。布袋和尚もどう間違ったか「ブツダ」と呼ばれて飾られる。私はリオで、聖像こそなかったがピタゴラスの霊がまつられている集会を見たことがある。

そして、一きわ大きく中央に祭られるのはパイ「父」と呼ばれる粗末な白シャツにパイプを手にした白髪頭の黒人像だった。

それらの像は、現在では石膏に彩色した量産品が使われているが、この辺まで来れば古い木像もある筈だった。私はできればこの旅行でそれを手に入れたいと思っていた。

女中は食堂に近い一番奥の部屋のドアを開けた。ベッドが三つおいてある。電球が一つ、小さなトランクが一つ。

「日本人てどんな人？」

「おじいさんよ。見物に来るようではないし、仕事でもないらしい。今月は議会だか図書館だかへ行くって云ってたからエライ人かも知れないわ」

「フーン、何だか知らないけど、年寄りが一人でよくサンパウロから来たもんだなあ。リオからでさえ丸二

日もバスに揺られてうんざりしたのに。もつとも飛行機ならはやいが」

「飛行機に乗るほどお金持ちには見えないわ。第一ここにはそんなお金持ちの人、泊らないでしょ」

「僕も金持ちでなくて済まないな。だけど宿賃とチップぐらいはあるよ」

「チップなんていいのよ」

私は五コント札を女中に渡した。彼女は目をまるくして札を云った。リオでは普通の食事をすればそのくらいはかかる。身をすくめるように頭を下げた女中を見て、私はちよつと後めいた気がした。私は毎日、あまり無造作に金を受取ったり払ったりしてなかったか。私はウインドー装飾兼画商のような中途半端な仕事をしているが金は差しさわりなく入って、そして出た。しかし、よく考えるとアイマイな仕事、アイマイな金だった。いづれはちゃんとした美術批評の仕事をしたい、というのが私の唯一の希望である。

シャワーを浴びてから私はシャツを着たままベッドに横たわった。身体の底から旅行の疲れが浸みだすよううで外出をやめて目をつぶった。

人の気配に目覚めた時、室内は暗かった。部屋に入ってから壁のスイッチをひねるまでの時間が老人く

さく長かったので、同室者が帰ってきたのだと分った。カチツと音がして黄色い光の中に私はその男を見た。男があまり年をとっているので私は驚いた。

長年労働できたえたらしいガッチリした体格をしているが、ふわふわと漂うような頼りなさ、もどかしさが、ほんの一步の動作の中にも見えた。――丸刈り頭。カーキ色のシャツとズボン。灰色のネクタイ。たてじまの背広――それは話にきいた初期移民の典型的な服装だった。

老人は犬が相手を識別するように、私をうかがっていた。

「ぼく江藤と申します。よろしくお願いします」

「ほう、どっから来なすった」

「リオからです」

老人は自分のベッドのはしに腰をおろした。

「ブラジルは長いんけ」

「六年です」

「そうけえ」

「おじいさんはどのくらいですか」

「六十年じゃ」

「えっ！」

ブラジルで日本人の初対面の挨拶は先づ「おたくは何年？」と聞くのが普通で、私はまるで前科者同士の

ようだと滑稽に思っていたが、この時はそんなことを忘れて身をのりだした。

「六十年ですって、そうすると第一回移民の笠戸丸より三年も前ですか」

「そうじゃ」

「失礼ですけど、お幾つですか」

「八十三になるな」

私は息をのんだ。

八十三……いくら元気といっても、そんな高令で何しにサルバドルくんたりまで来たのだろうか？

「まだお名前うかがっていませんが」

「鈴木直次郎と云うが」

私はその名に記憶があつた。先年、日本政府から海外功労者として贈られた勲章を「金なら要るが勲章はいらん」とつき返して総領事館を困らせたという新聞記事が浮んだ。

「お名前は存じています。しかし、その鈴木さんがどうしてこんな処におられるんですか」

老人はちよつと私を見詰めた。それはこの若い男に自分の話をする価値があるかどうか見定めるようなあんばいだった。老人の目は決して澄んではおらず黄濁した感じだったが、見詰められていると強く光っているようだった。

……私はどうやら合格したらしい。老人は口をひらいた。

「あんた、前田十郎左衛門のこと知つとるかな」

「いいえ」

私の知らない名前だった。

「前田は日本人で最初にブラジルで死んだ男よ。このバイヤに埋葬されとる（老人はサルバドル市を旧称のバイヤで呼んだ）明治三年のことだ」

老人は自分の過去を語るように話した。少し低くぼそぼそした声だがはっきり聞きとれた。

「前田十郎左衛門は薩摩藩士だったがな。明治二年に兵部省に海軍操練所が設けられると、各藩から貢進生を募集して、前田は薩摩藩から選ばれて操練所へ入ったのだ彼は外国留学を希望して願い出て許されてな、伊予藩の伊月一郎と共に三年間の英国海軍兵学校留学を命ぜられた。明治三年世界一周中の英国遊撃艦隊に便乗して英国へ向った。フラガタ型二隻、コペルタ型一隻の艦隊でな二人はフラガタ型の旗艦リヴァプール号に乗つとった」

私はそういった船型など勿論知らなかったが、横浜港の浮世絵を想いだして想像できた。犬をつれた紅毛人夫妻が散歩している背景に細い煙突やマストを何本も立てた蒸気船が摺られていた。同じような船はブラ

ジルの古い銅板画でもよく見かけた。頼りないはどう
すい煙を二三本の長い煙突からなびかせている。古風
な透視画法のせいで風景は広々として、静かで淋しい
気分の絵だった

「英国艦隊は太平洋を越え、ホルン海峡を廻って大西
洋に出て英国へ向う途中、ブラジルのバイヤ港に入港
した。何故バイヤに来たかというと、英国の提唱で奴
隷輸入はすでに禁止されとったが、ブラジルは珈琲農
場の労働力が足りるので奴隷を密輸入しとった。英国
艦隊はそれを監視に来たということじゃ。……バイヤ
に入港した時、前田十郎左衛門は切腹して果てた。二
十三だったがな」

「何故ですか。なぜ、切腹したのですか？」

老人は答えなかった。ベッドのふちから立ち上る
と、トランクを開けて、一冊の切抜帳を出して私に渡
した。開かれたページには黄ばんだ新聞の切抜きがは
られている。

「これはリオのグローボ紙の系統の新聞だが、今はつ
ぶれてもうない。一九一〇年に生駒艦がアルゼンチン
百年祭のおりブラジルにも来たが、前田十郎左衛門は
海軍々人だといふのでブラジル人の記者が調べてくれ
た。その時の記事で、前田が死んだ当時のバイヤ港の
新聞ディアリオ・デ・バイヤの報道が転載してある」

老人はその部分を指した。私はそれを読んだ。

『ホンブレイ提督を旗艦とせる英国艦隊は、バルパライゾ港より出航して一八七〇年十月六日当港に入った。この艦に二名の日本青年士官が練習生として乗組んでいる。』

その一人年令二十三才の前田は七日の暁三時と四時の間に、震慄すべき方法で旗艦リヴァプールに於て自殺をとげた。短刀を以て腹部を十文字に切りたる後、喉を数回突刺した。この事実は同艦隊の将校及び乗組員一同を初め、バイヤ市民を深く感動せしめた。

その死の唯一の原因とも認むべきは、同士官が永らくその故国及び家人と離れて望郷の愁いに堪えなかつた為であろう。この不幸なる日本士官の葬式は所要の手続きを了えて、バルウ坂の英国墓地で執行されたが、本人が仏教徒であるためヘブライ人埋葬区域に葬られた』

私は古ぼけた新聞から顔をあげた。

「望郷ですか……」

老人は待ちかねていたように云った。

「あんだ！日本人がそんなことで死ぬと思うけ？ 日本人が」

「……」

私はそういうタイプの考え方をしたことがなかつ

た。

日本人だつて、望郷で死ぬかも知れないし、死なないかも知れぬ。とつきには返事ができず、老人を見たまま黙っていた。老人は激していた。

「そんなことで武士が死ぬと思うけ。しかも、十郎左衛門は作法通りの切腹をしておる。取り乱して死んだのではない」

私が答えなかったので、老人も黙った。

肥った物売り女が通りすぎるように、二人の間を沈黙がゆっくりと去って行つた。それを見送ってから、私は口をひらいた。

「では、鈴木さんは前田十郎左衛門の切腹の原因は何だと思ふのですか」

「何故、かい……」老人は自分に云いきかせるように声をおとしてためらつたが、一気に云つた。

「それが知りたくて、ここに來たんだが」

老人の顔に血がのぼつたようだった。

私はあつ氣にとられて老人を見た。なぜだろうと思つた。年令と距離を思えば、老人の一人旅は常軌を逸している。何故それほどのことまでして切腹の原因を知りたいのだろう。その理由を訪ねたいと思つたが、初対面で立ち入った質問もできかねた。――それ

が知りたくて——と云う前に、老人は一瞬はにかむような表情をして声をおとしたのだった。

私はちがう質問をした。

「遺書はなかったのですか」

「それが分らん。一九〇三年にもブラジルの新聞に前田の記事が出ておったというが、その新聞社はもうない。遺書があつたとすれば、伊月一郎が持って帰つただろうがな。伊月はのちに大佐にまでなつて退官した。東京に墓がある。東郷平八郎たちが董陶をうけたということだが、それほど有名にはならなかったから、彼についての記録もないらしい」

「日本に記録がない、ブラジルにもない、のですか。それでは分らないでしょう。百年も前に切腹した男のことなんか、いくら調べても分らないでしょう」

老人は苦しそうな表情をした。私は少し云いすぎたと思った。老人はひどく一途になにかを思いつめているようだ。

「きのう、図書館へ行ったがな、次の日に市の古文書課長と地理歴史協会長をひき合わせると云うので、今日また行つた。地理歴史協会へ行ったら会長は市会に出とるから市会議事堂へ行ってみい、云われて市会で待つとつたが会えなかった。……日本の総領事の紹介状でも持っていけば簡単に会えるのだろうが、わしは

領事館の連中がきらいでなあ」

鈴木直次郎が勲章をつき返したとき、それ迄の領事館に対する忿懣を洗いざらいぶちまけて新任の総領事を困らせた、という記事を想いだして、私はちよつと笑った。しかし、老人はむしろ淋しそうに、それを云った。孤独な影が頑丈な老人を包んでいた。

「市の古文書課で紹介してくれた司教管区庁へ明日行くが、あそこで何か手がかりになる文書が見つかるかも知れん」

「ヴイスパードですか・・・」

私はトラバリヤール・パラ・オ・ヴイスポ Trab al har para o bispo（司教のために働く）というポルトガル語を連想しながらゆつくり云った。それは “徒労する” という意味だった。

私の脳裡をかすめたその言葉は、老人の懸命な努力に対する否定的な予言に思えた。私は老人が何も知ることはできないだろうと、短かい返事を云い終ったとき、ほとんど確信した。

女中がドアを叩いて夕食を告げた。老人は「おう」と日本語風の返事をして、立ち上るために身をかがめた。

空腹らしかった。私たちは一諸に食堂へ行った。

翌日、私は寺廻りをはじめた。正確には“教会めぐり”だろうが信仰とは無関係に、古ぼけた建物を（廟のような小さなものまである）のぞいて歩くのは、寺廻りと云った方がぴったりとする。

老人はもういなかったもので、一人でカフェーを飲むと宿をでた。しばらく歩くと、港につきあたった。大きな港を見馴れた私には、サルバドル港は古ぼけて淋しい港に見えた。海中にポルトガル領時代の突堤や砦があるそれらは石を魚油でつき固めて築いたものだという。波止場の倉庫と街との間には、線路が敷いてある石畳の大通りがあって、その辺だけがウソのように閑散としていた。No.⑧と記してある倉庫の屋根ごしに船のマストの先端がコウモリ傘の骨のように立っていた。ひっそりとした商館が並び、看板の金文字はほとんど葉巻とカカオの輸出業だった。その通りには濃い小便の臭気がおって海の香りとまざった。

港を一わたり見終ると、私は行きあたりばったりに寺へ入った。扉を閉じている寺もあるが、そういう寺は大して見るべきものもないのが普通だから、私は氣にとめずに進んだ。

サルバドル市で旅行者が先づ足をむけるのはサン・フランシスコ教会である。バロック様式は他の教

会と同じだが、内部が総金張りで豪奢のかぎりを尽しているという。海岸線何レグアと区切って奥の方向は好きなだけという大ざっぱな農地の分割方法をしていた時代のポルトガル砂糖貴族たちが建立した。

私は午前中にその寺を見ようと思つて、時計を見た。十一時だった。タクシーで行くことにした。

山手にあるサン・フランシスコ教会の近くまで来たとき、私は思いがけなく鈴木老人の姿を見かけた。五十メートルほど過ぎてから、私は思いかえして車を停めさせそこでおりた。

老人はかなり大きな教会の隣りの建物から出てきたところだった。階段を降りたところで老え込んでいる様子だったが、また建物に入っていった。

近づいて見ると、その建物も教会で使っているらしいサルバドール市の教会は独立した広場に建つものは少なく、ほとんどが普通の家並みにはさまれて、隣りが商業学校や法律事務所だったりアパートだったりする。

私は内に入った。古い建物は扉が狭いので、急にうすぐらい。老人が背をむけて立っている。受付けの中には眼鏡をかけた黒人の男が、不機嫌そうに坐っている。

「鈴木さん」

「おう、あんたか」

「どうしたんですか」

「ここに古い書類が在るちゅうで来たが、この黒んぼが、そんなものは分らん云うて相手にせんのだ」

私も老人に加勢して黒人と押問答をした。相手が二人に増えたので受付けの男も気になったのか「ちよつと待て」と云って奥へ入った。

暫くすると一人の神父が出てきた。褐色の僧衣を縄で結び、小さなベレーをのせたフランススコ派の服装をしていた。三十四、五の男だが、立派な体格をしていて落着いた態度だった。私より一まわり大きい。

老人は前田十郎左衛門の話を神父にした。そのあいだ私は神父を見つめていた。鼻からくちびるにかけての線の甘い美しさで、私は神父がイタリヤ人だと思った。すると当然、聖フランシスコが住んだアツシジの街を知っているだろう。いつかは行きたいそのイタリヤの街を見るおもいで、私は灰色がかった青い目を見た。神父は注意ぶかく老人の話を聞いていた。

老人が語り終ると、神父は云った。

「お話は分かりました。しかし、ここには異教徒の人の記録はないのです。お気の毒ですがなにも分らないでしょう」

「そういったんですがねえ」

と受付けの男が云った。

老人はうなづいた。何も云い返さなかった。

「仕方ありません。これから前田が埋められたというヘブライ人墓地へ行ってみます。墓地で何か分るかも知れない」

「ヘブライ人墓地？ヘブライ人墓地なんてありませんよ」

「無い？しかし、古い新聞にはそう記してあります」
「それは何かのまちがいです。私は古文書管理の仕事をしていますから過去のことかなり知っているつもりですがヘブライ人墓地というものはサルバドールには存在しません」

老人は信じられない。という風に首をふった。子供がいよいよやをしているようだった。闊くゆるやかな僧衣のひだを前にした老人の、洗いざらして寸の詰ったシャツの袖口が、私には貧しい少年のように見えた。
「私の考えでは」とフランシスコ派の神父は老人を力づけるように云った。

「その人物が埋葬されたのはラザロ墓地以外にはないと思います。ラザロ墓地は古くから異教徒や身許不明の死者を葬ります。おそらく新聞は “異教徒の” と “ヘブライ人の” を同義語に用いたのです」

「異教徒はそこ丈ですね」

「古い墓地としては、そこ丈です」

「それはどこにありますか」

「小さな森と呼ばれる場所にあります」

「それでは、そこへ行ってみます」

「貴方は何も見出せないでしょう」

神父は氣の毒そうに云った。

「何故ですか」

「無縁墓は長くは保存されないのです。どんなに古くても三、四十年もたてば掘り起されて整理されてしまいます。その日本人の墓がまだあるとは信じられません」

老人は一見、無表情に立っていたが、明らかにひどく落胆していた。私にはそれがよく分って、可哀想なくらいだった。

「でも行ってみます。せつかく来たのだから、行ってみます」

「そうですか。地図をかいてあげましょう」

それまで二人の会話をきいていた私は、口をはさんだ

「ありがとう、神父さん。でも地図はよろしいです。私たちはタクシーで行こうと思います。タクシーの運転手ならラザロ墓地を知っているでしょうね」

「彼らは知っています」

私たちは神父に礼を述べて、そこを去った。

食事時であつた。広場の木蔭には半日の労働で堪え切れぬほど熱してしまつた古ぼけたタクシーが、何台も並んでボンネットを開けて停つていた。黒い車は不吉な大きな犬が口をひらいてうずくまつているようだった。付近には運転手たちはおろか、歩く人影もまれだった。爽やかに目覚めた午前は終焉しようとしていた。人々はその臨終に立ち合うのを怖れるように姿を消していた。

「鈴木さん、少し休んで昼食をしてから行きませんか。僕も一緒に行かせてください」

こんな真昼刻に動いているタクシーを探すのは大変だが、それ以上に、おそらく老人の努力の終点であるラザロ墓地に急いで行く気にはなれなかった。

二時頃になれば午後がものうく目覚めゆつくりと動きだすだろう。

なにかをするのは、それからだ。熱帯のねつとりとした午後に老人の執念をすっぱりと陥し込めば良いのだ。あとには日没がやって来て優しくそれを埋めてくれるだろう。

私たちが坐つたカフェ・テリヤからは、港と白い海岸が見えた。海岸は半円型の曲線をくりかえしながら

北に延びていた。曲線と曲線の結び目の突端部には、カーテンの飾り玉のように、砦の遺跡が一つずつ付いている。

大西洋の荒い波が砦に当って砕けているのが、遠目にも見えた。

「鈴木さんがブラジルに来られたのは二十三才の時ですか」

戸外なので、私は老人に聞えるように大きな声をだした。

「いや、二十四のときだった。一九〇五年にチリー行きの船中で皇国殖民会社の水野竜と知りあってな、どうじやチリーなど行かんでブラジルの方が将来性があるぞ、行かんか、とすすめられて一緒に来てしまった。リオのペトロポリス公使館に数人の日本人がおっただけだった。

わしらはサンパウロに行ったが農場を視察して州政府との交渉が済んでもうたら水野も通訳も引きあげてしもうて、わしは一人で残されて奥地の珈琲園で働いた。

まあ、移民の見本みたいなものになったのだな。そのうち、ぼつぼつ日本人も来始めてなあ。あの頃の連中はトルストイ流の人道主義というか理想を持っておって、わしが水野に説得されたのも、そんな点に共

鳴したんだが……あとでは水野を山師だと思うようになった」

「水野さんが山師ですか？」

「日系コロニアの恩人だとか祖人だとか云われている奴らはみんな山師よ。ほんとうの理想主義者はそろって野垂れ死してしもうたがな。……もう馬鹿はおらんよ」

老人の説に全面的に承服する訳にもいかず、反論できるほどの知識もない私は、気軽に相槌をうつ気になれず黙って食事をした。

「文明植民地の石田だつてそうだ。わしと石田と浅野の三人で土地を売りに出したんだがな。わしは北米移民に再移住をすすめに行った旅費が、かかりすぎたと云われて追い出され、石田も中風になって起きられず最後は掘立小屋の中で糞まみれになって寝とったそうだ。浅野だけが植民地の恩人になった。病気の相棒を放っぼって面倒みん理想主義者なんてあるかい。……みんな金を儲けて利口になった。……もう馬鹿はおらんよ」

老人の饒舌はつづいた。私は初めのうち、老人と自分の皿とを等分に見ながら聞いていたが、あまり悪口ばかりなのでだんだん自分の皿ばかり見るようになった。しかし、老人はもう私の反応にはかまわずに話し

つづけていた。老人は怒っていた。異常なほどの記憶力を持っているらしく、年月、数量、姓名が細かくその会話に織込まれていたが、例外なく怒りのしずくをしたたらせていた老人の記憶のタンクそのものが清物桶のように怒りの液で充たされているらしい。老人は自分が最後の馬鹿であると云いたいらしかったが、それなら何故勇ましく野垂れ死しなかったのだろうか、と私は内心で意地悪く思っていた。

おぼろげながら分ったことは、彼が日系コロニアの重要な事業の多くに関係したこと、そして事業が整えられ安定するに従って彼は主流の場からはみ出しいつのまにか無関係になってしまうことだった。それが彼自身の性格によるのか周囲の画策なのか断言はさしひかえなければならぬが、理想と金儲けの両極を激しく揺れながら生きて、そして、そのどちらも手に入らず老いてしまったのだ。驚ろいたことは、そのどちらにもまだ執着しているらしかった。老人の口調はグチの弱きでなく弾効のきびしきで続いている。

理想と金儲けか……：広大な原始林を前にして立った時自分ならどちらを選ぶだろうか、と私は考えた。そこに理想を実現しようとするか、土地からしぼれるだけ金を吸いあげようとするか？私はその問いに答えられない。

私は自分がそんな立場に置かれるなどと考えたことがないからだ。第一、土地を所有しようと思ったことすらない。

しかし、かつての鈴木青年のように半ば以上の偶然が人を原始林の前に押しやって択一を迫ったとしたら？　そう思うと、老人を嗤うこともできない。それほど単純で深い選択を、私は未だ為たことがない。登記を済ませて原始林に辿りつくど、誰でもおこりのように体が震えてくる、と聞いたことがある……

「大体ブラジル人は野菜を食わなかったからの」

老人の声が戻って来た。私は又、老人に注意を集中した。戸外だから、注意を逸らすと低い老人の声は微風にもたやすくまぎれて、たちまち意味を喪うのだった。

「最初に野菜を作った日本人は第一回移民船の鞍谷誠一という男でな。五十なんぼかの男だったがな”鈴木さん北米では日本移民は野菜作りでえらく成功しているそう。私もサンパウロで野菜を作りたいのだが”と相談をもちかけられてな、モツカ区の競馬場の傍に小屋つき畑をわしが世話した。月、二十ミルレースの借地だった。

家族は珈琲園へ行ったが、その男は一人で残って

な、日本から持って来た種子を蒔いた。雨のぐあいがよくて大根やらホーレン草、カブ、白菜など面白いようにできおった。

それからカゴに野菜を入れて街に売りに行ったが、ブラジル人はそんなもの初めて見るから “何だ、何だ” と珍らしがるだけで、誰も買うて食う者はおらんのじゃ。

その頃のブラジル人は野菜など、ほんの二、三種類しか知らなかったからな。……もつとも、ブラジル人のことだけでも云えん。

日本人だつてブタを初めて見た連中ばかりでな “あんなに歩けんほど肥らして、どうする気じやろう” などと本気で云いおったもんだった」

老人はちよつと笑った。笑うといつても、声にはださず、話がとぎれた間だけ私を見ている目が和んでいた。

「誠一という男は毎日、売れない野菜をさげて歩いてきたそうだ。わしは珈琲園の通訳になつて奥地へ行つとつたが、二年はどしてサンパウロへ帰つてくると、その男は氣狂いになっていた。毎日空のカゴをさけて街をうろろ歩きまわつてな。光ったガラスやブリキの破片があると、拾つてカゴに入れる。わしが探しあてたとき、丁度夕方な。男のさげていたカゴに夕日

が当って、ガラスやブリキが真っ赤に燃えとるようだった……。それから慈善病院で死んだ。あの男は何を拾つとるつもりだったのかのう……。」

私は話をききながら、港をみていた。

じつとりと動かぬ真昼の海を見詰めていると、緑の海の中から蜃気楼のように三隻の古めかしい船が浮んできた。英国遊撃艦隊がバイヤ港に碇泊していた。二十三才の前田十郎左衛門の死体のそばに、呆然として、若い伊月一郎が立っていた。伊月は何を考えていたのだろうか。そして、どうやってそれからの留学期間の長い孤独に堪えたのであろうか。

どんな秘密が前田の死にあつたのか、前田は野菜売りの男のように、異郷の生活に狂っただけであつたか。しかし、前田は野垂れ死したのではない。十文字に腹を切って、喉を突いて絶命したのだ。武士が国を恋しがって腹を切るはずがない、と鈴木老人は云つた。確かに、外国留学を自から望んだ青年がたった数カ月の航海で望郷のために命を絶つたのは異常に思える。前田は海軍操練所で室長を勤めていたと老人は云つた。室長に選ばれた理由が指導者的な素質によつてか、秀才だったからかは老人も判断しかねていたが、しっかりした男だったにまちがいないだろうと云うのだ。自分から望んで出発しながら、たった数カ月

で精神錯乱して切腹したとするのは老人の云うように疑がわしかった。

「鈴木さん。前田十郎左衛門は、何故死んだのでしょ
うか」

急に前田十郎左衛門のことを云いだしたので老人は、私が野菜売りの狂気と前田の死因とを結びつけようとしていると男ったらしかった。

「前田も空のカゴを下げておった。しかし、何も入れ
んうちに死んだ……」

「……」

「気狂いが切腹するわけがない」

「……」

「理由があつたのだ」

私は港を見ていた。波止場へ向って小舟が走っていた数人の男が乗っていた。そのなかの背の高い僧侶に見覚えがあるような気がした。

「行きましよう、鈴木さん。ラザロ墓地へ」

私は立っているガルソンに向って、数字をかく手真似をした。ガルソンはうなずくと、勘定を書きつけた紙片を持って歩みよってきた。

“小さな森”と呼ぶからには、昔は小さいながらも鬱蒼たる森があつたにちがいない。墓地はその森の中

かはずれにあったのだろう。

私たちは墓地の門でタクシーを降りた。石灰をぬつたアーチ型の、古風な窓枠のような門の中央に、宝石のようにサラセン模様の青タイルがはめ込まれていて、その青は新らしいすべすべした色ではなく青銅のように重みのある青さをしていた。門の装飾といえ、それだけだった。

老人は中に入ると、全体の見当をつけるように立ち止って左右を見廻した。人影はない。

すぐに小さな広場がある。そこから右手に道がゆるやかな斜面を登って、告別室らしい建物のなかに消えている。広場と告別室を囲む地帯には、かなり立派な墓が並んでいた。その石の暗く重い推積で、私はユダヤ人の墓だと思った。私が思うまえに、一番近くの墓石に彫られた“ジャコブ”という名を、私の目は見ていたのかも知れない。

老人は左へ歩きだした。行手に番小屋がある。この墓地で、私は何も口出しすまいと思っていた。私は遠くから老人を見ているだけにしよう。それが、一人でサルバドルまで来た老人への礼儀のように思えた。

老人の呼ぶ声に応えて、番小屋の蔭から黒人の姿が現われた。粗末な白ズボン、白シャツ、まっ白な頭髪がちぢれている。黒人呪術の「父」のような老人だっ

た。六十才ぐらいだろうか。鈴木老人はつばの狭い麦ワラ帽子を被っている。無帽の墓守り老人は向いあつて立った。

墓守りが首を振っている。鈴木老人がなにか云う。墓守りは又、首をかしげる。それから、やはり首を振る。

今度は墓守りがしゃべっている。話の合間に私が立っている広場の方を指す。老人は墓守りと並ぶようにしてこちらを見る。墓守りはそれから、告別室の背後の荒れた地帯を指す。ぐるっと円をかいてから、今度は直線で区切るように、全体の三分の一ほどの番小屋をも含む地帯を指した。鈴木老人はうなずいている。それから、荒れた地帯へ向って一人で歩きだした。墓守りは見送っている

私は墓守りに近づいた。

「今日は、じいさん」

「今日は、若い人。あの老人と一緒にかね」

「うん、あとをくつついている」

「何も見つからんよ、わしの若い頃、わしのおやじはやはりここの墓守りだったが、わしは港で働いとったが、その頃、日本人の墓を探しに来た者がいた、と話していたことがあったがな」

「ふーん。その探していた人は日本人かね、ブラジル

人かね」

「さあなあ、わしは忘れてしまった」

「それで墓はあったのかな」

「さあなあ、わしはおやじが日本人の墓と云ったのを憶えているだけさ。その頃おやじは日本人など見た事もなかったからな。わしは港で働いておったから、見たことはあった。わしのおやじならその墓のことを知っとただらうがなあ。わしは知らん」

「何か覚えていないかなあ」

「何も覚えておらん」

私は墓守りを見ていた。墓守りは考え込んでいた。暫くして、私はまた云った。

「何か想い出さないかな」

「：なにも想い出さない。わしのおやじからは何も聞かなかった」

私は小広場へ戻った。その手入れのとどいた一帯は墓守りに訊すまでもなく、ちゃんとした家族が生存している墓だと知れるが、それでも私は一つ一つ墓碑銘を読んでいった。J I U R O Z A E M O N M A E D Aというローマ字が脳裡にあって、私は絵合せをするように、石の表面をたどって歩いた。石に彫られて実在する人名と、私が符牒のように持ち歩いている人名は決して重ならず、混乱した二重の綴りになって、私

の眼底にかすかな痛みの感じを与えつづけた。視覚を休めるように、時々私は墓ごしに遠くの老人を見上げた。

老人は一番上から始めて、石碑や木の十字架の一つづつを仔細に検分していた。八十三才の老人の背は末だ少しも曲っていなかったが、老人は腰をうしろへつき出すようにして前かがみになり墓標に見入っていた。

暑かった。サングラスが鼻梁に当る部分に汗がたまったので、私はハンカチを出し、サングラスを外した。サルバドールの土は砂のように白い。地面は熔けようとするガラスみたいに光っていた。突刺さるような白い痛みを感じて、私はすぐ目をつむってしまった。サングラスをかけていない老人は随分目を痛めるだろう、と思った。

砂のような土は水を吸うが、光は吸わない。白い地面に行き場のない光が溢れていた。

手入れのとどいた一帯を見終った私は、ひざまで涵す感じの光の洪水の中を、老人の方へ登って行った。

老人は背広を手に持っていた。カーキ色のシャツの背中が汗でぬれている。体に密着した肩の辺がひどい汗だった。干からびた老人の軀をしぼりつくすほどの水分だった。

「鈴木さん。何か見つかりましたか」

「ないのう」

「僕は下の方を一応調べてみましたが、ありませんでした」

「あそこにはありませんだろ」

老人はそう云いながらも、次の十字架をのせいた。素木の表面に小さな十字印につづいて死亡年月日が記されているが、もう読みにくくなっている。しかし、大体の見当はついた。十字架の群れは道というほどのものもないゆるやかな斜面に、“整然”と“乱雑”の中間ぐらいの纏りのつかない印象を与えながら並んでいた。二つおきか三つおきぐらいに空地になっているからだった。

「少し休まれたらどうですか」

「いや、見てしまおう」

老人は体をのばして、先へ進んだ。

私は独りで木蔭に腰をおろした。葉の少ない痩せた木なのでそれほど涼しくはならなかったが、それでも直射日光は幾分やわらげられた。トゲのないサボテンの葉肉のような雑草が、ところどころに生えている。私は組んで膝にのせた両手にアゴをうめるように休ませながら、靴先の雑草を見ていた。耳たぶのように厚みのある葉が地を這う茎にいくつも付いている。同種

の雑草がソバカスのように白い地面に散っていた。

女の背中を見るように私はゆるやかな斜面を眺め、そこに生えているまばらな雑草をたどってゆく。その先に老人が立っていた。私の視点は低かったから、立ち昇る陽炎の厚みが老人の下半身をすっかり涵していた。水蒸気などひとかけらもない。光と空気が蜜の濃さでゆがみ屈折した中に、老人の足はたえまなく揺れ、そして少しずつ私から遠ざかった。十字架の群れもゆれていた。私の見ている世界は、音もなく燃えているのか。純粹なアルコールの白昼の燃焼のように色もなく燃えているようだった。そのゆらめきは地上の生命が揮発している現象のようにも見えた。前田十郎左衛門の軀や十字架も、このようにして既に地上から燃えつきてしまったのではないか、と私には思えた。

私は老人から目を逸らして丘の頂きを見た。十字架のむこうに、空が拡っていた。なに一つ屋根や樹木や尖塔の切れはしは向うがわからのぞいていない。ただ空だけが見えた。私は子供の頃からそういう風景の向うがわには海が拡っていると感じた。長い切り通しや坂道の頂点の明るい空は、斜面の向う側にゆったりとひろがっているであろう海の反映のように思われて、海を見る期待に急ぎ足になった。しかしその期待はいつも裏切られた。

坂道や切り通しを登りつめてみると、その向う側にも今まで通って来たようなゴミゴミした家並や、同じような退屈な風景が続いているのだった。

私は十字架の間を登っていった。登りつめて、あやうく声を挙げそうになった。向う側の斜面をまばらに家が落ち延びていて、その向うに遠く、緑色に輝く海があざやかに拡っていた。漁港が見え、沖には島々が散らばっていた。“聖人たちの湾”だった。サルバドル市は大西洋と、湾を区切っている大きな岬の先端部を占めている。

私は暑さも忘れ“聖人たちの湾”を見ていた。荒々しい大洋と対照的に、静かな湾の風景には心が和むものがあつた。血をさわがせ遠く希望をはしらせる昂ぶりもないかわりに、そこには心が安まる静かさがあつた。前田十郎左衛門はこの浜を見ないで死んだのだ、と不図私は思った。十字架の間を登っている時、坂のむこうに海が見えるかどうか私は無意識の賭をしていたのだ。海が見えた瞬間、私の意識の表面に噴きだした感情は説明しにくい。期待と現実との鮮烈なかいごうの中に自分の存在が溶けてしまうような目まいの感じとも云えるし、自分の体の中に視覚を通して賭の景品のように海が入り込んで充ち充ちてしまうような感じであるとも云える。数カ月の間、自殺に向って一直

線に航海して行ったような前田十郎左衛門が “ 聖人たちの湾 ” を私のような出会い方で望見したとしたら、この湾の光景は二十三才の若い心に何らかの屈折を与えはしなかっただろうか。太平洋を横切り、ホルン岬の荒れた大西洋に入り港に着いた明け方に自殺した若い侍の心を哀れに私は思った。

私はうしろを振り向いた。老人は最後の列を調べている。私は墓標の間をななめに通って、一直線に老人に向って斜面を降った。近づく、老人のひたいの皺のあいだは塩が乾いて、まばらな白い筋になっていた。私は老人が調べた墓標を見ながら歩いた。

INDIGENTE † 1938 No. 2306 |

JOSE FRANCISCO AVARCANTA † 1945 |
MARIA DE FATIMA GAGO † 1940 |

老人は端の十字架のまえに立っていた。私はそれを読んだ。

INDIGENTE (無名) † 1938 No. 2513

それで、墓は終いだった。私たちは斜面を見上げた。

老人が一つ一つ数えるように調べてきた墓が、空のこちら側に並んでいた。さつき私が休んだ木が一本、あいかかわらず人影はなかった。ひどく単純な光景だった。しかし私は、その向うに静かな緑色の海を見てい

た。

「……百年も経つと、何も残らんろう。百年どころか、五十年もたてばみんな消え失せるわ」

「私は丘の頂上で、海を見ました」

「聖人たちの湾だな。あそこには四百ばかりの島があるというがな。危険な大西洋を越えて辿りついたポルトガル人は、あの湾に入って安心したろうが、……島の一つ一つが聖人たちの姿のように見えたのかも知れんろう」

「前田十郎左衛門も聖人たちの湾を見ればよかったよ
うな気がしたのですが、私の感傷にすぎないかも知れません。思いがけなく美しい湾を見たものですから。
六日に入港して七日の明け方に死んだのですね。六日
になにかあったのでしょうか」

「……」

「航海中に死ぬ決心をしていたが陸を一目見てから死
にたかったのでしょうか。しかし望郷などで気がおか
しくなつて自殺する場合は、大洋の途中が多いとい
うことですね」

「……」

老人は答えなかった。私は彼が疲れているためだと思
った。老人の目も赤黄く濁っている。二つの大洋を
渡つて果てた前田十郎左衛門とこの老人はどこか似て

いた。

前田十郎左衛門が “ 聖人たちの湾 ” を見なかったように老人も荒海のような原始林にいつも向いあつて生きてきただけだった。原始林が拓かれ実りを約束する頃には老人はいつもそこに無縁な人間になっていたのだから。それにしても何故これほど老人が前田十郎左衛門の死因を明確にしたいと執着しているのか、私には納得できなかった。しかし、若し、表面的には失敗者のような老人の今日迄の生き方が意味あるものとしたら、老人は初めて無意味な行動をしているので、若し、老人の今日までが無意味だったとしたら、彼は初めて意味ある行為をしているのにちがいない、と私には思える。

しかし、老人のブラジルでの六十年の生活の意味、もしくは無意味、を推しはかることは現在の私にはとうてい出来ない。私は国際間の秩序のルートかち一步もはみ出さずに怠惰に近い六年をリオ・デ・ジャネイロの一隅で送ったに過ぎないのだ。

私たちはユダヤ人の墓石の間を通って、広場に近い木蔭で休んだ。

「墓守りにあいさつして来ます」

私は黒人に礼を云いに行った。墓守りはパッシェンシアと云って私を慰めた。それは直訳すれば “ 堪えな

さい”というような意味である。私が戻って来るのを見て、鈴木老人は立上ろうとして、不意によろめいた。そのまま崩れるように腰をおろした。私は駆けよって上体を支えた。息が苦しそうだった。

「大丈夫ですか！鈴木さん」

「……」

「大丈夫ですか」

「……急に、立とうとしたんで、ふらついた。……大丈夫じゃ」

老人の息が静まってから、私は老人をそこに残してタクシーを探しに出た。五分はどして戻って来ると、老人はすっかり回復したようだった。

「やはり、今日は疲れたらしい」

車の中で老人は云った。

「あまり無理するからですよ。もっとゆっくり調べれば良いんですから」

「そう幾日も泊っておれんじやけ。明日は市役所へ行ってみよう。教会や図書館には何もない。しかし、バイヤの市役所は古いからの」

「まだ行くんですか」

私は（何もありますん）という言葉をもみ込んだ。「なに、このくらいのことまでこたれはせん」

私は感心するよりもむしろ呆れて老人の横顔を見

た。

車は街に戻った。再び大西洋が見えた。古いタクシーの車体は石畳の凸凹の一つ一つを忠実に乗客に伝えながら、曲りくねった坂道を降って下町に入った。

「今日はもう休まれるでしょう」

「そうしよう」

私たちは宿の前で降りた。老人の顔色は少し悪かったが、動作は平常なので、私は付き添う必要はないと判断した。

私は再び、タクシーにもぐり込んだ。狭い道を進む。

三階建てぐらいの家が隙間なく並んでいて思い思いの原色に塗られている。鎧戸付きの細長い窓が無数にあつて狭い家幅なのに六つも窓を装飾的に並べた家もある。それらの窓枠は白か、でなかつたら壁の色と強い対照をなす色に塗られていたから、全体の色彩の氾濫はすさまじい。五世紀も続いている街は古びていたが、その古び方は苔や木蔭の湿気や紙魚や緑青などがつくりだしたのではなく、太陽の光りそのものが埃のように堆積して古びた感じだった。

「お客さん（パトロン）。これから何処へやりましたよう」

「海岸へ連れていってくれ。イタポアンは遠いから、

それより近い海岸でよい。とにかくヤシの林の中にレストランがあるような処がいいな」

「パトロンは詩人ですかい」

「腹がへつてるだけだ」

「ハハハ……」

運転手は私が気詰りな客でないと思ったらしく呑気に唄いだした。

「おゝ風よ！吹いてくれ。風よ、吹いてくれ。……風は帆を運び、帆は漁師を、漁師は魚をはこぶ。魚は金をはこんでくる。……あゝ風よ、はやく吹いてくれ」

ハンドルによほどアソビがあるらしく、彼の太い腕は調子をとるようにハンドルを左右にゆすつているが、車はまっすぐに走っている。小帆船の舵をとつてゐたいたった。

その夜、かなり更けてから私は宿に帰った。私の過した戸外の空気には夜更けの重さはなかった。空気はそつとつむつたマブタの接線のように暗く軽くあたたかなままに更けた。吹きつけるたえまない微風は、海の吐息のようだった。巨大な女のように、体温を放ちながら海は横たわっていた。

私は部屋に入っても電燈をつけずに、ドアの隙間からもれる廊下のかすかな光で着換えをした。老人は

ぐっすり寝ていた。イビキが高いと思ったが老人の日常を知らないので、そのイビキが正常なのか異常なのか判断できなかった。しかし不規則ではないのでそれ以上、気にとめなかった。部屋の空気はむっとしている。窓を上げると微風が気持ちよいのだが、海の風だから風邪をひきやすいということだ。私は本を窓において二百ページのすきまをつくってから、ベッドに入った。酔っていた私はすぐ眠った。

朝、私は老人のうめき声で目覚めた。私は短い夢を見たのだが、覚えていない。夢のなかの人物の苦しみと老人のうめき声とが重なっていたのは確かだ。板戸のすき間から光線が射し込んで、海の底のように部屋は明るんでいた。私はとびおきて老人を見た。

老人は完全に病人だった。ベッドの上で、その軀は心臓を囲むように半円形にちぢまっていた。心臓を押し出すように軀をのばしかけては、ウツとうめいて苦しそうにちぢまった。

「鈴木さん！どうしたんですか。鈴木さん！しっかりしてください。今、医者を呼んできます」

私はズボンをはきながら廊下に出て、女主人を呼んだ

「ドナ・ジョアナ！ ドナ・ジョアナ！」

「何がおきたの？」

「じいさんが病気なんだ。酷く悪い」

「マア！ 可哀想に。すぐ救急車を呼ぶから」

「そうしてください。心臓の辺が痛むらしい。呼吸が苦しそうだと言明してください」

女主人が駆け出して行くのを見送って、私は部屋へ戻った。女中が私のあとからついて来た。

「鈴木さん、すぐ医者が来ますから。苦しいですか」

老人はかがめたあごを動かした。

「どんな手当てをしたら良いのか分らない。濡らしたタオルを持って来てくれ」

「ハイ」

女中はすぐタオルを持って来た。私は老人の蒼白な顔を拭いた。そんな気休めのようなことのほかには、私にできることはなかった。老人がうめくたびに、「可哀そうに！可哀そうに！」

と若い女中は泣き声をだした。それを聞きながら、私は腹が立っていた。老人にも、自分にも。八十三才になってバイヤ州くんたりまで一人で来てあんな無茶をすれば病気になるのが当り前だ。

私もうかつだったと思う。炎天下を歩いた老人の肩には私などない頑丈な感じがあって、私はその鍛え上げられた外観にただ感心していて、その中に隠れて

いた脆さに気付かなかったのだ。

サイレンの音が入口に停まると、すぐに、頼もしくなるほどすぐに、二人の医者と運転手らしい男が入って来た。

私は老人が短かい診察のあとタンカで運ばれる間に、パジャマをシャツに変えて、ズボンのポケットにハンカチと金を入れ、大急ぎで顔を洗った。顔の前面をタオルで一拭きしただけで、私は救急車に乗った。ドアが閉められ、外界は丸まどだけで私とつながった。街の色彩がサイレンを伴って過ぎて行った。顔の拭き残した水分が乾いていくのを感じながら、私は白いシートにくるまれた老人を見ていた。白い色がかえって不吉な感じだった

診察室の外で私は医者に聞いた。

「病気はなんですか」

「アンジーナ・ペクトーレスらしい」

「アンジーナ・ペクトーレス？」

私はその病名をしらない。

「高令だから危険です、しばらくもてば、回復するが……」

医者はむづかしいと云うように語尾をあいまいに切った。私は老人の家族に連絡する必要があった。領事館に電話するのが最善の方法だと思う。医者は私を

受付けの電話機のそばに連れて行った。

「電話帳を見せてください」

受付けの若い医員に云ってから、私はサルバドールに日本の領事館がないことを思い出した。なにか代行する在外機関はないか。私は電話帳をせわしく繰った。政府の、半官半民の……民間団体でもよいから……しかし何もなかった。私はため息について電話帳をとじた。

「日本人の八百屋が二、三軒あるのを知っているが」

医員は親切そうに教えてくれた。

「えゝ」

そう云ってくれる気持は分るが八百屋に電話しても仕方がないと思いながら、私は気のない返事をした。此処から一ばん近い領事館はペルナンブコ州のレシーフェ港にある。

「レシーフェの日本領事館へ電話をかけるより仕方ないと思う。勿論、電話代は僕が払います。随分てまどりますか。遠いから」

「いや、マイクロウェーブができたので割合はやいと思う。まだ掛けたことはないけど」

「病室で待っています」

病室には老人と医者が出た。ドアを開けたとき老人の横顔と医者の後頭部を私は同時に見た。私の一つづ

つの目がそれぞれを見ているように見た。医者が振りむいた老人は動かなかった。私は若い医者だけを見た。どうですか？　というように私は口をうごかした。医者は首をふって立ち上ると私に近づいて低い声で云った。

「いま、貴方を呼ぼうと思っていたところだ。必要な処置はしたが、ほとんど見込みはない」

老人は酸素吸入をさせられていた。意識がなかった。

私に顔を近づけて話している若い医員の顔のさわやかな剃りあとを、私は残酷なものに感じた。それは老人の俄に憔悴した横顔とくらべて、あまりにも若々しかった。

33―3333というような覚えやすい電話番号を入口や救急車に大書している救急病院には、死ぬか――生きるか、という荒っぽさがあつた。私はここで看護婦を見かけなかった。一人か二人ぐらいはいるのかもしいれないが、大きな建物ではない。急病人や怪我人は一段落したら施設の整った病院へ入院させるのだから、看護婦の必要はそれほどないのだろう。死ぬか―生きるか、を患者はいや応なく此処で決められるのだ。老人もその択一を迫られ、そして意識が不在のまま既になんらかの決定をしてしまったのではない

か。

私は枕元へ行つた。今まで医者が坐っていた椅子に坐つた。

「鈴木さん……鈴木さん！」

二度目に私はかなり大きな声を出した。医者は何も云わなかった。老人は目と口を開けていた。その口は、胸の中に堪えきれぬほど熱いもの不快なものがあつて、それを懸命に押し出そうともがいているようだった。しかし、目はその肉体の苦しみすら感じていないように見えた。殺されるとき魚の目のように、感情や痛みにつながらない苦しみ、もっと広々とした哀しみをたたえた目だった。その目は天井を向いていた。天井を向いた目を私は見つめた。老人の目は己れの肉体の苦しみとはうらはらに、誰か他人を見めているように思えた。その視線のかなたに（前田十郎左衛門）がいるように私には思えた。

私が老人の苦しみを見ているように、老人も前田の苦悩を見つめているようだった。私がそう感じた時、今迄は過去のエキゾチックな死という興味をしか抱いていなかった前田十郎左衛門が、急にスツと私に近づいたような気がした。今ではすっかり曖昧になつてしまった切腹の原因を。前田十郎左衛門が死ぬ瞬間は、彼が手に握って腹を裂きつつある短刀と同じように、

明確な型と切れ味を持っていたのだ。鈴木老人は切腹の原因も、研ぎすまされた短刀を探し出して手にとつて見るように、知りたかつたのではないか。……でも、なぜ？ そのことにどんな意味があるのだろうか？ 螺線型の階段を登るように、その問いをふり切つて登って行つても、一廻りする度に私は再び同一の垂直線を通過している。なぜ……？

主任らしい医者が入つて来た。病室の空気が緊張した私は立ち上つて退いた。ドアが開いて、小声が私をよんだ。

「電話がつながりました」

のぞいた男が、ドアの外からそういった。私が途中で男を追い越しそうになると、男も急ぎ足になった。私は受話機をとつた。

「モシ、モシ。レシーフエ領事館の野口領事です」

鮮明な日本語が受話機に響いた。私ははつとしながらも、手短かに今までの事情を説明した。

「ほう。鈴木のじいさん、サルバドールに来ていたんですか」

「御存知ですか」

「ええ。此処の前はサンパウロに長かつたのです。二、三度会つたことがあります」

「家族の方に連絡しなければなりませんね」

「それがね……私の知っているかぎりでは、鈴木直次郎さんに家族はいないのです。たしか姪と二人でジアバクアラ区に住んでいましたが……姪と云っても五十を過ぎた方ですがね。奥さんも子供さんもすつと前に亡くなっています」

私は息をのんで、しばらく返事ができなかった

「おそらく経済的な面でも、その姪ごさんが直ぐ駆けつけて来るのはむづかしいかも分かりません」

「そうですか」と私はようやく云った。「勲章は要らないが金なら要ると云ったのは、単なるヘソ曲りだけではなかったのですね」

「あの時、私がじいさんと折衝したのですがね。何度も足をはこぼされました」

野口領事は当時を想いだしたらしく、少し批判的な口吻をもらした。新聞は鈴木直次郎の肩をもって書きたてていたのを私は記憶している。

「そうでしたか。ところでサンパウロの総領事館に……」

誰かが私の肩をたたいた。私は振りむいた。医者だった。老人が駄目なのがすぐ解った。

医者は、

「来てください」

と短かく云った。私は野口領事に、すぐ戻るからと

云って、医者につづいた。

老人は目をひらいて天井を見たままだったが、その目にもう生氣はなかった。老人は死んでいるように見えた医者が枕元に坐って、手首に指を当てていた。老人の生と死を区切る刻が迫っているのだ。その瞬間を正確にとらえことしか、医師としてすることは残されていないようだった。闇のなかを音もなく流れて行く時間のなかから、今日と明日の接点、今年と来年の目に見えぬ別れ目を感じとろうとしている人のように、医者は動かなかった。

医者が立ち上った。

「彼は死にました」

と私に向って云った。

「気の毒でした」

「いろいろと有難うございました」

私を呼びに来た若い医者が酸素吸入の器具を外した。

ゴム管を支える眼鏡がとられた。老人は口をいくらか開いていた。口だけ見ていると、不満をつげようとしているように尖っていたが、横顔全体は深い疲労のはてに熟睡している人のようだった。

私は、受話器を再び耳に当てた。重い沈黙を聞くよ

うに・ジーと言う発信音が私の鼓膜に流れていた。

「開かれましたか」

「ええ」

「今、亡くなりました。病名はヘクトーレ……いや、アンジーナ・ペクトーレスです。辞書がないので分りませんが」

野口領事が辞書を調べるように言いつけている声が微かに聞きとれた。アンジーナ・ペクトーレスとゆつくり繰り返していた。返事が聞えた。

「心臓血塞です。直ぐサンパウロの総領事館へ連絡します。場合によってはレシーフェからだれか行くことになるかもしれません」

「貴方が来てくれるとよいのですが」

「こちらから行くとなれば、多分私でしょう」

「よろしくお願いします。私はまだサルバドルにいますが、宿には電話がないので連絡は病院あてにしてください」

病院側と打ち合せをしてもらうために、私は受話器を医員に渡した。

私は病室に入った。

老人は口をいくらか開いたまま、死んでいた。だれもいなかった。先刻のように椅子が置かれていた。私はそこに坐った。

「鈴木さん。あなたは前田十郎左衛門がどんな理由で死んだのだと思っていたのですか。あなただって推測したでしょうに、その考えを一度も私に言いませんでしたね」

と私は老人に言った。最初に老人に会った夜、すなわち、おとといの夜と同じ質問を、もう一度声に出して私は老人にした。老人の顔を見ながらこの人は推測することが無意味で、確かめるより方法のないある問いを背負っていたのだ、と思った。そう言う形でしか成立しない問いに答えようとしてサルバドールに来たのだ。

「あなたはそれを確かめましたか」

私はいくらか皮肉に言って見た。

——あんた、望郷などで日本人が死ぬと思うけ、望郷なんかで——

「あなたはなぜ、そう思うのですか」

——あんたはなぜ、それを知りたいのじゃ——

頑固な声が生きていたときのようにしわがれて聞えた。私は老人を見ていた。私が聞いている老いた声は老人の発したものではない。私の内部の深くから、他人の声のように聞えて来るのだった。それは私の声だった。それに気づいたとき、戦慄が私の心を走った。私は老人から二重の謎を負ったと感じた。

私は医員が野口領事と交していた会話を思い出していた。

（市の遺体安置所へ置きます）

（――）

（埋葬すると法律で五年は動かせませんから……ええ、火葬の設備はあります）

それを聞きながら、私はふと、ここで埋葬すれば老人もラザロ墓地に埋められるのではないか、と思ったのだった。

私は外へ出た。坂道をあてもなく、港の方へ下りて行つた。

昨日のように、今日も暑かつた。

向うから歩いて来る日本人の一团に私は気がついた。服装や態度を一目見ただけで、移民船の乗客だと分る。大阪商船の船が寄港しているらしい。

遠くからその五、六人の男女は私を見ていたが、すれちがうとき、その中の一人が私に近づいた。

「Can you speak japanese？」

「ええ」

と私は答えた。

「ああよかった。オーイ、この人、日本語が分るよ」
ホンコンシャツの男は振り返って仲間に告げた。皆

が寄って来た。

「やはり、日本から来られた方ですか？」

と、明るいワンピースの女が言った。

「ええ」

「僕たち、港にいたらニワトリの丸焼きを食いたい
と思っていたんですよ。船人中じゃ日本食ばかりであ
きちゃった。コンブやトウフの煮たのなんか年寄りの
食うもんですよね」

仲間は嬉しそうに笑った。

「それで早速、レストランへ行ってニワトリの丸焼き
を探したんですけど」

とワンピースの女が言った。

「ニワトリはポルトガル語でガリンニヤでしょ。それ
でメニユーにガリンニヤと言う字のついているのを見
つけて、ああコレだと言って皆で注文したら、何だか
きたならしいドロドロしたスープ持って来られたんで
ガッカリしちゃった」

皆また、笑った。

「それはニワトリのスープでしょう」

私は自分が好きなスープをキタナラしいと言われ
て、少し気を悪くしながら言った。（あれは安くて栄
養があるのだ）

「ニワトリの丸焼きはガリンニヤでなくフランゴ、つ

まり若ドリなんです」

と言いながら、私は紙とペンを借りてポルトガル語を書いた。

「フランゴ・アッサード。それにご飯とポテトフライを添えるように書いておきます」

「どうも有難う」

「サントス港までですか」

「はい、私たちはバストスと言うところに行くんです」

「バストスは養鶏の本場です」

「一軒で何万羽も飼っているんですってね。本当ですか」

「本当です。そのうちにニワトリなんか食べたくなくなりますよ」

毎日々々ニワトリの世話をしたり首をしめたりしているとニオイが鼻孔にしみついて、食いたくなくなるという話を聞いている。それに毀れた卵や死んだトリは売れないから、毎日卵とトリばかり、いやでも食べなければならぬのだ。

「ウワー、ほんとですか、カツコイイなあ」

食べ放題と聞いて、ホンコソシヤツの男が嬉しそうに言った。

「あんまりカツコよくもないんですがね。まあ今のう

ちにせいぜい食べて下さい」

勿論、私の皮肉など通じない。男はアイマイに笑った。

「それじゃ……」

と私が歩き出すと、皆は大きな声で口々に礼を言った。

「どうも有難うございました」

「さようなら」

「お互にガンバリましょうね」

私は外国人が日本語を聞いているように、チグバグな気持ちでそれを聞いた。

（ガンバリましょう、か……）私はまた、一人になって歩き出した。新来の日本人たちに会ったことが少しも嬉しくなかった。同じ言葉を話すと言うだけのことだ、と私は思った。

私は小さな教会の中へ入った。暗く、静まっていた。そこに坐って、死んだ老人のことを身近に感じたいと私は望んだのだ。私は感情の通わないままに、移民船の乗客と話した。

たった六年の歳月が私の内部をそれだけ変えていたのだ。鈴木老人が私と日本語で話したとき、どのような感情を抱いただろうか。老人は私よりずっと遠くを歩んでいたのだから。私は何も、老人を理解していな

かったのだと思った。

「あなたはなぜ、無意味なことをしたんですか」

私はつぶやいた。

トロピカル・バロックの装飾が老人の執念のように
繰り返し繰り返しながら昂まって、空間をうめつくす
のを、私は見詰めていた。

（聖人たちの湾 終）

中国人の墓

（連作「船がくるまで」第一話）

プロローグ

三代目の駐ブラジル日本公使杉村濬（ふかし）がリオ・デ・ジャネイロ州ペトロポリスの小さな二階建の公使官邸に着いたのは、一九〇三年（明治三十八年）四月十九日だった。

杉村濬は明治二十六年に京城の王妃暗殺事件に連座したが（当時書記官）証拠不十分で放免され、本省に戻ってから通商局長を勤めていた。

新任の杉村公使をリオ港まで出迎えたのは堀口九万一書記官である。堀口書記官は前任の大越公使時代よりブラジルにいたが、杉村公使とは旧知の仲であった。

杉村公使は着任早々、仏語に堪能な堀口書記官を伴って、まず隣接のミナス・ジェライス州を、つづいて珈琲生産の中心地サン・パウロ州を視察した。

サン・パウロ州だけでも日本の本州と四国を合わせた面積がある。当時の汽車は薪を焚いて火の粉をまきながら走ったが、遅いくせに震動が激しかった。水を入れたコップでさえ倒れるので、食堂車にはコップをはめ込む台木が添えてあった。盛り土や切り通しをつくる手間をはぶいて、無数のゆるやかな丘の等高線にそって線路が敷かれていたから、遠くに町の教会の尖塔が見えるのに汽車はいつまでたってもあちこちの岡の中腹をめぐっていた。

欧州廻りの船旅の疲れもとらず、当時それほど切迫した外交問題ではなかった対伯移民の可否のために、杉村公使がそのような視察旅行にあわただしく出発したのは奇異の観を与えるが、これは堀口書記官の説得の結果だと思われる。前任の大越公使や外山通訳官がせつせと外務省へ書き送っていた対伯移民否定論に、ベルギー婦人を妻としている国際人の堀口は齒ぎしりをしていたにちがいない。そこへ、大陸壮士型の豪放でしかも外国語がさっぱり解らない杉村公使が来ることに決ったのだ。（二人は朝鮮時代以来、気心の知れた友人でもある）堀口書記官は視察旅行の膳立てをあ

らかじめ整えて、新公使の着任を持っていたのだらう。

杉村公使は早くも五月三十日付で『本官サンパウロ州旅行中伯国官民歓迎の模様に関する報告』を外務省に送っている。

一連の杉村報告は新聞にも掲載され、当時中国大陆に向いていた多数の日本人の目をブラジルにねぢ向けた。

そして一群の、決して少なくはない人々の運命を大きく変えたのである。

長くなるが『本官サンパウロ州旅行中伯国官民歓迎の模様に関する報告』を引用する。

『本官がサンパウロ州に旅行するに先だち、其噂の伝はるやりオデジャネイロ市の諸新聞をはじめ、サンパウロ州に於ける各地の新聞共に、皆之れが記事を掲げて其歓迎の意を前表し、次で去る十二日、御国書捧皇の為め大統領謁見の際、暢談に入りし折、大統領は本官が不日サンパウロ州に旅行の事、新聞に依りて知れり、就ては其際には及ぶ可き丈け便宜を与ふ可き旨話有之しが、果せる哉本官出発の当日には、サンパウロ行き列車に特別車室を用意して本官の乗用に供し、さて、サンパウロ停車場に至れば、同州大統領待従武

官一名護衛騎兵三名を連れて大統領の馬車を以て迎へられ、旅館に案内せられたり、（中略）其他諸般の取扱ひ極めて鄭重親切にして他の伯国駐在外交官等すら、尚之れを異とする迄に有之候。

官辺の好遇既に如斯なるに、民間人士の歓迎優待は尚一層これよりも甚しく、旅行中通過する孰れの停車場に於ても多数の群集は皆本官等の来着を待ち受けて之を歓迎し、日本万歳を呼ばざるはなく、特にリベロンプレット市の歓迎の如きは、誠に意想の外に出ずる所にして、本官等の同地に着するや市長より歓迎の爲め派遣せし馬車四輛は、予め停車場に待受け、次で一行の同市に入るや市民は両側に整列して之を迎へ、其中頃に至るや兵装せる小学生徒は捧銃の敬礼を爲し、次で日本万歳を三呼し、一少女は恭しく菊花々束を本官に贈り、沿道日本万歳声裡に送られて旅館に着するや其中庭には楽隊既之列伍を爲し本官が階に上らんとするを相図に「君が代」の譜を奏し、次で盛餐の饗宴あり、其間熱心なる同情を日本に表する演説は引も切らず、然るに門外には多数の群集又々日本万歳を連呼し、旅館の内外相呼応して日本に同情を表するの盛況、山河幾万里を隔つる南米に於て特に本官の感を動せし処（中略）

要するに日露開戦以来帝国陸海軍の連戦連勝は深く

伯国人の敬慕を招きしは勿論と相認め候得共此外にも伯人は久しく欧州人に未開人視され、憤慨に堪えざりし折柄、我が国が立つて露国に打撃を加えたるは、彼等の最も痛快とする所にして、其同情の特に深きも故ある儀と推察せられ候。さて右の如き同情は極めて得難き儀に候得ば徒らに技手して之を冷却せしむるは我得策にあらざるのみならず、又彼等が厚情に酬ゆる所以にも有之間敷と存じ候に付此儀を利用して当国と通商移民関係を開くは当国官民の希望に相副ひ且つは我利益と相認め候間御一考相成様致度、尚通商移民関係開始の方法に付いては別に愚見を具して上申可及候』

この報告書にあらわれているブラジル人の歡迎に対する受けとめ方、彼等の態度や心情の理解の程度はまさに新来の公使のそれである。ラテン人の油っこさを、熱っぽさと云うやや系統のずれた感覚で受けとめている（例えば『熱心なる同情を日本に表する演説は引も切らず……』などという個所にそれがよく表われている）。しかし、実際にこれを書いたのは堀口書記官であつたと云うのだが、堀口書記官の眼を感じさせる個所はない。もっとブラジルを知っていれば当然見えてくるであろうものは報告書には影もさしていな

い。

——一連の杉村報告のおかげで、前任の大越公使が送った『伯国に於ける伊太利移民三十万の惨状』は忘れられてしまった。

第一回移民船「笠戸丸」がサンパウロ州サントス港に入港したのは、それから三年後の一九〇八年（明治四十一年）六月十八日である。家族数一七〇、人員七九四、皇国殖民会社とブラジル政府の契約による移民で、皇国殖民会社々長水野龍と、ブラジルに於ける会社代理人上塚周平が同船していた。

船中では金となる木を穫りに行くような景気の良い話に花が咲いた。ブラジルで三年働いて一万円貯めて帰るといのがほぼ共通した夢だった。

サンパウロの移民収容所で数日の休養をとったのち、移民達は六ヶ処の農場へ、外語スペイン語科を卒えたばかりの心細い通訳に伴われてそれぞれ配耕された。

耕地に着いた日に、移民達の夢が無慙に消えた。

コロノと呼ばれる珈琲園労働者は、所詮、下級労働者にすぎなかった。あまつさえ珈琲の不作年に当たっていたので歩合制の珈琲収穫も殆どなかった。

一週間目には早くも紛争、逃亡が全耕地に起り、一月後に残っていたものは半数に減り、ほとんどの日本人

が配耕先から姿を消すまでに三ヶ月とかからなかった。

逃亡といっても、地理も言葉も解らない外国である。人々は本能的に海を目指して、幾日も幾日も鉄道線路にそって、必死に歩きつづけた。故郷の蜃気楼をそこに見たいと願って、女は子供を、男は荷物を背負って気が狂いそうになるほど果しない緑の起伏の中を、蟻のように進んだ。

……第一回移民は、こうして惨憺たる失敗に終わった。

（杉村公使は先年ペトロポリスで病没し、堀口書記官は既に帰国していた）

【一】

二月の或る日、四日間にわたったブラジル名物のカルナバルも終って、サンパウロの街はひっそりとしていたその街を激しい雨がたたいている。盛夏だから早朝よりカツと照り、午後三時ごろきまつて雷雨が通る。ブラジル人は傘を持ち歩かない。雨が降ると軒に入って、空を見上げながらやむのを待っているのである。

雨の中を二人の日本人が歩いている。二人とも烏打帽をかぶっている。落着きなく街の番号と一人の手にした紙片を見くらべながら、自分達がひどく濡れていることさえ気がつかないように見えた。人々は雨を軒かげにさけて往來を眺めている。その衆人環視の中を、二人の男が走るのでもなくキヨロキヨロと歩いているのは異様だった。人々はあつ氣にとられて、狂人でも眺めるように二人の日本人を見ている。もつとも人々にはそれが支那人か日本人かは分らない。支那の方が国としては古く知られているから、東洋人を大體、支那人と呼ぶ。雨やどりの一人が「シネーズ、ローコ」（氣ちがいの支那人）とつぶやいた。どうしても今日中に済ませなければならぬ用事などないと思っているブラジル人だから、いわんや雨の中を歩かねばならぬ用件など想像もできないのである。想像の埒外にあるのはすなわち狂気である。

二人の日本人は雨の中に立ちどまった。

「ロドリゴ・シルバ五〇番。ここだ、ここだ」
「ほれ、あそこに皇国殖民会杜伯国代理店と書いてある」

一人が指さすと、紙切れを持った男も、板切れに書かれた日本文字をくい入るように見た。日本の字を見

ただけで安心して、張りつめた気がゆるんで涙がでそうだった。

二人はびしょ濡れのまま薄暗い木の階段を三階へ上って、半開きのドアから事務所の中を覗き込んだ。中には五六人の青年がいる。事務机がある。ベッドがある。トランクがある。青年たちの真中にいた植民会社代理人の上塚周平と目が合って、二人は黙って頭を下げた。

「おう、あんたたちは確かヅウモント耕地に行つとつた広島の方だな」

「はい。私は中村直松で」

「わしは田尾安太郎ですが」

「そうそう。中村さんに田尾さんだったな。あんたたちはイタチーバへ行つたのではなかったか」

「はあ。ヅウモントを出てから、私と田尾さんと山田甚太郎さんとこと三家族で行つたですが、どうにもこうにも話にならんです。やぶの中に立札が立っているだけの停車場で降りて荷馬車で行つたですが、草ぼうぼうの処に掘立小屋がポツポツあるだけです。住民はみなその日暮しの生活です。こんな処では駄目だとい目で分りましたが、案の定、働けば働くほどかえって売店に借金がふえるです。金をもうけようとは思わずに適当に働いて呑気に暮らす以外には、あそこで生き

る方法はないらしいですが、我々はとてもそんな呑気なことでは済まされんです。……それで山田さんはアルゼンチンがよいというて行かれましたが、わしらにそんな金はないので、サンパウロで仕事をしようと思つて出てきました」

「フーン。そうかい。……まあ、入つてマテ茶でも飲みなさい。随分ぬれてなさる。香山くん、手拭いをもつて来てくれ。……しかし、中村さん、どこも同じようなものだがね。とにかくブラジルの事情が分るまで一ト処にしんぼうしとるものが勝ちだと思ふが」

「そうかも知れないけど、わしらは」と田尾がせき込んだ調子で云いだした。

「日本を出る時、保証人をたてて高利貸しから渡航費を借りてるんじやから、期日迄に送らんかったら保証人に立つた親類がどんな迷惑をうけるやら、考えただけでいても立つてもいられねえです。わしらの親類だつて払えるもんなんて一人もおらん。一日も早く金を送らなきやと思つて、たった一ミルでもええからよけい稼げる処を探しに出て来たです」

「しかし、サンパウロにもうまい仕事などころがつていないよ。言葉が解らんからな。男は下男、女は女中がやつとだ。それでさえ失敗ばかりしてる」

「大工をやつて稼いでいる、という噂をきいて出て来

たんですが……」

「ありやー。あんたたちも大工志望かい！」

周平は呆れたように二人の顔をみくらべた。

「中村さんは日本では何しとった」

「小学校の教員です」

「田尾さんは」

「わしは菓子屋の職人です」

「そうかい。それなら田舎で辛抱できんのも仕方ないな、しかし大工といってもなあ……日本人は手先が器用だから木を寸法どおりに切ったり、カワラをのせたりするぐらいはすぐに覚える。一人がやってうまく行くと俄かづくりの大工ばかりごつく増えた。我々はそれをサンパウロ大工と呼んどるがなあ」

田尾は感心したように呟いてから、勢い込んで叫んだ。

「サンパウロ大工！」

「わしたちもそのサンパウロ大工にさせてもらおうと思っ
て」

「……みんな大工になったり、庭男になったり総くづれだ。一人一人バラバラになっては不利なのだが、わたしには何の力もない。仕方ない。ソブラード耕地に行つとった愛媛の橋本重左衛門さんや東野細吉さんたちがこの近くに住んで大工をやつとるから、案内させま

しよう。」

「東野さんならよう知つとる。船では一諸に酒のんだからねえ。そうだろ、田尾さん」

「ひょうきんでおもしろい人じゃ」

二人ともやっと安心したように表情がゆるんだ。落着いた二人は改めて青年たちに挨拶した。「通訳さん」の大野基尚、嶺昌、仁平嵩、それに同じ笠戸丸だが自由移民として来た香山六郎。宮崎信造はゾーモント耕地に通訳の加藤順之助の後釜として行ったが移民たちが騒いで十五日しかもたなかった。二人ともあのと騒いだ一員なのでバツが悪そうに宮崎信造におじぎをした。もう一人の知らない青年は松永二三と名乗った。

「あんたたちはいつ、サンパウロに着きなすった？」

周平がいぶかしそうに聞いた。

「汽車は朝つく筈だが」

「ええ、今朝です。何も分らるので紙を出して指さされた方へ向いて歩いて来たんですが、人によって指す方がまちまちで困りました。もしかしたら乗合いの方を教えてくれるらしかったですが、乗物にのるのはどうも心細いから歩いて来たです」

「それは大変だった。何か食べなすったか」

「いや、まだです」

「それはいかん。タラの湯づけぐらいしかないが、腹ごしらえをしてから出かけなさい。雨もそろそろやむだろうし」

タラの干物はポルトガル人が好んで食べる。一晩水にもどして塩をめいてから、オリーブ油にひたして天火で焼くか、ジャガイモやトマトと煮るのだが、日本人はそのままあぶってお茶漬けにした。もつとも緑茶などはないから白湯をボロボロの外米にかけて喰った。これが一番日本食に近い食物だった。

宮崎信造が立って、廊下のすみにあるコンロに炭をついで、茶漬けの用意を始めた。

「宮崎さん、とんでもない」

二人は口々に云って宮崎のうしろでオロオロした。「いいんだ。僕はもう通訳さんじゃないんだからね。

今や上塚代理人の書記兼小使いなんだよ」

「そんなこと云われても、わしらがやります」

「オイ、オイ、給料も払っとらんのだから、書記、書記とあまり心安く云わんでくれ」

と周平が笑った。

「そのうち会社から送金があつたら、ごつそりいただきます」

会社からはもう二ヶ月も送金がなかった。もう来るころだと、全員が首をながくして待っている。周平は

サンパウロ代理人として皇国殖民会社から月五〇〇ミルレースを受けている。この金額はサンパウロの中産階級の生活費にほぼ当る。それで、住宅兼事務所の二部屋の家賃を払い、紛争の結果失職して寄宿している通訳組や、いつの間にか集った独身青年たちの食費を払い、サンパウロ州に散った移民たちの間を歩いてまわる旅費に使ったら、もう残らない。残らないところへ送金が途絶えたから、この数日いよいよ大詰りに詰ってきた。

周平は二人が湯づけをかき込む音をききながら、立ち上って窓から外を眺めた。事務所の窓は家の裏側にひらいている。小さな谷がむこうのブリガデイ口通りとの間にあつて眺望は広がっている。谷の急斜面にはバナナやゴヤバの樹が茂っていて、サツペ草で葺いた小屋が点々と見えた。谷底は湿地になつていてアヒルや黒豚が小さな群になつている。今の雨で水が増えたために豚はいつもの遊び場所から逐われて、小屋のまわりに戻っていた。

周平の背後からは湯づけをすすする音だけがしている。

青年たちは黙ったままである。

「郵便！郵便！ジャポン、カールタ」

ふしをつけて呼ぶ配達夫の声がした。青年たちは顔を見合わせた。目が輝いている。

「仁平君」

周平はふりむいて、戸に近い仁平に声をかけた。

「とつて来てくれたまえ」

「はい」

と云いながら仁平はちよつとためらっている。郵便配達夫はサーヴィス業のようなものである。悠長に手渡して歩くのは責任感からではなく、何がしのチップを期待するからである。仁平も小銭の持ち合わせはあるが、ここ数日の煙草代でしかない。それ以外に入るあてはないので、配達夫にやるチップさえふところにひびくのである。周平もそれを知っていながらトボけている。仁平は階段を降りながら三箱分の煙草代を計算して、その残りをチップに当てることにした。あまり少ないので配達夫がいい顔をする筈がない。

「ありがとう、ありがとう。今日は主人がいないのでお金がないけど、今度沢山あげるから。どうも有難う」

と仁平がスペイン語なまりのポルトガル語で云っている声が上までよく聞える。青年たちは苦笑しながら、仁平の言い訳に調子を合わせて、配達夫が立ち去るまで静かにしていた。周平はポルトガル語が解らな

いが皆の様子で大体の見当はつく。

仁平は二段ずつ階段をあがってきた。

「会社からです」

と勢いよく手紙を周平に渡した。やつと来たという安堵の嘆声ともため息ともつかぬ声が部屋にわいた。封を切って周平が読むのを青年たちは見守った。読んでいる周平の表情には何の変化もない。読み終るとちよつと目をとじた。それから、

「雨が上ったな」

と一人ごとのように云った。

「香山くん。橋本さんの処へ中村さんと田尾さんを案内してくれたまえ」

手紙の内容にふれないので香山は、ハアとけげんな顔をしながら立ち上った。

「それじゃあ、行きましようか」

二人は香山にうながされると、周平をはじめ青年たちに礼を云いながら出ていった。

三人の足音が階段を遠ざかるのをききながら、囲りに集まった青年たちの顔を一わたり眺めて、周平は、
「諸君！」

と云った。その口調が改って、重々しかった。

「諸君、皇国殖民会社が破産した。もう、なくなった

のだ」

云いながら周平の心の中で糸がプツンと切れたようだった。青年たちは呆然として、しばらく声を出す者もいなかった。会社の状態が悪いことはみんな知っていたが、まさか破産するとはだれも考えなかった。社長の水野龍が日本で何とか盛りかえすだろうと思っていた。水野は政界にも知人は多い、会社の名義上の代表は政友会兵庫県代議士の土井権太である。それが破産するとは。

「……我々はこれから、どうなるんだろう」

大野が蒼い顔をして呟いた。

周平は両手で開いた手紙に目をおとしながら云った。

「水野さんは日本へ帰ってから随分努力されたらしいが笠戸丸移民の失敗で日本政府の態度はすっかり硬化している。日本人を外人の女中や下男にするために送り出すとは何ごとか、国辱ものだという電報がリオの公使館から打たれている。日本政府はブラジル移民をもう許可しないことにしたそうだ。あの杉村報告を送った同じ機械が、こんどは移民は国辱だと打電しているのだ……。加えるにブラジル政府側でも不満の色が濃く、今後の日本移民導入に熱意をもっていないという。社長は万策つきた。第一回は赤字だった。第二

回、第三回と移民業務を扱げねば会社は存続できない。……もう金はこんよ。移民もいない」

「私たちはどうなるんでしょうか」

「見殺しにされるのか」

「日本へ帰れるだろうか」

通訳たちに動揺の色がこかった。

「笠戸九七九四人、ブラジルからみたら、文字通り大海の一滴だなあ。……ここで消えうせてしまうか、日本へ帰れるか、それは分らん。しかし、もう頼るものはないのだ、力を合わせて生きるより仕方がない。わしは笠戸丸移民が一人でもブラジルに生き残っているかぎりには日本へ帰らんよ」

宮崎信造と松永二三がうなづいた。大野基尚、嶺昌、仁平嵩たちの通訳組は黙っていたが、あきらかに不満の色があった。

しばらくして三人の中で年長者の大野が思いきったように口を切った。

「それは上塚さんは御自分の考えや理想があるでしょう。しかし、我々通訳は単なる被害者です。まったく、水野さんの口車にのせられて、在学中のものまで連れてこられひどい目に会っているだけで、こんなバカな話はない。水野さんが云うには”シベリヤ経由でヨ―

ロッパが見物できる。ブラジルへ行ったら外交官並みだ、大いに大日本帝国のために奮闘してくれたまえ”ということだったが、通訳といったって農園主はおろか支配人とさえ直接に話せない。監督の云うことを労働者に伝えるだけのことです。”草とれ”と云ったら”草とれ”と訳し、怠けるな”とどなられたら”怠けるな”と伝える。それが外交官並みだなんて……。水野さんが視察にブラジルに来たとき連れて来た鈴木貞次郎君のことを”鈴木君は今や州政府の通訳官でそれは大したものだ。月給二百ミルという百五十円だからねえ”と水野さんは云っていましたが、それがどうです。来てみたら、その鈴木君だって食うや食わずでブラブラしてるじゃありませんか。さんざんいいことを並べて我々を連れ出して、ハイ会社がつぶれました、ではあまりに無責任ではないですか。特に私と仁平は妻帯者です。仁平は幸か不幸か奥さんと別れているが、私は……”

愚痴になったと気付いて、大野は流石に口をつぐんだ嶺が代って云った。

「大野さんの云うことはもつともです。我々は外交官待遇で州政府の役人たちと対等に話さねばならん、と云うから、こちらでも日本帝国の威信を保つべく服装にも気を配って、高価な背広を新調し、山高帽子にス

テツキといういでたちでやって来たのです。それがどうです。農務局へ行つたつて下っ端の役人さえ会ってくれなかったではないですか。移民局へ行けという紙片をくれただけです」

嶺が激してきそうなので、周平は片手をあげて嶺をなだめるようにした。

「諸君の不満ももつともだ。しかし、現実はどうなつてしまった。一番切実な問題はさしあたって明日からどうやって食うか、ということだ。日本へ帰るなり、ブラジルで成功するなり諸君にも考えはあろう。しかし、今は不満も希望も一まずおあづけにして、食つて行かねばならない。とにかく全員で力を合わせて生きなければならんだ」

その一言の前には、黙るより仕方ない。泣いてもわめいても食べ物を恵んでくれる人などいないのだ。

「今夜、みんな集ったら今後のことを相談しよう。鈴木くんも来るだろう。わしはちよつと出てくる」

周平はカンカン帽をかぶると外に出た。水野からの手紙を読んで、一番動揺したのは周平自身である。周平もブラジル出航間際に皇国移民会社の社員になったのであるから、被害者の一人でもあるが、とにかくブラジルではたった一人の会社の人間である。会社は破

産しても、今まで周平のかたにかかった会社代理人としての責任は消えなかった。今までよりもっと重くなつて周平の身にふりそそぐものと思わなければならぬ。耕地紛争のおり、ブチ殺してやる！といきまぐ移民にとりかこまれて、もう少し生かせて諸君のために働かせてくれと土下座をして云つたのは、本心からである。会社がつぶれたら、自分一人食うのにやつとで子犬一匹助けることもできん。自分は無力な人間になる。あの涙がウソになる。

わしも口先だけの人間になつてしまふ。……帝大法学士サマもこうなつたら手も足もでんな、と思いながら周車は足のむくまま、あてもなく歩いた。

足は自然に坂道をくだつた。

奴隷仕置場があつたりベルダーデ広場から小川にそつて降りる。左手にサルジエーダス伯の城館がそびえている。右手には莊園の跡があり小さな礼拝堂が建っている。遠くイピランガの丘にかけてゆるやかな斜面が続き、展望がひらけていた。林や草地の中に住宅は陰れるように屋根だけが見える。周平はその眺めの豊かさに救われるような氣持がして、下り坂に身を委しながら歩いた。

学生時代に自炊生活をした下渋谷の田園風景を想い

出した。苦学生の彼は生大根を噛って正月を過したこともあった。月給五〇〇ミルレースもつかの間の夢だった。又あの頃に逆戻りである。今度はバナナを噛って過さねばならんのか、と周平は思った。

坂が尽きると小さな町工場がいくつも並んでいた。下町の町工場のたたづまいは東京もサンパウロも変わらない

町工場のむこうに小さな丘があつて、頂きに教会が建っていた。周平はこの辺は初めてだった。雑木の繁った丘をあおいで、あそこに登って一休みしようと思った。

S字状にゆるく曲った参道を登ると教会の前へ出た。扉はひっそりと閉じられている。周平は裏へ廻った。

鉄のさくにそつて廻ると、丘の裏手は小さな墓地になつていて、廻りを雑木にかこまれている。林というより見拾られた果樹園のような感じの低い繁みがある。

腰を下ろす個処を求めて視線をあたりにめぐらせた周平は、その灌木の群れを見て、思わず立止った。それらの木は一面に白い花をつけている。その花に見覚えがあった。

「茶の木ではないか！」

口に出すなり、周平は繁みに向って小走りに斜面をくだった。近よってみると、手入れされていないのでほしいままに延びているが、まさに茶の木だった。周平は一まいの葉をちぎると噛んでみた。かすかなしぶみが舌に伝わる。サンパウロでは輸入品をのぞいては紅茶さえ売っていない。ブラジルにはないと思っていた茶の木がこの丘には心ゆくまで茂っていたのだ。

「久しぶりに緑茶がのめるぞ」

彼は嬉しさのあまり、又独り言を云った。お茶とミソ・シヨウユだけは誰もがのどから手が出るほど欲しがっている。そのお茶が自生しているのだ。何人が植えたものだろう。貴族か農場主かが半ば自家用に植えさせたものか、それとも僧侶の副業でもあったのか。

周平は背広やズボンのポケットに茶の葉をつんでおし込んだ。ハンカチにも包んだ。つみ終って周平は石の上に腰を下した。

下部を雑草に犯されながら、茶の木は自然に還って生きていこうとしていた。白い花を咲かせ、青い実をつけて……。

茶畑と小さな墓地が接する個所にまわりを茶の木で囲まれた風変りな墓が一基あった。囲まれたというより、囲ませた感じだった。墓を囲んだ茶の木には、茶

園が放棄されたあとでもう一度、人の手が加わった痕跡がある。

若い枝が出てその跡をかくそうとしているが、他の木と比べるとその相違ははっきりしていた。生垣のように刈り込まれたらしかった。ぼんやり眺めていた周平は、その墓に刻まれた文字が漢字らしいと気付いて、思わず立ち上がった。茶の葉をくわえたまま、墓に近づく。

やはり中国語だった。

中国広東宝安県人氏 杜燦培君之墓

と読めた。筆力どおりに深淺をつけた彫り方だったから碑を刻んだのも仲間の中国人だったろう。

日清戦争が始まった年（一八九五年）に、中国人の単独移民四五七名がミナス金坑に送られた、という話は周平もきいたことがある。中国で露天掘りになれた彼等は地下二千尺の高熱に堪えられず、大方はたおれ、生き残こつたものは逃亡して、四散した。それ以後、中国人はブラジルに入っていない。周平もまだ、ブラジルで中国人を見たことはない。

終干一千九百四年十一月一日、

とあった。この男は、五年前に死んだのだ、と周平は思った。仲間たちはブラジルのどこかに生きているのだろうが、中国民族という見地からすれば、四散した

男たちは死んだも同然だ。彼らがブラジル人として成功しているという話も聞かなかった。そういう例があれば、同じ東洋人なのだから州政府の役人なり農場主なり、誰かが雑談のおりにでも日本人に向って云うであらう。……すると数百名の苦力上りの中国人たちは流木かアブクのようなものになって点々とブラジルを漂っているのだ。

彼ら中国人が十四年前に漂い始めたように、七九四年の日本人が、日本という根を切られたいま漂い始めたのだ。一にぎりの中国移民の運命は、そのまま笠戸丸移民の運命と見てよいようだった。

周平は白い花の一きわ豊かな茶の枝を折ると、杜の墓に供えた。

故郷にあるような茶の木に囲まれた墓をつくってもらうのは死んだ男の希望だったのか、それとも死を看とった仲間の男いやりだったのだろうか。いずれにしても周平は、この墓の主にある親しみ、ある好感をもった。しかし、同時に淋しさをも感じた。

―移民たちがアブクのように漂って、消えうせるのをなんとか食いとめなければ―と周平は墓を見ながら思った。と同時に、明日から食うこともできない我が身の無力さが身にしみた。

いつのまにか、落日が遠くの丘を染めていた。夕日

の輝きが弱まると、あたりはぼうとした深いみどりに包まれた。黄色がまざっているような、あたたかみのある黄昏の色だった。その色はサンパウロをやさしくとらえながら、そのままゆっくりしめり気をまし、深まり、濃くなっていった。

周平は墓に合掌をすると、教会の傍を抜けて、丘を降った。石畳みの坂には小さな実をつけた雑草が生えていた。町には、ガス燈が点りはじめていた。ポケットを茶の葉でいっぱいにくらませた周平の痩せた後姿が、ガス燈の光りの輪に浮びあがりすぐ、夕闇にまざれた。

【二】

その夜、皇国殖民会社代理店のドアを開けた鈴木貞次郎は、異様に興奮した雰囲気を感じて、内に入らず、ちよつと立ち止った。

周平が「やあ、鈴木くん」と云ったが、今まで言い争いをしていたらしく紅潮した頬をしている。たった一つのランプの光が、気まぜくおし黙った若者たちの影を高い壁にはりつけていた。ドアの近くに立ってい

た大野基尚の妻の松子が、鈴木を見ると「貞次郎さん」と云いながら近よると、こらえきれなくなつたように泣きだした

「どうしたんですか、奥さん」

といいながら鈴木は夫の大野を見た。大野は青ざめたまま一言も云わない。

鈴木貞次郎は泣きじやくる松子を廊下につれだしてドアを閉めた。

「どうしたんですか、奥さん」

「上塚さんとうちの人が……」

「上塚さんと大野さんに何かあつたんですか」

「会社は破産したそうです」

「破産？ やっぱりそうですか。社長の水野は旨いこと云つてたけど、やはりつぶれましたか」

「今日、上塚さんあてに手紙が来たのです。それで、上塚さんはこれから食つて行くために、みんなで何か事業をしたらどうかと云うのです。で、皆賛成したので、すが、そうしたら上塚さんは大野に、あなたは一コントの金を持っているからそれを資金に融通してくれ、と云うのです。うちの大野が、そんな金はない。と云つたら、いやたしかに君が持っているのを見た。と云うのです。」

大野は、二百ミルレースなら持っているがこれは妻

の出産費用にとってあるのだからどんなことがあっても遣う訳にはいかない。と云って、そうしたら、上塚さんは、いやそれまでには何とかするから一時融通しろ、とねばるのです。うちの人は、どんなことがあってもそれはできない、と返事したのです。それを上塚さんは、冷たいと非難するのです。…でも貞次郎さん。日本ならともかく、言葉も通じないブラジルで一銭のお金もなくて子供を産まねばならないとしたら、私は死んでしまいかも知れません。上塚さんはひどい人です。あの人に大野を非難する資格はありません。私たちがこんなに心細い目に逢っているのは会社のせいではありませんか！それなのに、今度は出産費用まで出せと云うのです…」

云いながら、ふるえるように松子は泣いていた。彼女は妊娠四ヶ月だった。看護婦の制服のような単服のくびすじから胸元にかけて青白く、むくみはじめたような痛々しさがあつた。痛いほど張りつめて青い血管が浮いている妊婦の乳房を、二十六才の鈴木は目くらむような想いで、とつさに想像してしまった。すると、周平に対する怒りがむらむらと湧いてきた。

「奥さん。わたしが話します」

鈴木は内へ入って周平の前へ進んだ。

「上塚さん。今、奥さんから話はきいたが、あなた

の方がまちがっている。」

鈴木は周平をにらむように云った。鈴木は移民たちより二年も前に珈琲園で働いていた。ポルトガル語もできる。移民たちからも随分頼られるが、周平の不思議な徳望のようなものはなかった。周平は会社の代理人なのだからと思うこともあるが、たった一人でブラジルの奥地で二年も頑張ったのだという誇りが周平の前になかなか頭を下げさせなかった。一日ごとに周平は移民の間で必要な人間になり、自分がだんだん不要な人間になっていくような淋しさが鈴木にあった。今日こそは周平に頭を下げさせてやろう、と若い鈴木は気負いたっていた。

「上塚さんは大野くんから金を借りてあとで払えばよいと思ってるでしょうが、奥さんを持つ大野くんの立場になってみたらどうです。独身とちがって妻帯者の大野くんには、彼の世界があるのです。夫は妻を護らねばなりません。ブラジルでそれができるのは、金あつてのことです。ここは日本ではないのだから、いくらまわりの我々が善意をもって見守ろうが、奥さんは赤ん坊をうんで育てることなどできやしない。金だけが頼りなんですよ。その命の綱の金をあなたは借りようとしている。しかし、今迄の会社のやってきたことや上塚さん自身の状態を見たら、必らず返せるとい

うあてなんかないでしょう。大野さんの金は諦めるべきです」

「わしだって大野くんの金が大事なことは分っているそれを頼むのは心苦しい。しかし、大野くんの外には誰も金を持っておらんのだ。資金がなかったら、皆はバラバラになってしまふ。一人でなにができる。庭師や大工になったら、食うのがやっとだ。一度その境遇にはまってしまったら、容易なことではぬけだせない移民の指導的な立場にある我々がそんなになったら、一体笠戸丸移民はどうなるか」

「諦めなさい。上塚さん。あなたは自分の理想にとられて他人に迷惑をかけているのだ。もし松子さんが赤ん坊にもしものことがあったら、あなたはどうかやって責任をとりますか。誰にも責任なんてとれやしない。そうでしょう。金のことならいいが、人の命にかかわったらどうするのですか」

周平は黙って聞いていたが、

「鈴木くんの云うことはもっともだ。わしが悪かった。わしは大野くんにあやまらねばならん。大野くん、松子さん、無理を云ったことを許してくれ」と云って深く頭を下げてしまった。

ランプの陰はうつむいた周平の表情をかくしていたがあまりにあっ気なく周平があやまってしまったので

氣負っていた鈴木はかたすかしを食ったような気がした。しかも、どうやら本心かららしい。この男は馬鹿なのか利口なのかまるで分らない、と鈴木は思った。帝大法学部卒という感じはまるでない。こんなところが移民たちに好かれるのだろうか、今の鈴木はむしろ周平のやり方を芝居じみていると感じて、微かな憎みさえ感じた。

大野も松子も周平の謝罪に対してうなづいたが、氣まづさはおしかくせなかった。

資金のあてがなくては、みんなで事業をしようという周平の案は白紙にもどさねばならぬ。中心街のこの事務所をこれ以上借りることはできなかった。家賃は前払いであつたから、もう一週間はいられる。一週間後には、それぞれの思いどおりに散っていかねばならない。思いどおり、と云つても、行先にアテのあるものは一人もいなかった。

暗いランプの下で、一同の気持ちは沈みがちになつた氣をひきたたせるように周平が云つた。

「ピングがまだ残っていたなあ。暫くは皆で飲むこともないだろう。今夜は大いに飲もうではないか。宮崎くん、もう二三本買ってきてくれや。タラを焼いて、それで飲もう」

宮崎がボールからピンガ酒を二本買って戻ってくる
とアルコールをもやして炎にかざしながらタラの干物を
焼くにおいが、狭い廊下いっぱいになり立ち込めてい
た。タラの残りはもういくらもないのだった。若い宮
崎も流石に心細くなって廊下に立ち止ると、匂いをお
し込むように胸いっぱい煙をすい込んだ。

一週間後に周平と宮崎信造、香山三郎、松永二三の
四人はブラス区のシルバ・テレス街の一部屋へ移っ
た。通訳組の仁平嵩と加藤順之助は住込みの仕事を
得、大野夫妻と嶺昌と一緒に部屋を探して移った。

周平たちが移ったブラス区はイタリアや移民やスペ
イン移民が集まっている下町で、まるでナポリあたりの貧
民窟の感じだったが、それだけに貧乏人には住みやす
い街でもあった。

子供が多い。おかみさんが口ぎたなく子供を叱る。
物売りが車をひいて通る。おかみ連はオレンジダー
ス買うにもやかましく云ってまけさせる。商人も大声
でやり返す。ちよつと目をはなすと、おかみ連は一つ
二つ余計にとる。あちらでは仲の悪い女同志が口げん
かを始める

家の造りも南ヨーロッパの下町風のヴィラが多かつ
た周平たちのねぐらもヴィラの一部屋である。入口を

入ると中庭があり、中庭をコの字型に囲んで部屋が並んでいる。二つずつある便所とシャワーは共同だった。井戸は一つある。一つの家族が普通は二つの部屋を占領しているから、五六家族が一つのヴィラに住んでいることになる。炊事はおのおのの部屋に鉄製の七輪を持ち出して炭火でする。ヴィラにはうるさい契約もないかわりに家賃は前払いだった。ベッドとタンス、椅子などがついている。周平たちは四人で一部屋を借りたが、一ばん悩まされたのは食事の時間だった。仙台の藤崎商店がサンパウロに開いた“オ・ジャポン・エン・サンパウロ”の店員の後藤武夫からなにがしかの金を借りたのだが、部屋代を前払いしてしまふと、ほとんど残っていない。人並みのものを食うわけにはいかなかった。マンジョカ芋の粉とバナナで命をつなぐより方法はない。

マンジョカ芋は先住民の主食だが、山野に自生するくらいだから安い。乾燥して粉にしたものを買ってくる。オリーブ油でこんがりいためてニワトリの丸焼きにつけ合わせたり、生エビを漉したものを混ぜてクリームにすれば旨いのだが、勿論そんな贅沢な食べ方はできない。おわんにマンジョカ粉と塩を入れ熱湯を加えてねっとりさせ、ソバガキのようにするか、団子にして塩汁で煮るかして食うのである。三日も続けて

食うと、四人とも芋の団子を見ただけでゲップが出た。食事時になると周平たちは団子汁の鍋を囲む。ヴィラからは、それぞれ貧しいながら肉や野菜をいためる匂いが中庭に満ちている。その匂いに悩まされながら、青年たちは団子を毎日食った。

昼間はバナナを食う。二本も食べると、これまたゲップがでる。

「まるでエテ公なみだ」

と或る日、香山がこぼした。

「バナナばかり食って、いまに本当に猿になりやしないか」

「我々は痩せてだんだん身が軽くなってきたから、君の思いどおり猿になれる日も遠くはないよ」

と松永二三がまぜつかえす。

「こんちわ！」

と威勢のいい声が外でした。松永が扉を開けると、天秤棒をかついで中折帽をかぶった男が立っている。ホテルでジャガ芋むきをしている松下正彦という青年である。

「なんだ。松下さん。その恰好は。一体、何を始めたんですか」

「どうしたも、こうしたもねえや。ひどい目に逢った」

松下は天秤棒の荷をかついだまま、入ってきた。

「しるこ屋を始めたんだ」

「しるこ屋？ホテルは」

「やめたよ。それで、儲けようと思ってしるこ屋を始めたんだ」

「しるこ屋ねえ」

「ブラジル人がよく飲むだろ、はら、あのシヨコラツテ（ココア）ってやつよ」

「ああ、あの西洋しるこ」

「オッ、それだ。その西洋じるこ！。西洋じるこも日本じるこも見てくれは似たようなもんだから、そこに目をつけてアヅキに似た豆を買ってきてメリケン粉の団子を入れて、ジャポン シヨコラツテ（日本のココア）だって訳で売りだしたんだが、大損した。誰も飲む奴はいねえんだ。どいつも、こいつも一口のんだら、御丁寧にも吐きだしやがる」

「それはそうでしょう。ブラジル人は豆は主食だから塩味しか知りませんからねえ。我々だって御飯に砂糖を入れられたら、食えやしない」

「そういうことらしいね。今日で二日も歩き廻ったけど ジャポン・シヨコラツテと怒鳴ると人だからはするんだけど、最初の客がパツと吐きだすともういけねえ。遠廻きにしてジーツと眺めてるだけだ。そんで棄

てるのも勿体ないから皆に飲んでもらおうと思って持ってきた」

松下は二缶のしるこを天秤棒ごと置いて行つてしまった

一同大いによろこんでしるこを食べたが、二日目になると見ただけで又、ゲップが出た。

隣の部屋はシモネツチというイタリヤ人の職工の家族が住んでいた。五人の子供がある。香山六郎が長女のマリヤからマカロニを大皿いっぱい貰つて、目を白黒させたことがある。四人も青年がいて、いつもお湯しかわかさないのので、シモネツチのおかみさんは始め日本人の食生活はよほど変つているのかと思つたらしいが、そのうち大体の見当がついたのである。周平はさっぱりポルトガル語を話せないが、香山や宮崎たちはスペイン語ができるので周りの人々から珍しがられた。

一週間たち、十日すぎた。これといつて思うような仕事はまだない。四人でいろいろ考えるのだが、アイデア倒れで、実現してもうまく行きそうな案はなかった。言葉が解らぬ、事情が分らぬ、金がないの三拍子そろつているのだから、四人を養いかついくらか余裕のできそうな仕事は誰も思いつけなかった。

いよいよ全員ホテルかレストランのジャガ芋の皮むきにでもなるより食いつなぐ方策はなさそうだった。

三月の声をきくと、日光は相変らず強いのに、木蔭に入るとフツと風の涼しさを感じる日があった。一日ごとに風が澄んでくるのである。

三人の青年は朝から仕事を探しに出ている。周平は一人で居残っていたが、緑茶がなくなつたのでカンブシの丘まで茶の葉をつみに行くことにした。腹がへつているから外出はおっくうである。しかし、一週間も狭い部屋にごろごろしていると流石にうつとうしくなる。周平はカンカン帽をかぶると外へ出た。

道を歩くと穢ないなりをした子供たちが、シネーズ、シネーズ（支那人、支那人）と云つてあとをついてくるので、うるさくて仕方ない。

周平はカンブシの丘の見当をつけると、人通りの少ない淋しい道を選んで歩いた。工場のうら手に針金の柵があつて、柵の中の空地にはブリキの破片や木材が置いてある。そんな道すじをカンカン帽に白シャツ姿の周平は畳んだ風呂敷を左手にもって汗をふきながら歩いた。

丘のふもとの湧き水で汗だらけになった顔を洗ってから、周平は丘に登って風呂敷いっぱいに茶を摘ん

だ。

摘み終ると杜燦培の墓の前に坐って一服つけた。ここに来たのはこれで二度目なのに、周平は知人の墓を訪ねるような親しみを感じている。

なぜ自分はこの男の墓に親しみを感じるのか、と周平はぼんやり思った。墓石に漢字が彫ってあるからだろうと自分に答えながら、周平はブラジルに知人の墓が一つもないことを、今更ながら不思議なことのよう意識した。三十三才にもなって親類知己の死に逢わないはずはない。たった一年前にも親友の死を看取った。しかし、彼は今、すべての死の想い出から遠い土地にいる。死の記憶のない土地：過去をスパッと切り落とされた自分を感じない訳にはいかない。その切り口の生々しいうちに移民たちはブラジルに接木されようとしているのだった新たな死の記憶……新たな根をここで得ようとしているのだった。

この杜たち中国移民は接木に失敗して、そのまま枯れてしまった枝のようだった。笠戸丸移民七九四人が接木に成功してブラジルに根をもつか、再び日本に帰るか、いずれにしても、杜たちのように立ち枯れになるのだけは防がねばならない、と周平は思った。しかし、どうやって？ 周平たちはまったく無力だった。まず自分が食うのが先決問題なのだ。しかし食う

ことに追われていたら、いつのまにか移民たちは流亡してしまふのだ。……思考は堂々めぐりをする。ただ焦燥感だけが残った

「あんたも淋しいだろうな」

と周平は墓に云った。

まだ日があるが、十一月の命日に墓参りをしよう、と周平は思った。もしかしたらこの男の友人たち、この墓を建てた人々が現われるかも知れない。その様子を見てみたいと思った。杜が孤独でない証明を見たい：あまりこの裏に淋しさを感じてはいけないのだ、と思う。

「わしはランタンを作って、あんたの墓にかざってやろう」

と周平は云った。

学生時代下宿した家が中国風のランタンや折りたたみ式の扇型色紙などの内職仕事をしていた勉強につかれると、気晴らしに手伝ったものだった。木材を組立てて極彩色の絹紙を張りつけただけの簡単なものから、幾重にも紙を切って細工をした複雑なものまでひととおり周平は作れるようになった。「上塚さんは器用だねえ」と下宿のおばさんに云われたものだった。小さな娘たちも初めの頃は周平が手伝うとはにかんで仕事が為にくそうだったが、馴れると得意になって六

ケ敷い細工ものの作り方を彼に教えたりしたものだった。

そんなことを思い出しているうちに、フツと周平は考える目付になった。――あんなオモチャを作ったら売れるのではないか――という気がしたのである。支那風の極彩色の絹紙を入手できるかどうか分らないが、なければアニリン塗料で染めて作ればよい。――あれは売れる！あれを作ろう。ランタンや細工物やブラジルにない種類の玩具を作れば、きっと売れる。資本もいらぬし、手先の細かい日本人に向いている――。

周平は風呂敷包みをつかんで、立ち上った。じっとしていられなかった。墓に目札すると、歩きだした。歩きながら、さしあたって何を作ろうか、と考えた。箱型のランタンがいちばん手とり早くてよさそうだった。竹と木とブリキ板と絹紙があればできる。

周平はさつき来た道を帰って行く。柵のなかの空地にブリキの破片や木材が置いてある所を通った。置いてある、と云うより捨ててあるようだった。通りすぎながらあのブリキ板は使えそうだ、と周平は思った。

戻ると、それでもちよつと周囲を見廻してから、鉄線に半身を入れてブリキの一片と木切れをとった。ランタンだけでなく、大砲のオモチャとか兵隊さんなど

のブリキ製玩具ができるかもしれない。何かを作ろう
と思うと、今迄気にとめなかった道端の針金やガラス
の破片までが周平の創意によつて再生されるのを待つ
ているように意味ありげに見えだした。周平は石ころ
やビンのかけらなどの前にも立ちどまって、何かにな
らないか、と考えた。

ブラス区にはいたる処、半湿地帯の空地がある。と
ころどころに竹やぶがある。周平は切りすてられて枯
れている竹から、手頃な一本を拾った。ブリキと竹の
連想から、竹トンボも作ろうと思った。あれなら、小
刀さえあればできる。竹のヘラの代りにブリキを使え
ば簡単である。周平が知っているかぎりでは、サンパ
ウロには未だ玩具専門店はない。雑貨店で人形とか
ヨーヨー、ビー玉などを見かけただけだった。竹トン
ボなどがはたして売れるかどうか自信はないが、とに
かく作ってみようと周平は思った。

周平が急いで帰ると、宮崎だけが戻っていた。

「宮崎くん。ブリキを切るのだが日本バサミでは切れ
んから、誰かにブリキを切るようなものを借りてきて
くれんか」

「はあ。何をするんですか」

「竹トンボを作るのさ」

「なるほど。竹トンボですか。しかし、又、なんで竹トンボを作るのですか？」

「売るのさ」

「なるほど、しかし、売れますか」

「それは分らんさ。作ってみなければなあ」

ブリキの羽根に合わせて竹の心棒をけづったが、羽根が大きすぎたので随分不恰好な竹トンボができた。

「第一号は不細工ですね」

「まあ、飛べばいい。早速試験飛行をしてみよう」

二人は木ぼつくりをカタコトいわせて中庭へ出た。周平が心棒を掌でこすりながらパツと手を開くと、竹トンボは勢いよく上昇して屋根より高く舞い上った。子供たちが目ざとく見付けて、ワツと二人の周りに集まる。

今度は宮崎が飛ばす。一人の子供が駈けていって竹トンボをひろった。

「僕にやらせて」

「うん、いいよ」

その子供は斜めに竹をはさんでひねったので、竹トンボははすかに飛んですぐ落ちた。宮崎が子供に飛ばし方を教えてやると、子供たちはすぐ覚えた。

「僕にくれ！」

「僕にちょうだい」

一人が云いだすと子供たちは大騒ぎをして、竹トンボを欲しがった。騒ぎをききつけて、シモネツチのおかみさんまで出てきた。

「何だねえ」

周平は笑いながら、竹トンボを飛ばした。

「マア、すばらしい。初めてこんなオモチャを見たわ」とおかみさんは大声をだした。周平は何と云っているのか分らないが、とにかく感心されているらしいことは解ったので満足している。イタリアにだって竹トンボぐらいあるだろうが、とにかくシモネツチのおかみさんは初めて見たと云っている。

「竹トンボを初めて見た、とおばさんが云ってますよ」

と宮崎が周平に伝えた。

「売れますよ、上塚さん。これは必ず売れますよ。子供たちがこんなに欲しがるのだから」

宮崎は嬉しそうに云う。周平はその竹トンボをシモネツチの子供にやった。ほかの子供達には、あとで作ってやるから、と宮崎がなだめた。

部屋に戻ると、周平は云った。

「宮崎くん。早速ブリキバサミとペンキとヤスリを買ってきてくれ。そのくらいなら今ある金で足りるだろう。もし不足したら藤崎商会へ行って借りてくれた

まえ」

「はい。ペンキはどんな色がいいでしょう」

「子供がよろこぶように、赤がいいだろうな」

「そうですね」

「ノコギリとナイフはあるからな。わしは今のうちに竹を少し集めてくる。それからブリキ集めは夜にしよう」

「どうして夜にするのですか？」

宮崎は怪訝そうな顔をした。周平はニヤニヤしながら人差し指をだして、カギ型にした。

「エッ！ かっぱらうんですか」

「シート！ 大きな声を出さないで……と云ったところで日本語が分る気遣いはないが。まあ、そんなところさ」

周平は愉快そうに笑った。宮崎は久し振りで周平の高笑いを聞いた、と思った。ボソボソした話し声に特長はないが、笑い方だけはいかにも楽しそうに笑う人だった

「ああ、それからブリキに穴を開ける道具だが、四角い穴の方がしつかりと止るから千枚通しの四角いようなものがあつたら、探してくれたまえ」

「はい」

宮崎は鞠躬如として、出ていった。

その夜、いつものようにやつとの思いでマンジョカ団子の汁を流し込むと、四人は勇んでブリキとりに出発した。

云いあわせた訳ではないのに、目だたぬよいに自然に白シャツを避けたから、それぞれ耕地での通訳時代の服装になった。ヴィラを出て露路を曲ると、向うの屋根の上に南十字星が輝いている。夜陰にまざれる感じで一同は、ぞろぞろ歩いた。“徒党を組んだ”ふうだが、錆びたブリキを盗りに行くのでは大した事もなかった。

現場につくと、松永と宮崎が有刺鉄線を潜って、星あかりで適当なブリキ板を選んで外の二人に渡した。二人が鉄線の外へ出ると、一同はそれを新聞にくるんで小脇にはさむと、又ぞろぞろと戻ったり　とるまでは宝を掘りに行くような気がしていたのに帰り路は四人とも、自分たちが小脇にかかえているモノがいかに貧相なモノかと思わない訳にはいかなかった。こんなモノが金になりそうには思えない。松永と香山は勿論のこと、周平と宮崎でさえ、昼間子供たちが欲しがったのは何かの偶然にすぎないような気がしてきた。

——骨折り損のくたびれ儲けではないか——四人とも芋くさいゲップをしながら（いつもこの時間に芋の

ゲップがでた）そう思っていた。

部屋に帰って拵げてみると、上手に切れば数百のプロペラがとれる。四人は、とにかく仕事のできたので又、活気づいた。厚紙にプロペラの原型を切り抜いてそれに合わせて松永がブリキを切る。一人は紙やすりでせっせと磨いて、穴を開ける。一方では竹をけずって心棒をつくる。ペンキを塗って糸につるして乾かすランプの光の中に、赤い千羽鶴のように竹トンボがふえていった。

五月になった。

青年たちは竹トンボやランタンを作っている。昨夜から冷えて、みんなスウェーターやらウールの下着を着ている。試作中の玩具の手を休めた周平が、お茶をのみながらふと思いだしたように云った。

「この頃、だれもオナラをしなくなつたな」

皆は顔を見合せて一瞬考える目付きをしたが、すぐにドツと笑った。芋を主食にすると、ちよつと体の位置を変えただけでもオナラが出た。初めのうちこそ、あやまっていたが、そのうち誰も氣にとめなくなつた。

ため息のようにしげしげと出たものだった。竹トンボが売れ、（もつとも安かつたが）どうやら人並みの

ものを食うようになると、いつのまにかオナラも出なくなつたお汁粉屋を失敗した松下正彦が周平たちの玩具の行商を引きうけている。ランタンや、開げると丸型や扇型になる絹紙の細工物などを作るようになった。から、少しつつ利益があがるようになった。

「わしはお茶をとりに行ってくる。宮崎くんも来んか」

「はい」

他の二人も連れて行きたかったが、この部屋へ訪ねてくる移民たちは多い。それぞれせっぱつまつた用件をかかえてくる人々だったから、片時もここを無人にする訳にはいかないのだ。場合によつては泊めてやらねばならない。周平は何やら風呂敷包みを作つて、部屋を出た。

カンブシーの丘で茶をつむと、周平は杜の墓の前へ坐つた。

「ほう、支那人の墓ですか」

と宮崎がおどろいた。

周平は風呂敷包みをほどくとコップを出して持ってきたビンから茶をそそいだ。黄緑色の茶を満したコップを杜の墓前に供えると、

「どれ、わしたちも御相伴させてもらおうかな。ただし こつちの方だ」

と云ってピング酒のビンを出した。

宮崎が酒をついでいる間、周平は背広の内ポケットから二つの竹トンボを出した。それをそつと墓前の土に挿す。周平と宮崎はそれを眺めながら酒をのんだ。周平は杜に感謝の気持があった。杜の墓を見ていて玩具作りを思いついたのだ。墓を見なくても、いつかは思いついたかも知れないが、とにかく墓の前で思いついたことに、或る因縁を感じた。それから杜が辿った運命と周平たちが毎日たたかっている境遇のことも……。

周平が黙っているので、宮崎も黙って飲む。赤い竹トンボは、そこに一輪の花が咲きだしたように見えた。

(終)

あとがき（サンパウロ新聞社版）

ブラジルに於ける日本語読者は決して少なくはないのだが、広大な地域に散在しているために流通がむずかしく単行本では採算がとれない。個人の小説集としては、私の知るかぎりでは、三十年ほど前に「北島文子集」一冊があるのみである。そのような困難を熟知の上、出版を快諾してくれたサンパウロ新聞社水本社長にお礼を申し上げたい。同社の中曽根氏には版組みから校正に至るまで、本業の記者のかたわら一切の仕事をしていたいただいた。氏の奔走がなかったらこの本は陽の目を見なかった。

表題作の「森の夢」はあと二つの性格の異なった入植地を書いて三部作にしたいと思っている。それぞれ主人公が登場するが、全体を通じての主人公は森である。

「聖人たちの湾」は移民の草分け、南樹鈴木貞次郎翁の晩年のエピソードで、やや純文学的なタッチで書いた。実際の翁はバイヤからサンパウロへ帰ってきた

のだが、あのような死にざまをしてもおかしくない人だった。

「中国人の墓」は、第二回移民船が着くまでの笠戸丸移民の群像を連作にしたいと意図していて、その第一話として書いてみた。笠戸丸移民が若者だけの集りだったということは今日では案外忘れられている。コーヒー園を逃げだして男は大工、女は女中になったのだが、先駆移民の一人石川芳園女史の「春風や門を出ずれば下婢ならず」のロマンチズムと心意気で精一杯生きた人々を描きたいと思っている。

いつ仕上るか、再び出版できるか、見当もつかないが、それが私の「夢」の一つである。

著者

森の夢

一九七九年十一月 第一刷発行

著者 醍醐麻沙夫

発行所 サンパウロ新聞社

ブラジル国サンパウロ市

トマース・デ・リマ街五七三番

電話（サンパウロ） 二七九・五九二二

二七八・五八七二

印刷・製本 グラフィカ・M・M

一九七九年一月 第一刷発行

一九八〇年五月 第二刷発行

一九八〇年一〇月 第三刷発行

一九八六年十二月 第四刷発行

あとがき（冬樹社版）

表題作の「森の夢」は、ブラジルの日系社会でも、全貌を一度も知られないままに記憶が薄れ伝説的な存在になりつつあった平野運平と言う男と、囲りの開拓者たちの群像をあきらかにしようと言う意図によって書いた。

もう十年ほど前のことになるが、榛葉彦平氏に実兄（運平）の想い出を色々伺ったことがある。そのとき、運平が外語でスペイン語を学んだ動機を訊ねると、ちよつと考えてから「はつきりした目的はなかった。しいて言えば、青年の憧れや夢のようなものだったでしょう」と答えた。

そのことが、この作品のモチーフになっている。他愛ない夢をもって異国にフラフラとやって来た若者が、移民の生活や原生林にぶつかってどう生きるか……それは当時の私の生き方にも重なって、折にふれてはその若者の軌跡を調べるようになったのだった。

しかし、運平の生涯のクライマックスは原生林の開拓にあり、それを文章で表現できるだけの体験がなかったもので、彼の生涯を自分が知っただけにとどめていて、書くつもりはなかった。ところが、いつの間にか自然（森や河）に惹かれるようになり、開拓地を訪ねたり、キャンプ行を重ねているうちに、不意に、運平の物語りが書けると思ったのだった。

この物語りに登場する人物は、全員が実名なので、誤りのないように最も気を配った。未知の部分に想像の翼をのばしたほうが書きやすいと感じたこともあったが、運平を素材にしたフィクションを書く意図はなく、自分が知り得たことを再現できればよいと思った。

登場人物たちは、運平の死後も、それぞれが先駆者としての変化の多い人生を辿った。どの一人をとってもそこには波瀾と充実があるが、一人だけ例として上げると、マラリヤの助っ人にやって来た看護人戸田義雄は、のちにアマゾンに移り医者を開業し、平野植民地でのマラリヤの体験を生かして多くの人命を救った。ドクトル・トダと言うと、現住民にも慕われて「アマゾンの聖人」とさえ呼ばれた。

私はついにお会いする機会がなかったが、聖人と言

う堅苦しい人格ではなく、医は仁術と言うことを当然として実行した人柄であつたようである。平野植民地に現われた若年の戸田義雄に関しては、大切なキニーネを売ってしまったり病人の将校用外套を借用して馬に乗って得意になったりと、やや軽っぽい存在のような印象を受けるのだが、ここで生死の境をくぐり抜けたことが、彼をのちに大成させる要因になったと想像しても許されるのではないかと思っている。

「聖人たちの湾」は移民の草分けと呼ばれる鈴木貞次郎の晩年のエピソードを描いたものだが、初めサンパウロ新聞に発表したときは名を変えてあつた。実在の鈴木貞次郎はバイヤで病死せず、失敗に終つた調査のちサンパウロに帰つたからである。しかし、ここでは「森の夢」との関連もあり、ほぼ本名にした。「森の夢」では通訳たちをサントス港に迎えに来て以来、最後まで登場する人物だから、本名の方が読者の理解を助けると思う。「聖人たちの湾」の会話の大半は、実際に翁と私が交したものである。

ここに収めた二作は、ブラジルの日系社会の人々を直接の読者として書かれ、狭い場所ではあるが、それ

なりの評価を得ることができ私は満足していた。引きつづき日本で刊行されることになり、日本の読者にどのような受けとめられるか心配だが、それはもはや作者の手のおよばない次元である。この作品を拾いあげ、刊行に努力して下さった冬樹社編集部の皆様にお礼を申し上げます。

一九八一年四月

醍醐麻沙夫

（注・「中国人の墓」はサンパウロ新聞社刊のみに収録）

森の夢

ブラジル日本人移民の記録

著者 醍醐麻沙夫（だいがまさお）

一九八一年五月二五日発行 初版第一刷発行

発行者 高橋直良

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 株式会社 冬樹社

著者略歴

一九三五年 横浜に生まれる。学習院大学哲学科卒業。サンパウロ新聞文学賞。オール読物新人賞などを受賞。

近著に「その窓からなにが見えるか」（光文社）

「原生林に猛魚を追う」（講談社）「南半球のザ・ジャパニーズ」（文藝春秋社）などがある。